

一般国道296号国道道路改良事業
埋蔵文化財調査報告書2

－佐倉市高岡砦跡・大蛇麻賀多脇遺跡－

平成8年3月

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

一般国道296号国道道路改良事業 埋蔵文化財調査報告書 2

さくらしたかおかとりで おおじやまかたわき
—佐倉市高岡砦跡・大蛇麻賀多脇遺跡—



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第279集として、千葉県土木部の一般国道296号国道道路改良事業に伴って実施した佐倉市高岡砦跡・大蛇麻賀多脇遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代から中世にかけての各時代の遺構、遺物が発見されています。また、高岡砦跡では、砦の全容を明らかにするなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また郷土の歴史及び埋蔵文化財についての理解、関心を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成8年3月29日

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 中 村 好 成

凡　　例

- 1 本書は、千葉県土木部による一般国道296号国道道路改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、佐倉市高岡字大崎337-1ほかに所在する高岡砦跡（遺跡コード212-036）、佐倉市大蛇町字麻賀多脇403-1ほかに所在する大蛇麻賀多脇遺跡（遺跡コード212-037）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが行った。
- 4 発掘調査は、調査研究部長 高木博彦、所長 田坂 浩の指導のもと、主任技師 横山 仁が行い、整理作業は、調査研究部長 西山太郎、所長 谷 旬の指導のもと、調査係長 香取正彦が下記の期間に行った。

発掘調査	高岡砦跡	平成5年7月1日～同年11月10日
	大蛇麻賀多脇遺跡	平成5年11月11日～平成6年1月31日
整理作業		平成6・7年度

- 5 本書の執筆は、調査係長 香取正彦が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部道路建設課、千葉県印旛土木事務所、佐倉市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「酒々井」(NI-54-19-10-4)
「佐倉」(NI-54-19-14-2)

第2図 参謀本部陸軍部測量局 1/20,000第一軍管地方迅速図「佐倉」
(大日本測量(株)資料調査部複製) 「中川村」

第3図 佐倉市役所発行 1/2,500佐倉市基本図 E-6・E-7

第26図 佐倉市役所発行 1/2,500佐倉市基本図 E-6・E-7

酒々井町役場発行 1/2,500酒々井町地形図 7

- 8 周辺地形の航空写真は、京葉測量株式会社による平成6年撮影のものを使用し、図版14の高岡砦空撮は、空中写真測量時に撮影したものを使用した。

- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

- 10 本書で呼称した遺構番号は、編集の都合上、調査時の番号と異なる。

- 11 描図に使用したスクリーントーンの用例は、次のとおりである。

住居跡のスクリーントーン：焼土範囲・カマド  · 

土器面のスクリーントーン：赤彩・黒色処理  · 

本文目次

Iはじめ	1
1 調査の概要	1
2 遺跡の位置と歴史的環境	1
II高岡砦跡	6
1 調査区の概要	6
2 遺構	6
(1) 壁穴住居跡	6
(2) 据立柱建物跡	13
(3) 土坑	14
(4) 溝	14
(5) 砧跡	14
3 遺物	16
(1) 壁穴住居跡	16
(2) グリッド等出土遺物	28
III大蛇麻賀多脇遺跡	54
1 調査区の概要	54
2 旧石器時代石器ブロック	54
3 土坑	56
4 台地整形遺構・井戸跡	57
5 遺物集中地区	60
6 グリッド等出土遺物	64
IVまとめ	85
報告書抄録	卷末

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図(1).....	4	第27図 大蛇麻賀多脇遺跡遺構・グリッド配置図.....	67-68
第2図 遺跡位置図(2).....	5	第28図 Aブロック・Aブロック出土石器.....	69
第3図 高岡砦跡周辺地形図.....	7	第29図 Bブロック・Bブロック出土石器.....	70
第4図 高岡遺跡砦跡遺構・グリッド配置図.....	31-32	第30図 土坑(1~7号).....	71
第5図 1号住居跡.....	33	第31図 台地整形遺構・井戸跡.....	72
第6図 2・3号住居跡.....	34	第32図 台地整形遺構土層断面図、1・2号井戸跡.....	73
第7図 3号住居跡カマド、4号住居跡.....	35	第33図 台地整形遺構出土遺物(1).....	74
第8図 5・6号住居跡.....	36	第34図 台地整形遺構出土遺物(2).....	75
第9図 7・8・9号住居跡.....	37	第35図 台地整形遺構出土遺物(3)、井戸跡出土遺物.....	76
第10図 10・11号住居跡.....	38	第36図 遺物集中地区.....	77
第11図 12・13号住居跡.....	39	第37図 遺物集中地区出土遺物(1).....	78
第12図 14号住居跡.....	40	第38図 遺物集中地区出土遺物(2).....	79
第13図 15・16号住居跡.....	41	第39図 遺物集中地区出土遺物(3).....	80
第14図 1・2号据立柱建物跡.....	42	第40図 遺物集中地区出土遺物(4).....	81
第15図 1・2・3号土坑、1号溝.....	43	第41図 グリッド等出土遺物(1).....	82
第16図 高岡砦跡概念図.....	44	第42図 グリッド等出土遺物(2).....	83
第17図 1・3号住居跡出土遺物.....	45	第43図 グリッド等出土遺物(3).....	84
第18図 4・5号住居跡出土遺物.....	46		
第19図 6・7・8・9号住居跡、10号住居跡(1)出土遺物.....	47		
第20図 10号住居跡(2)出土遺物.....	48		
第21図 11号住居跡出土遺物.....	49		
第22図 13号住居跡出土遺物.....	50		
第23図 14号住居跡出土遺物.....	51		
第24図 15・16号住居跡、グリッド等出土遺物(1).....	52		
第25図 グリッド等出土遺物(2).....	53		
第26図 大蛇麻賀多脇遺跡周辺地形図.....	55		

図版目次

- 図版1 航空写真
図版2 全景(西より) 全景(東より) 1号住居跡全景
図版3 1号住居跡カマド 2号住居跡全景
3号住居跡全景
図版4 3号住居跡カマド 3号住居跡カマド掘方 4号住居跡全景
図版5 4号住居跡カマド 5・6号住居跡全景 5号住居跡カマド遺物
図版6 5号住居跡カマド 7号住居跡全景
7号住居跡カマド
図版7 8号住居跡全景 9号住居跡全景
10号住居跡歴先出土状況 10号住居跡全景
図版8 11号住居跡全景 11号住居跡カマド
12号住居跡全景
図版9 13号住居跡全景 13号住居跡カマド
13号住居跡カマド遺物
図版10 13号住居跡旧カマド 13号住居跡旧カマド 14号住居跡全景
図版11 14号住居跡カマド 15号住居跡全景
16号住居跡・3号土坑全景
図版12 1号掘立柱建物跡全景 2号掘立柱建物跡 1号溝全景 1・2号土坑
図版13 高岡砦跡全景
図版14 1・3号住居跡出土遺物
図版15 3・4・5号住居跡出土遺物
図版16 5・6・7・8・9号住居跡出土遺物
図版17 10号住居跡出土遺物
図版18 10・11号住居跡出土遺物
図版19 11・13号住居跡出土遺物
図版20 13号住居跡出土遺物
図版21 14号住居跡出土遺物
図版22 14・15号住居跡出土遺物
図版23 16号住居跡出土遺物、グリッド等出土遺物、石器
図版24 高岡砦跡出土遺物(陶器・古錢・鐵滓)
図版25 航空写真
図版26 Aブロック Bブロック 1号土坑
図版27 2号土坑 3号土坑 4号土坑
図版28 5号土坑 6号土坑 7号土坑
図版29 台地整形造構遺物出土状況 台地整形造構 1・2号井戸跡
図版30 1号井戸跡 2号井戸跡 遺物集中地区遺物出土状況 遺物集中地区遺物取上後
図版31 台地整形造構出土遺物(1)
図版32 台地整形造構出土遺物(2)、井戸跡出土遺物、遺物集中地区出土遺物(1)
図版33 遺物集中地区出土遺物(2)
図版34 遺物集中地区出土遺物(3)、グリッド等出土遺物(1)
図版35 グリッド等出土遺物(2)、石器、古錢、鐵滓

I はじめに

1 調査の概要

(1) 調査の経緯と経過

酒々井・佐倉地区の一般国道296号道路改良事業地内には、東から上本佐倉上宿遺跡、本佐倉北大堀遺跡、大蛇麻賀多脇遺跡、高岡砦跡の4遺跡が確認されている。

調査は、昭和58年度から開始され、はじめに本佐倉北大堀遺跡の発掘調査が実施された。昭和59年度には、上本佐倉上宿遺跡、60年度には上本佐倉上宿遺跡、61年度には上本佐倉上宿遺跡、本佐倉北大堀遺跡、62年度にも本佐倉北大堀遺跡が調査された。そして、平成5年度に、高岡砦跡、大蛇麻賀多脇遺跡の発掘調査が実施された。なお、発掘調査と並行して、整理作業も進められ、発掘が行われない年度には整理作業を進めた。

(2) 調査の方法

発掘調査を始めるに当たり、遺構、遺物などの記録のため、調査対象区域に公共座標をもとに $40\text{m} \times 40\text{m}$ の大グリッドと、大グリッド内を $4\text{m} \times 4\text{m}$ に分割した小グリッドを設定した。また、大グリッドの設定杭に標高を置いた。

発掘調査は、基本的には上層確認調査、上層本調査、下層確認調査、下層本調査の順に実施した。上層確認調査は、グッパリド及びトレンチを地形に合わせて設定し、遺構、遺物の分布を確認した。下層確認調査は、 $2\text{m} \times 2\text{m}$ のグリッドを地形に合わせて設定し、立川ローム層を調査し、旧石器時代の遺物の確認を行った。それぞれの確認調査後、必要な範囲について本調査を実施した。

高岡砦跡は、調査対象面積が $5,900\text{m}^2$ である。上層の確認調査面積は 590m^2 で、その結果、 $2,900\text{m}^2$ の上層本調査を実施した。下層の確認調査面積は 104m^2 であるが、旧石器時代の遺物は検出されなかったので、確認調査で終了した。また、砦跡全体を対象とした空中写真測量を行い、砦跡の構造などを調査した。

大蛇麻賀多脇遺跡は、調査対象面積が $4,300\text{m}^2$ である。上層の確認調査面積は 430m^2 で、その結果、 $1,000\text{m}^2$ の上層本調査を実施した。下層の確認調査面積は 172m^2 である。その結果、立川ローム層中に石器が確認されたので、 380m^2 の下層本調査を実施した。

2 遺跡の位置と歴史的環境（第1図）

高岡砦跡は、佐倉市高岡字大崎337-1ほかに所在し、大蛇麻賀多脇遺跡は、佐倉市大蛇町字麻賀多脇403-1ほかに所在する。両遺跡とも印旛沼に向かって突出する樹状に発達した標高

25m～35mの台地上に位置する。遺跡が位置する台地は、北側に印旛沼があり、南側に高崎川（印旛沼直前で鹿島川に合流）が流れ、それぞれに流入する小河川により開析され、複雑な地形になっている。

印旛沼及び高崎川に臨む台地上には多くの遺跡が所在し、発掘調査が行われた主な遺跡は、次のとおりである¹⁾。

1. 高岡砦跡（佐倉市）（本書）
2. 大蛇麻賀多脇遺跡（佐倉市）（本書）
3. 本佐倉北大堀遺跡・本佐倉南大堀遺跡（酒々井町）（集落跡・館跡。旧石器時代、弥生時代後期、奈良・平安時代、中世）
4. 上本佐倉上宿遺跡（酒々井町）（集落跡・館跡。奈良・平安時代、中・近世）
5. 三ヶ月山貝塚（佐倉市）（貝塚。縄文時代早期）
6. 将門鹿島台遺跡（佐倉市）（集落跡。縄文時代早期、奈良・平安時代）
7. 大蛇石橋台遺跡（佐倉市）（散布地。縄文時代中期）
8. カンカンムロ横穴群（酒々井町）（古墳時代後期）
9. 本佐倉猿楽場遺跡（酒々井町）（散布地・墓。縄文時代早期、平安時代？）
10. 本佐倉大堀遺跡（酒々井町）（集落跡・館跡。旧石器時代、縄文時代、奈良・平安時代、中・近世）
11. 本佐倉外宿遺跡（酒々井町）（散布地。縄文時代、古墳時代後期、平安時代、中・近世）
12. 長熊庵寺（佐倉市）（寺院跡。飛鳥時代）
13. 新山1号墳（佐倉市）（塚）
14. 高岡大福寺遺跡（佐倉市）（集落跡。縄文時代早・中・後期、弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代）
15. 高岡谷津遺跡（佐倉市）（集落跡・寺院跡？。弥生時代後期、平安時代）
16. 高岡大山遺跡（佐倉市）（集落跡。縄文時代早・前期、弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代）
17. 馬橋鶯尾余Ⅱ遺跡（酒々井町）（散布地、集落跡。縄文時代早期、弥生時代後期、古墳時代前期、平安時代）
18. 馬橋鶯尾余Ⅰ遺跡（酒々井町）（集落跡・古墳。弥生時代後期、古墳時代前期、平安時代）
19. 馬橋鶯田遺跡（酒々井町）（散布地。縄文時代早・中・後期）
20. 鎌木源訪尾余遺跡（佐倉市）（集落跡。縄文時代早・前期、弥生時代後期、古墳時代前・後期、平安時代）
21. 寒風遺跡（佐倉市）（集落跡・塚。古墳時代後期）

22. 八木蒲田谷津遺跡（佐倉市）（集落跡。縄文時代早期、弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代）

また、城館関係の遺跡も多く所在し、主なものは次のとおりである。

23. 本佐倉城跡（酒々井町）

24. 右京館跡（酒々井町）

25. 本佐倉向根古谷遺跡（酒々井町）

26. 妙巖寺館跡（酒々井町）

27. 大堀館跡（酒々井町）

28. 長勝寺脇館跡（酒々井町）

29. 北押出し遺跡（酒々井町）

30. 長熊砦跡（佐倉市）

31. 石川館跡（佐倉市）

32. 時崎城跡（佐倉市）

33. 城城跡（佐倉市）

34. 金部田城跡（佐倉市）

これらの城館関連の遺跡で調査された遺跡は、23・28・29・31があり、33・34は測量調査が実施されている²⁾。

注1 『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)－東葛飾・印旛地区－』千葉県教育委員会 昭和63年

2 23は確認調査及び測量調査が実施されている。

『財團法人 印旛都市文化財センター年報 7 一平成2年度ー』1991

『財團法人 印旛都市文化財センター年報 8 一平成3年度ー』1992

『財團法人 印旛都市文化財センター年報 9 一平成4年度ー』1993

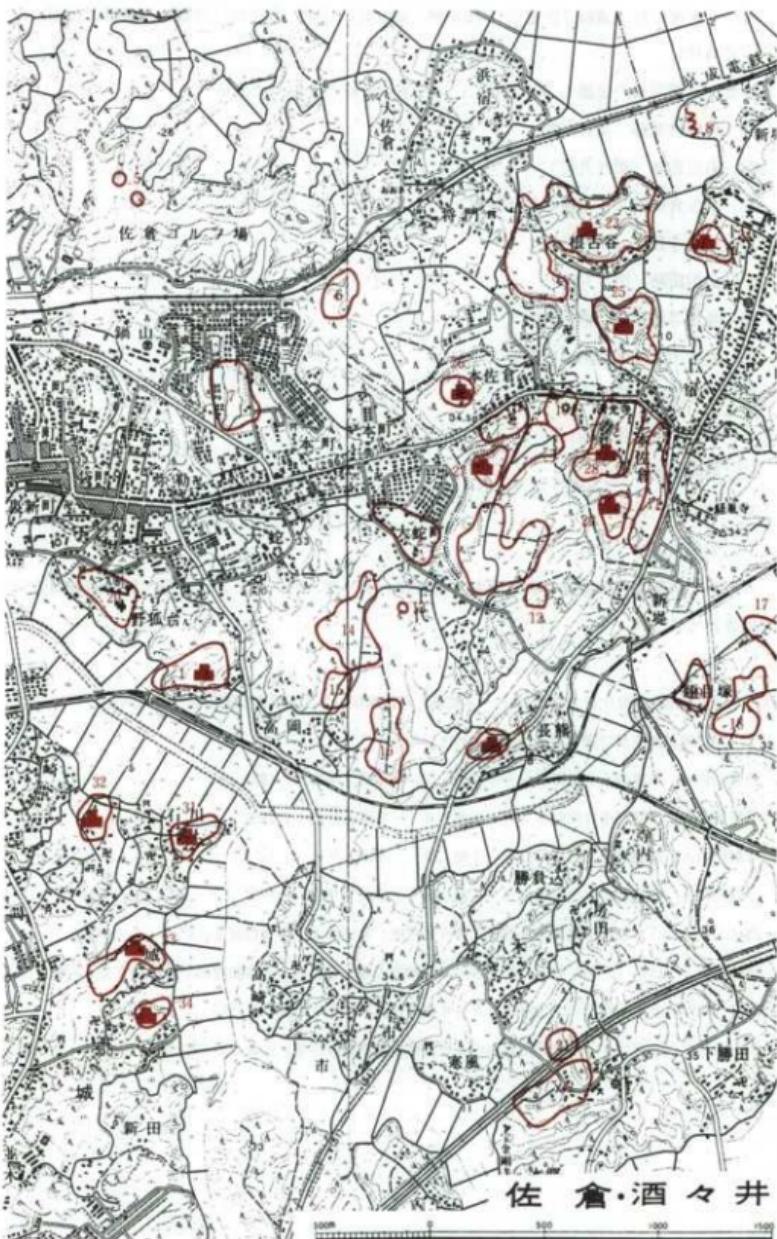
『財團法人 印旛都市文化財センター年報 10 一平成5年度ー』1994

28は木内達彦『千葉県印旛郡酒々井町長勝寺脇館跡』財團法人 印旛都市文化財センター 1990

29は村田一男ほか『千葉県酒々井町北押出し遺跡調査報告書』酒々井町北押出し遺跡調査会 1984

31は『財團法人 印旛都市文化財センター年報 10 一平成5年度ー』1994

33・34は外山信司ほか『千葉県佐倉市中近世城跡測量調査報告書』佐倉市教育委員会 1988



第1図 遺跡位置図(1) (1/25,000)



第2図 遺跡位置図(2) (1/20,000)

II 高岡砦跡

1 調査区の概要（第3・4図）

調査区は、高岡砦跡の北東部分を東西に帯状に切っている。高岡砦跡は、印旛沼に突出する樹状台地の南部に位置し、南に高崎川を望む東西に細長い小舌状台地を使用している。

調査区内からは、主に古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての集落跡が検出された。砦跡関連では、腰郭、土塁跡が南端に沿って検出されているが、掘立柱建物跡などの居住関係の遺構は検出されなかった。また、集落跡は尾根上の平坦面に位置しているが、比較的の遺構が残っているので、調査区の部分は、砦構築時に大規模な整形は行われなかつたと思われる。

2 遺構

検出された遺構は、竪穴住居跡16軒（古墳時代後期2軒、奈良・平安時代14軒）、奈良・平安時代掘立柱建物跡2棟、溝1条、土坑3基、腰郭1か所、土塁1条である。

各遺構の内容は、次のとおりである。

(1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は、東西に長い調査区の東半部に偏って分布し、特に斜面付近に集中している。

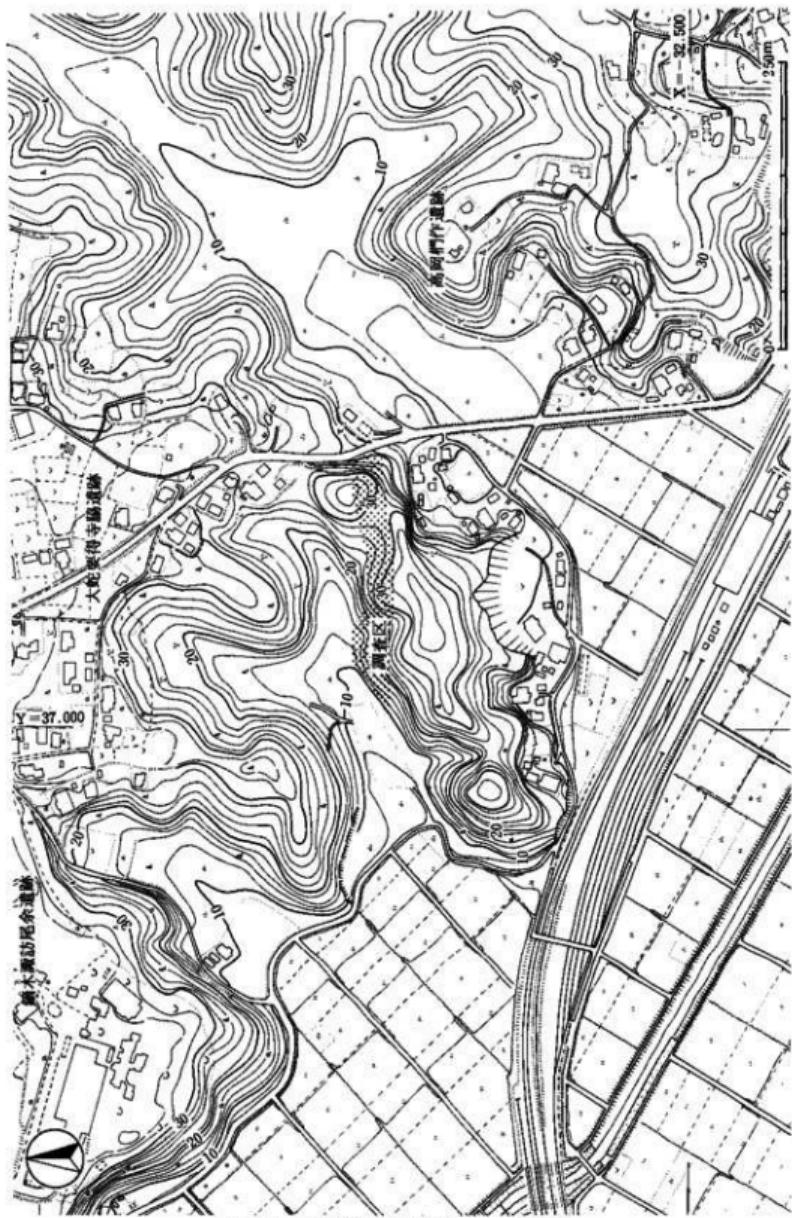
1号住居跡（第5図 図版2・3）

調査区の東端に位置する。1号掘立柱建物跡、1号溝と重複する。平面形は、一辺5.1mのややゆがんだ方形で、検出面からの深さは0.1m～0.35mである。カマドは、北西壁中央に位置する。カマドを中心とした主軸方向は、N-59°-Wである。壁はほぼ垂直で、壁周溝を持ち、南隅で中断するほかは全周する。幅15cm～20cm、深さ10cm～15cmである。床面はハードローム層中に造られ、ほぼ平坦で、柱穴に囲まれた範囲が、特に堅硬である。柱穴は、基本的には4穴であるが、それぞれに複数確認されているので、住居の建替えが行われたと考えられる。径40cm～65cm、深さ23cm～75cmである。

カマド対面の壁下にピットがある。50cm×40cmの椭円形、深さ20cmで、入口施設（梯子ピット）と考えられる。

カマドは、長さ95cm、幅117cmである。壁への掘込みは25cmの半円形状である。袖は、長さ65cm～70cm、幅36cm～42cmである。火床部は、径37cmで、よく焼土化している。煙道部から土器が出土している。

出土土器から、時期は8世紀末から9世紀初めごろと考えられる。



第3図 高岡寺跡周辺地形図 (1/5,000)

2号住居跡（第6図 図版3）

調査区の東端部、14号住居跡の北西部に位置する。平面形は、 $3.15m \times 3.0m$ のやや縦長の方形で、検出面からの深さは $0.1m \sim 0.2m$ である。カマドはない。長軸を中心とした主軸方向は、 $N - 30^\circ - E$ である。壁はほぼ垂直で、壁周溝はない。床面はソフトローム層中に造られ、ほぼ平坦で、堅紙である。柱穴、ピット等は検出されなかった。

出土土器はほとんどないが、破片から平安時代と考えられる。

3号住居跡（第6・7図 図版3・4）

調査区の東半部ほぼ中央の南端に位置する。住居跡の南 $1/4$ が調査区外になる。平面形は、一辺 $5.3m$ の方形と考えられ、検出面からの深さは $0.35m \sim 0.7m$ である。カマドは、北壁中央に位置する。カマドを中心とした主軸方向は、 $N - 21^\circ - W$ である。壁はほぼ垂直で、壁周溝を持ち、調査部分では全周する。幅 $15cm \sim 20cm$ 、深さ $3cm \sim 10cm$ である。床面はハードローム層中に造られ、ほぼ平坦で、柱穴に囲まれた範囲が、特に堅紙である。柱穴は4穴である。径 $50cm \sim 70cm$ 、深さ $50cm \sim 65cm$ である。断面に柱痕が確認され、柱は径 $15cm \sim 20cm$ と考えられる。

カマドは、長さ $100cm$ 、幅 $165cm$ である。壁への掘込みは $20cm$ の半円形状である。袖は、長さ $65cm \sim 95cm$ 、幅 $50cm \sim 57cm$ である。火床部は、径 $40cm$ 、深さ $10cm$ の浅い皿状で、よく焼土化している。カマド両側にピットが検出され、径 $30cm \sim 50cm$ 、深さ $18cm \sim 25cm$ である。カマド付属の施設のものと考えられる。

出土土器から、時期は9世紀前半ごろと考えられる。

4号住居跡（第7図 図版4・5）

調査区の東端、1号住居跡の北に位置する。北西隅が調査区外になる。平面形は、 $2.4m \times 2.6m$ のやや横長の方形で、検出面からの深さは $0.25m \sim 0.35m$ である。カマドは、北壁中央に位置する。カマドを中心とした主軸方向は、 $N - 31^\circ - E$ である。壁はほぼ垂直である。床面はソフトローム層中に造られ、ほぼ平坦である。壁周溝、柱穴、ピット等は検出されなかった。

カマドは、長さ $65cm$ 、幅 $100cm$ である。壁への掘込みは $30cm$ の半円形状である。袖は、長さ $25cm \sim 40cm$ 、幅 $23cm \sim 33cm$ である。火床部は、径 $45cm$ で、よく焼土化している。煙道部から土器、土製支脚が出土している。

出土土器から、時期は9世紀前半と考えられる。

5号住居跡（第8図 図版5・6）

調査区の東部端に位置する。6号住居跡、1号溝と重複する。重複関係は、6号住居跡よりも新しく、1号溝よりも古い。平面形は、 $2.9m \times 3.3m$ のやや横長の方形で、検出面からの深

さは最も深い箇所で、0.4mである。検出面が傾斜しているので、南東隅部分の壁が消滅している。カマドは、西壁中央に位置する。カマドを中心とした主軸方向は、N-64' -Wである。壁はほぼ垂直で、壁周溝を持ち、東壁、南壁東半部を除いて全周する。幅10cm~20cm、深さ5cm以下である。床面はほぼ平坦で、白色粘土層中に造られている。柱穴は検出されなかった。

カマド対面の壁下にピットがある。径50cm、深さ10cmで、入口施設（梯子ピット）と考えられる。

カマドは、長さ60cm、幅105cmである。壁への掘込みは15cmの半円形状である。袖は、長さ42cm~50cm、幅30cm~40cmである。火床部は、45cm×30cmの橢円形で、深さ5cmの浅い皿状を呈し、よく焼土化している。

出土土器から、時期は8世紀末から9世紀初めごろと考えられる。

6号住居跡（第8図 図版5）

調査区の東端部に位置する。5号住居跡、1号溝と重複し、3遺構の中で最も古い。5号住居跡との重複のため、カマド及び西壁付近を除き消滅している。平面形は、検出面が傾斜しているので、南壁が消滅しているが、一辺約3.4mの方形と考えられる。検出面からの深さは最も深い箇所で、0.3mである。カマドは、西壁中央に位置する。カマドを中心とした主軸方向は、N-85' -Wである。壁はほぼ垂直で、壁周溝が北西隅部分に残る。幅10cm~15cm、深さ5cm以下である。床面はほぼ平坦で、白色粘土層中に造られている。柱穴、ピット等は検出されなかった。

カマドは、長さ90cm、幅150cmである。壁への掘込みは30cmの半円形状である。左袖が重複で消滅している。右袖は、長さ60cm、幅40cmである。火床部は、径35cm、深さ5cmの浅い皿状で、よく焼土化している。火床部から土器が出土している。

出土土器及び5号住居跡との重複関係から、時期は古墳時代後期末ごろと考えられる。

7号住居跡（第9図 図版6）

調査区の東端部に位置する。1号据立柱建物跡と重複し、7号住居跡が古い。平面形は、3.4m×3.2mのやや縱長の方形で、検出面からの深さは最も深い箇所で、0.4mである。カマドは、西壁中央に位置する。カマドを中心とした主軸方向は、N-75' -Wである。壁はほぼ垂直で、壁周溝を持ち、南隅住居の北半部にみられる。幅15cm、深さ5cmである。床面はほぼ平坦で、ソフトローム層中に造られている。カマド前面部分が、特に堅緻である。柱穴は検出されなかった。

カマド対面の壁下にピットがある。径30cm、深さ10cmで、入口施設（梯子ピット）と考えられる。

カマドは、長さ65cm、幅115cmである。壁への掘込みは20cmの半円形状である。袖は、長さ40cm~45cm、幅23cm~50cmである。火床部は、径40cm、深さ5cmの浅い皿状で、よく焼土化している。煙道部から土器が出土している。

出土土器から、時期は8世紀末から9世紀初めごろと考えられる。

8号住居跡（第9図 図版7）

調査区の東端部の北端に位置する。北西隅が調査区外になる。平面形は、2.5m×1.8mの縦長方形で、検出面からの深さは0.1m~0.15mである。カマドはなく、長軸を中心とした主軸方向は、N-29°-Eである。壁はほぼ垂直である。床面は南西に向かってやや傾斜し、ソフトローム層中に造られている。

柱穴は検出されなかった。住居内北東寄りにピットがある。60cm×45cmの椭円形、深さ10cmで、入口施設のものかは不明である。

出土遺物は少量であるが、土器から、時期は9世紀前半と考えられる。

9号住居跡（第9図 図版7）

調査区の東端部、南に傾斜した斜面に位置する。2号土坑、1号溝と重複する。土層断面により、2号土坑より新しく、1号溝より古いと判断された。平面形は、一辺2.5mの方形で、検出面からの深さは0.05m~0.25mである。カマドはなく、北を中心とした主軸方向はほぼ真北である。壁はほぼ垂直で、壁周溝はない。床面は南に向かってやや傾斜し、白色粘土層中に造られている。

柱穴は検出されなかった。住居中央やや北寄りにピットがある。径40cm、深さ10cmである。

出土遺物は少量であるが、土器から、時期は9世紀前半と考えられる。

10号住居跡（第10図 図版7）

調査区の東端部北端に位置する。住居の北1/3が調査区外になる。平面形は、一辺3.35m×3.8mのやや横長の方形で、検出面からの深さは0.2m~0.3mである。カマドは検出されていないが、調査区外にあると考えられる。カマドの中心に想定した主軸方向は、N-50°-Wである。壁はほぼ垂直で、壁周溝を持ち、検出部分は全周する。幅20cm、深さ5cm~10cmである。床面はほぼ平坦で、ハードローム層中に造られている。床面中央部が、特に堅敏である。柱穴は検出されなかった。

カマド対面の壁下にピットがある。径45cm、深さ10cmで、入口施設（梯子ピット）と考えられる。南及び西隅に掘方と思われる窪みがある。幅50cm、深さ10cmである。

出土土器から、時期は9世紀前半と考えられる。鉄製品に特徴があり、鍔先、鋸（柄部をの

ぞきほぼ完形)などがある。

11号住居跡（第10図 図版8）

調査区の東端部に位置する。平面形は、一辺2.5mのややゆがんだ方形で、検出面からの深さは0.2m～0.4mである。カマドは、北西壁中央に位置する。カマドを中心とした主軸方向は、N-57°-Wである。壁はほぼ垂直で、壁周溝を持ち、カマド左側及び南西壁を除き、全周する。幅10cm～20cm、深さ5cm以下である。床面はほぼ平坦で、ソフトローム層中に造られている。カマド前面から住居中央部が、特に堅敏である。柱穴、ピットは検出されなかった。

カマドは、長さ80cm、幅125cmである。壁への掘込みは55cmの半円形状で、煙道部端に山砂が残る。袖は、長さ15cm～25cm、幅30cm～45cmである。住居廃棄時にカマドが壊されたと考えられ、袖の残りは悪い。また、袖の基部として、ロームが段状に残る。火床部は、径50cmで、焼土化している。内部から土器、土製支脚が出土している。

出土土器から、時期は9世紀前半と考えられる。

12号住居跡（第11図 図版8）

調査区の東端部に位置する。平面形は、2.9m×3.6mほどの横長の方形で、検出面からの深さは0.05mであるが、検出面が傾斜しているので、南西壁及び南東壁の南半分が消滅している。カマドは、北西壁中央に位置する。カマドを中心とした主軸方向は、N-38°-Wである。壁はほぼ垂直で、壁周溝、柱穴及びピットは検出されなかった。床面は南西に傾斜し、白色粘土層中に造られている。

カマドはほとんど壊されているが、残り部分は、長さ70cm、幅75cmである。壁への掘込みは45cmの丸みのある三角形状である。火床部は、35cm×25cmの梢円形で、よく焼土化している。

出土土器はほとんどが細片であるが、時期は平安時代と思われる。

13号住居跡（第11図 図版9・10）

調査区の東端部、12号住居跡の東隣に位置する。平面形は、一辺3.3mのややゆがんだ方形で、検出面からの深さは0.05m～0.6mである。検出面が傾斜しているので、南西壁の残りが悪い。カマドは、北東壁中央に位置する。カマドを中心とした主軸方向は、N-34°-Eである。また、北西壁中央やや北寄りにカマドの痕跡があり、カマドの造り替えが行われたと考えられる。古いカマドの方向はN-54°-Wである。壁はほぼ垂直で、壁周溝が全周する。幅10cm～20cm、深さ5cmである。床面はほぼ平坦で、ハードローム層と白色粘土層との境に造られている。カマド前面部が、特に堅敏である。柱穴は検出されなかった。

カマド対面の壁下の南東隅寄りにピットがある。径60cm、深さ25cmで、住居の入口施設（梯

子ピット）かどうかは不明である。また、カマド右側にもピットがある。径35cm、深さ10cmである。

カマドは、長さ75cm、幅100cmである。壁への掘込みは40cmの半円形状である。袖は、長さ30cm～35cm、幅30cmである。火床部は、径50cm、深さ10cmの浅い皿状で、よく焼土化している。内部から土器が出土している。

旧カマドは袖がほとんどなく、長さ85cm、幅70cmで、煙道部に段がある。カマド内から土器が出土している。

出土土器から、時期は9世紀前半と考えられる。

14号住居跡（第12図 図版10・11）

調査区の東端部、2号住居跡、12号住居跡の南側に位置する。平面形は、7.9m×7.6mのやや縦長の方形で、検出面からの深さは0.25m～0.8mである。検出面が傾斜しているので、南西壁の残りが悪い。カマドは、北西壁中央に位置する。カマドを中心とした主軸方向は、N-43°-Wである。壁はほぼ垂直で、壁周溝を持ち、南西壁及び北西壁の西3/4を除き全周する。幅10cm～20cm、深さ5cmである。床面は斜面のため、ソフトローム層から白色粘土層中に造られ、ほぼ平坦で、東半部が、特に堅敏である。柱穴は4穴である。径50cm～70cm、深さ40cm～55cmである。断面に柱の抜取り痕が確認された。

カマド対面の壁下にピットがある。60cm×50cmの椭円形、深さ45cmで、入口施設（梯子ピット）と考えられる。カマド右側に貯蔵穴がある。径65cm、深さ55cmである。

カマドは、長さ80cm、幅110cmである。壁への掘込みは20cmの半円形状である。袖は、長さ40cm～60cm、幅35cm～45cmである。火床部は、径30cmで、よく焼土化している。

出土土器から、時期は古墳時代後期と考えられる。

15号住居跡（第13図 図版11）

調査区の中央部の南端に位置する。住居跡の南東隅が調査区外になる。平面形は、3.5m×3.8mのやや横長の方形で、検出面からの深さは0.15m～0.35mである。検出面が傾斜しているので、南壁の残りは悪い。カマドは、北壁中央やや東寄りに位置する。カマドを中心とした主軸方向は、N-32°-Eである。壁はほぼ垂直で、壁周溝は検出されなかった。カマド右側の壁に山砂が貼られている。床面は黒色土層中に造られ、ほぼ平坦で、中央部分が、特に堅敏である。柱穴、ピットは検出されなかった。床面に35cm×25cmの椭円形焼土化部分がある。

カマドは、長さ55cm、幅75cmである。壁への掘込みは35cmの半円形状である。袖は右側のみで、長さ30cm、幅27cmである。火床部は、30cm×40cmの椭円形で、よく焼土化している。

出土土器から、時期は9世紀前半と考えられる。

16号住居跡（第13図 図版11）

調査区の東半部の南端に位置する。3号土坑と重複し、16号住居跡が古い。住居跡の南隅が調査区外になる。平面形は、一辺3.5mの方形と考えられ、検出面からの深さは0.1m～0.3mである。検出面が傾斜しているので、南部分の壁の残りは悪い。カマドは、北東壁中央に位置する。カマドを中心とした主軸方向は、N-36°-Eである。壁はほぼ垂直で、壁周溝は検出されなかった。斜面に位置するため、床面はハードローム層から砂層中に造られ、ほぼ平坦である。柱穴は検出されなかった。北西壁下北寄りにピットがある。100cm×65cmの梢円形で、深さ15cmである。

カマドの残りは悪く、袖はほとんどない。壁への掘込みは20cmの半円形状である。火床部は、径55cmで、よく焼土化している。

出土土器から、時期は9世紀前半と考えられる。

以上が住居跡の内容であるが、時期別の軒敷は、古墳時代後期1軒、古墳時代後期末1軒、8世紀末から9世紀初め3軒、9世紀前半11軒（2号住居跡を含む）である。

これらから、高岡跡における集落の変遷は次のような。

古墳時代後期に比較的小規模な集落が形成されるが、奈良時代には中断する。そして、奈良時代末ごろから平安時代にかけて、再び集落が形成されるが、9世紀中ごろ以降は、堅穴住居は途絶え、後述の掘立柱建物による小集落が形成されたと考えられる。しかし、9世紀後半以後は、調査区外に遺構がある可能性もあるが、集落は形成されなかったと思われる。

また、堅穴住居の特徴も時代を追って、柱穴、梯子ピットを持つ住居から、これらの明瞭な痕跡をもたない住居へ変わってゆくことが分かる。

（2）掘立柱建物跡

調査区の東端部斜面付近に位置し、隣接して2棟検出された。堅穴住居跡との重複関係から9世紀中ごろと考えられるが、同時期の住居跡は調査区内には検出されていない。しかし、掘立柱の掘方の平面形が長方形ではなく、円形であるので、中世ではないと考えられる。

1号掘立柱建物跡（第14図 図版12）

7号住居跡と重複し、1号掘立柱建物跡が新しい。規模は2間×2間で、柱跡の中心をもとにした大きさは、一辺3.8mである。北を基準とした方向は、N-28°-Eである。柱穴は円形で、径0.8m～1.2m、深さ0.35m～0.8mである。土層断面に柱の抜取り痕が見られるものがある。

時期は、7号住居跡との重複関係から、9世紀中ごろと思われる。

2号掘立柱建物跡（第14図 図版12）

1号掘立柱建物跡の南東隣に位置する。1号溝と重複するが、本跡が古いと思われる。南西隅の3柱穴のみの検出で、規模は不明である。周辺にピットが検出されたが、土層断面から掘立柱跡ではないことが確認された。柱穴は径0.8m～1.2m、深さ0.4m～0.8mである。

時期は、1号掘立柱建物跡と同時期（9世紀中ごろ）と思われる。

(3) 土坑

土坑は3基検出され、すべて調査区の東端部斜面付近に位置する。

1号土坑（第15図 図版12）

2号土坑と重複しているが、土層断面から1号土坑が新しい。規模が1.6m×1.4mの橢円形と考えられ、深さは0.2m～0.3mで、皿状である。長軸を中心とした方向は、N-25°-Wである。遺物は少量であるが、時期は平安時代と思われる。

2号土坑（第15図 図版12）

1号土坑と重複しているが、土層断面から2号土坑が古い。また、9号住居跡とも重複しているが、2号土坑が新しいと思われる。規模が1.8m×1.6mの橢円形と考えられ、深さは0.25mで、皿状である。長軸を中心とした方向は、N-42°-Wである。遺物は少量であるが、時期は平安時代と思われる。

3号土坑（第15図 図版11）

16号住居跡と重複しているが、土層断面から3号土坑が新しい。規模が1.7m×1.4mの橢円形と考えられ、深さ0.1mで、長径の両端が深さ5cm～10cmくぼんでいる。長軸を中心とした方向は、N-47°-Wである。遺物は少量であるが、時期は平安時代と思われる。

(4) 溝

1号溝（第15図 図版12）

調査区の東端部、斜面に沿って検出された。幅0.9m～1.3mで、深さ約0.3mである。西南西に向かって傾斜している。遺物は少量である。時期は平安時代以降と思われるが、砦跡に伴うかは不明確である。

(5) 砧跡（第4・16図 図版2・13）

砦跡に関係した遺構として、土壘、腰郭が検出されている。

土塁は、調査区の中央部南端に検出された。地形上は台地の尾根筋上に位置し、自然地形を整形して造られた可能性がある。

腰郭は、調査区の東端部、南側斜面に面して検出された。ほぼ等高線に沿って、段状に整形された面が、調査区外にまで拡がっている。

また、測量調査から、高岡砦の構造として次のことが考えられる。

高崎川北側の東西に細長い尾根上の小舌状台地を整形して造られ、規模は東西約390m、南北は最大で約170mである。現在の水田面との比高差は最も大きなところで約26mであるが、20mほどのところが多い。小舌状台地は南北から小谷津があり込み、平面形は鋸齒状になり、小谷津部及び突出部を段状に整形して腰郭としている。南及び西を意識した造り方で、南及び西部分によく手が加えられ、傾斜も急である。最大で55°（主郭部前面）、全体では45°前後である。北側は尾根状部で約30°、小谷津部分で約25°である。東端は台地主要部に接続する。

主郭部は砦跡のはば中央にあり、南向きで、ほぼ平坦である。主郭部から主郭の防衛用として、左右斜め前方に突出部を形成し、腰郭を造り出している。

砦の東西端部及び中央部の3か所に壇状の高まりがある。東西の高まり部分と中央部との間に南北から堅堀を設け、土橋でつなぎている。中央の高まりは、主郭を囲む土塁を形成している。これは、主郭部を中心として左右対称であり、鳥が翼をひろげた様子を正面から見た形になる。頭部、胸部が主郭部、脚が主郭部からの突出部、翼部が東西の尾根部、翼の先端部が壇状の高まり部分である。

壇状の高まりは、西端部が平坦部分から約2m、東端部が約3mである。

主郭部は北及び東西を土塁で囲まれ、南北約40m、東西は北端部で約20m、南端部で約35m、南に向かってゆるやかに傾斜している（5°以下）。また、南側の東西に腰郭を配置する。東側が3段、西側が2段である。主郭部の左右斜め前方に突出部があるが、これは東西の土塁の延長線上にある。南正面部の傾斜は約40°である。

高岡砦跡の主郭部はほかのものに比べるとやや小さい。館跡がある可能性もあるが、機能としては、生活よりも防衛を主としていたと考えられる。

主郭部の比較¹⁾

長勝寺跡館跡	堀内法	東西 37m	南北 35m
石川館跡	堀内法	50	50
北押出し遺跡	堀内法	60	45

3 遺物

(1) 壺穴住居跡

1号住居跡出土遺物（第17図 図版14）

1～11は土師器の壺である。1はロクロ未使用で、ほかはロクロを使用している。回転は右回りである。

1は、口径12.5cm、底径7.2cm、器高4.7cm、色調は赤褐色、胎土は細砂粒を含み、赤色粒を少々含む。口縁部にヨコナデ、体部及び底部にヘラケズリが施される。内面は口縁部にヨコナデ、体部から底部にナデが施され、一部に強いナデが施される。二次的焼成のため器面が荒れ、もろくなっている。

2は、口径11.9cm、底径7.3cm、器高5.7cm、色調は赤橙褐色、胎土は細砂粒を含み、赤色粒を少々含む。底部は全面にヘラケズリが施され、内面には口縁部に回転ヨコナデが施される。二次的焼成のため、内面が一部剝離している。

3は、口径12.2cm、底径8.5cm、器高4.0cm、色調は淡明褐色、胎土は細砂粒を含み、赤色粒を少々含む。体部下端部及び底部周辺部にヘラケズリが施される。底部切離しは回転糸切りである。二次的焼成のため器面が荒れ、内面が一部剝離している。

4は、復元口径11.9cm、底径7.5cm、器高4.0cm、色調は明灰褐色、胎土は細砂粒を含み、赤色粒を少々含む。体部下端部及び底部周辺部にヘラケズリが施される。底部切離しは回転糸切りである。二次的焼成のため器面が荒れ、内面が一部剝離している。

5は、底部中央を欠く。復元口径10.2cm、底径8.0cm、器高3.9cm、色調は明橙褐色、胎土は細砂粒を含み、赤色粒を少々含む。体部下端部及び底部周辺部にヘラケズリが施される。底部切離しは回転糸切りである。二次的焼成のため器面が荒れ、もろくなっている。

6は、底部中央を欠く。復元口径11.2cm、復元底径7.2cm、器高3.3cm、色調は淡明褐色、胎土は細砂粒、赤色粒を少々含む。体部下端部及び底部周辺部にヘラケズリが施される。底部切離しは回転糸切りである。

7は、底部中央部を欠く。復元口径11.6cm、復元底径7.2cm、器高4.2cm、色調は淡明褐色、胎土は細砂粒、赤色粒を少々含む。体部下端部及び底部周辺部にヘラケズリが施される。

8は、口縁部から体部の遺存で、復元口径11.8cm、色調は褐色、胎土は細砂粒を含み、赤色粒を少々含む。体部下端部にヘラケズリが施される。

9は、体部下部から底部の遺存で、底部中央を欠く。復元底径7.6cm、色調は明褐色、胎土は細砂粒、赤色粒を少々含む。体部下端部及び底部周辺部にヘラケズリが施される。底部切離しは回転糸切りである。

10は、口径11.9cm、底径8.2cm、器高3.6cm、色調は淡明褐色、胎土は細砂粒を含み、赤色粒を少々含む。体部下端部及び底部周辺部に回転ヘラケズリが施される。底部切離しは回転糸切

りである。二次的焼成のため器面が荒れている。

11は、体部下端から底部の遺存である。復元底径7.6cm、色調は淡明褐色、胎土は細砂粒を含む。体部下端部及び底部周辺部にヘラケズリが施される。底部切離しは静止糸切りである。

12は須恵器の杯である。底部中央を欠く。復元口径13.0cm、復元底径7.0cm、器高4.5cm、色調は明灰色、胎土は細砂粒を含み、黒色粒を少々含む。体部下端部及び底部周辺部にヘラケズリが施される。

2号住居跡出土遺物

出土遺物は少量で、土器は細片であり、図示できるものはない。

3号住居跡出土遺物（第17図 図版14・15）

1～3は土師器である。1・2は甕である。胴部下端から底部の遺存で、底部中央を欠く。

1は、復元底径7.6cm、色調は明橙褐色、胎土は砂粒を多く含む。胴部下端に縦方向のヘラナデ、底部にヘラケズリが施され、内面にはナデが施される。

2は、復元底径7.8cm、色調は橙褐色、胎土は砂粒を多く含む。胴部下端に縦方向のヘラナデが施され、底部には木葉痕がある。内面にはナデが施される。

3は、杯である。右回転のロクロ成形で、体部下端から底部の遺存である。底径9.6cm、色調は褐色、胎土は細砂粒を多く含む。体部下端部及び底部全面に回転ヘラケズリが施される。内外面に赤彩が施される。二次的焼成のため器面が荒れ、赤彩が不明瞭になっている。

4～7は須恵器である。4～6はロクロ成形の杯で、回転は右回りで、3点とも底部中央を欠く。

4は、口径13.1cm、底径7.0cm、器高3.8cm、色調は灰色、胎土は砂粒を含む。底部にヘラケズリが施される。

5は、復元口径12.8cm、復元底径6.4cm、器高3.6cm、色調は灰色、胎土は砂粒を含み、黒色粒を少々含む。底部周辺部にヘラケズリが施される。

6は、復元口径13.6cm、復元底径7.4cm、器高4.1cm、色調は青灰色、胎土は砂粒を含む。底部周辺部にヘラケズリが施される。

7は、甕の胴部下端から底部の破片である。色調は灰白色、胎土は砂粒を多く含む。胴部に叩き目があり、胴部下端及び底部にヘラケズリが施される。内面にはナデが施される。

4号住居跡出土遺物（第18図 図版15）

1～3は土師器である。1は甕、2・3はロクロ成形の杯で、回転は右回りである。

1は、底部中央を欠くが、全体はほぼ遺存する。口縁部端が小さくつまみ出され、受け口状

になる。口径16.3cm、頸径14.0cm、胴径16.4cm、底径9.0cm、器高15.6cm、色調は淡明褐色で一部黒褐色、胎土は細砂粒、赤色粒を少々含む。口縁部にヨコナデ、胴部は上半部に縦方向のヘラケズリ、下半部に横方向のヘラケズリ、底部にはヘラケズリが施される。内面には口縁部にヨコナデ、胴部から底部にナデが施される。二次的焼成のため器面が荒れている。

2は、復元口径11.6cm、底径6.2cm、器高3.4cm、色調は淡橙褐色、胎土は細砂粒、赤色粒を少々含む。体部下端部及び底部全面に回転ヘラケズリが施される。

3は、底部中央を欠く。復元口径13.2cm、復元底径7.8cm、器高3.7cm、色調は明褐色で、内面は黒色、胎土は細砂を含む。内面にヘラミガキ、黒色処理が施される。

4は、須恵器の瓶である。色調、焼成は土師質であるが、形態から須恵器とした。胴部下半部から底部の遺存で底部中央を欠く。復元底径13.2cm、色調は淡明褐色、胎土は細砂粒を含み、赤色粒を少々含む。胴部下半部に横方向のヘラケズリの後にナデ、底部にヘラケズリが施される。内面には胴部にヨコナデが施される。多孔式で5孔と思われる。

5号住居跡出土遺物（第18図 図版15・16）

1・2は土師器の杯である。ロクロ成形で、回転は右回りである。

1は、復元口径13.6cm、底径6.0cm、器高4.6cm、色調は淡橙褐色、胎土は砂粒を含み、赤色粒を少々含む。体部下端部及び底部全面にヘラケズリが施される。器面が荒れている。

2は、体部から底部の遺存で、底部中央を欠く。復元底径7.8cm、色調は黒褐色、胎土は細砂粒を含む。体部下端部及び底部全面にヘラケズリが施される。

3～5は須恵器の瓶である。3・5は底部を欠くが、口縁部の形態から、瓶とする。

3は、口縁部から胴部上半部の遺存である。口縁部端が小さくつまみ出され、受け口状になる。復元口径28.4cm、復元頸径25.0cm、色調は青灰色、胎土は砂粒、白色小石を含む。口縁部にヨコナデ、胴部に縦方向の叩き目が施される。内面は口縁部にヨコナデ、胴部にナデが施され、半円状の叩きの當て具痕が残る。

4は、胴部下半部から底部の遺存である。復元底径13.0cm、色調は褐色、胎土は細砂粒を含み、赤色粒を少々含む。胴部に叩き目、胴部下端部に横方向のヘラケズリ、底部にヘラケズリが施される。内面は胴部にヨコナデ、胴部下端部にヘラケズリが施される。単孔式と考えられる。

5は、口縁部から胴部上端部の破片である。口縁部が縦帶状になる。色調は暗青灰色、胎土は砂粒を少々含む。口縁部にヨコナデ、胴部上半部に縦方向叩き目が施される。内面は口縁部にヨコナデ、胴部にナデが施される。

6は、鉄製の刀子である。4片に折れ、刃部の先端を欠く。残長21.3cm、残刃長14.5cm、刃部幅0.8cm～1.2cm 刃部厚0.2cm～0.4cm、基部幅0.3cm～1.0cm、基部厚0.2cm～0.3cm、重さ

25.0gである。直刃で刃部と基部との境にマチをもつ。

6号住居跡出土遺物（第19図 図版16）

1は土師器の瓶である。単孔式で、口縁部端が小さくつまみ出され、受け口状になる。復元口径26.2cm、復元頸径22.4cm、復元底径13.0cm、器高19.0cm、色調は明橙褐色、胎土は細砂粒を含み、赤色粒を少々含む。口縁部にヨコナデ、頸部に強いヨコナデ、胴部は上半部に縱方向、下半部に横方向のヘラケズリが施される。内面は口縁部にヨコナデ、胴部にナデが施される。

7号住居跡出土遺物（第19図 図版16）

1～4は土師器の杯である。ロクロ成形で、回転は右回りである。

1は、口径12.6cm、底径7.4cm、器高4.7cm、色調は橙褐色、胎土は細砂粒を含む。底部全面にヘラケズリが施される。二次的焼成のため器面が荒れ、もろくなっている。内面の一部が剥離している。

2は、復元口径12.0cm、底径8.4cm、器高3.7cm、色調は赤褐色、胎土は細砂粒を含む。体部下端部にヘラケズリが施され、底部に回転糸切り痕が観察される。二次的焼成のため器面が荒れ、内面が一部剥離している。

3は、底部中央を欠く。復元口径11.8cm、復元底径7.8cm、器高3.8cm、色調は淡明褐色、胎土は、細砂粒を含む。体部下端部及び底部周辺部にヘラケズリが施される。

4は、底部の遺存である。底径8.5cm、色調は淡明褐色、胎土は細砂粒を含む。体部下端部及び底部にヘラケズリが施される。底部中央に回転糸切り痕が残る。二次的焼成のため器面が荒れ、もろくなっている。

8号住居跡出土遺物（第19図 図版16）

1は土師器の高台付皿である。復元口径14.3cm、底径7.5cm、器高2.8cm、色調は淡橙褐色、胎土は細砂粒を含み、赤色粒を少々含む。体部下端部から高台部にかけて回転ヨコナデ、底部に回転ヘラケズリが施される。右回転のロクロ成形である。二次的焼成のため器面が荒れ、内面が一部剥離している。

9号住居跡出土遺物（第19図 図版16）

1は土師器の甕の口縁部片である。口縁部端が小さくつまみ出され、受け口状になる。色調は淡明褐色、胎土は砂粒を多く含む。内外面にヨコナデが施される。

10号住居跡出土遺物（第19・20図 図版17・18）

1は土師器の甕で、口縁から胴部上端部の遺存である。口縁部端が小さくつまみ出され、受け口状になる。復元口径18.2cm、復元頸径15.5cm、色調は淡橙褐色、胎土は砂粒、雲母粒を多く含む。口縁から胴部上端部にヨコナデ、内面は口縁部にヨコナデ、胴部にナデが施される。

2～6は土師器の杯である。ロクロ成形で、回転は右回りである。

2は、底部中央を欠く。復元口径12.9cm、復元底径6.8cm、器高4.0cm、色調は淡橙褐色、胎土は細砂粒、赤色粒を含む。体部下端部及び底部周辺部にヘラケズリが施される。

3は、底部中央を欠く。復元口径12.6cm、復元底径7.9cm、器高3.7cm、色調は明橙褐色、胎土は細砂粒を含み、赤色粒を少々含む。体部下端部及び底部周辺部にヘラケズリが施される。

4は、体部下部から底部の遺存である。底径6.8cm、色調は明褐色、胎土は砂粒を多く含み、雲母粒を含む。体部下端部にヘラケズリが施される。底部に回転糸切り痕が観察される。底部が厚く、胎土もやや砂質があるので、甕の可能性がある。

5は、体部下部から底部の遺存である。底部中央を欠く。復元底径6.8cm、色調は明褐色、胎土は細砂粒を含み、赤色粒を少々含む。体部下端部及び底部周辺部にヘラケズリが施される。底部に回転糸切り痕が観察される。

6は、口径12.2cm、底径6.5cm、器高3.7cm、色調は明橙褐色、胎土は細砂粒を含み、赤色粒を多く含む。体部下端部及び底部全面に回転ヘラケズリが施される。二次的施成のため器面が荒れ、もろくなっている。

7・8は土師器の高台付皿である。ロクロ成形で、方向は右回りである。

7は、体部下部から底部の遺存である。底径7.2cm、色調は明橙褐色、胎土は細砂粒、赤色粒を少々含む。体部下端部から高台部に回転ヨコナデ、底部に回転ヘラケズリが施され、内面にヘラミガキが施される。

8は、体部下部から底部の遺存である。底径6.6cm、色調は淡橙褐色、胎土は細砂粒、雲母粒を少々含む。体部下端部から高台部に回転ヨコナデ、内面にヘラミガキが施される。底部に回転糸切り痕が観察される。体部外面に墨書きが施されるが、欠損のため文字は不明である。

9は土師器の杯の底部を転用した筋鉢である。径6.8cm～7.1cm、器厚0.7cm～0.9cm、色調は明橙褐色、胎土は細砂粒を含み、赤色粒を少々含む。

10は須恵器の甕である。胴部から底部の遺存である。復元底径11.4cm、色調は暗青灰色、胎土は砂粒を含む。胴部に継ぎ目が施され、部分的にヘラによるヨコナデが施される。胴部下端部に横方向のヘラケズリ、底部にヘラケズリ、内面は胴部にヨコナデ、胴部下端部にヘラケズリが施される。多孔式である。

11は灰釉陶器の手付瓶である。一個体分の破片による復元である。口縁部を欠く。色調は灰色、胎土は緻密で黒色細粒を含む。徳利形の本体の頸部から胴部に把手が付く。底部は高台が

削り出されている。淡明褐色灰釉が頸部から胴部にかけてと、把手の外面に施されている。

12~16は鉄製品である。

12は鋸である。ほぼ完形で、長さ32.4cm、刃長24.6cm、刃幅2.6cm~3.7cm、刃厚0.2cm、重さ86.6gである。わずかに内湾している。押し切りか引き切りか、刃の方向は不明瞭である。先端部に歯の抜けはずれを防ぐ突起がある。基部にやや大きな目釘孔が観察される。

13は鍔先である。完形で、長さ12.1cm、幅9.5cm、厚さ0.3cm~0.5cm、重さ153.4gである。木製の本体に装着して使用したと考えられるが、装着部分が袋状にはなっていない。

14は鍔の先端部である。幅2.4cm、厚さ0.2cm、重さ7.9gである。曲刀と考えられる。

15・16は刀子片である。15は刃部片で、幅1.5cm~1.7cm、厚さ0.2cm、重さ4.3gである。16は刃部から基部の破片で、刃部幅1.7cm、厚さ0.4cm、基部幅0.6cm、厚さ0.3cm、重さ6.4gである。

11号住居跡出土遺物（第21図 図版18・19）

1・2は土師器の甕である。

1は、口縁から胴部の遺存で、口縁部端が小さくつまみ出され、受け口状になる。復元口径20.4cm、復元頸径18.2cm、復元胴径20.6cm、色調は明褐色、胎土は砂粒を含む。口縁部にヨコナデ、胴部にナデが施される。内面は、口縁部にヨコナデ、胴部にナデが施される。

2は、胴部から底部の遺存である。底径7.4cm、色調は赤褐色、胎土は砂粒を多く含む。胴部及び底部にヘラケズリが施される。内面はナデが施され、器面が剥離している。二次的焼成のため器面が荒れ、もろくなっている。

3~7は土師器の杯である。ロクロ成形で、方向は右回りである。

3は、底部中央を欠く。復元口径13.0cm、復元底径6.8cm、器高4.4cm、色調は淡橙褐色、胎土は細砂粒を含み、赤色粒を少々含む。体部下端部及び底部にヘラケズリが施される。内面は口縁部に沈線状のヨコナデが施される。体部外面に墨書きがあるが、欠損のため文字は不明である。

4は、底部中央を欠く。復元口径13.6cm、復元底径7.6cm、器高4.2cm、色調は暗褐色、胎土は細砂粒、赤色粒を含む。体部下端部及び底部にヘラケズリが施される。

5は、底部中央を欠く。復元口径11.8cm、復元底径6.0cm、器高3.7cm、色調は淡橙褐色、胎土は細砂粒を含み、赤色粒を少々含む。体部下端部ヘラケズリ及び底部にヘラケズリが施される。

6は、口径13.2cm、底径6.5cm、器高4.3cm、色調は褐色、胎土は細砂粒を含み、赤色粒を少々含む。体部下端部及び底部全面に回転ヘラケズリが施される。

7は、口縁から体部の破片で、色調は淡明褐色、胎土は細砂粒を含む。体部外面に墨書きがあ

るが、欠損のため文字は不明である。

8は土師器の高台付皿である。ほぼ完形で、口径13.6cm、底径7.3cm、器高2.6cm、色調は明褐色、胎土は細砂粒を含み、赤色粒を少々含む。体部下端部から高台部にかけて回転ヨコナデ、底部に回転ヘラケズリが施される。内面にはヘラミガキが施される。底部外面に墨書き「兄」がある。二次的焼成のため器面が荒れ、内面が一部剥離している。

9～12は須恵器である。9～11は甕、12は瓶である。

9は、口縁部から頸部の遺存で、頸部から口縁部が大きく開いて立ち上がり、口縁部端は折り返されて縦帶状になる。復元口径22.8cm、復元頸径17.7cm、色調は赤茶褐色、胎土は細砂粒を多く含む。外面にヨコナデが施される。頸部から口縁部が大きく開いて立ち上がり、口縁部端は折り返されて縦帶状になる。

10は、口縁から胴部の遺存で、口縁部端が小さくつまみ出され、受け口状になる。復元口径25.8cm、復元頸径23.3cm、復元胴径26.4cm、色調は暗灰色、胎土は細砂粒、黒色粒を含む。口縁部にヨコナデ、胴部に縦方向叩き目及び部分的にヨコナデが施される。内面は口縁部にヨコナデ、胴部にナデが施される。

11は、胴部下端部から底部の遺存で、復元底径13.4cm、色調は明褐色、胎土は細砂粒を多く含む。胴部下端部にヘラケズリ、底部にナデが施され、内面にはナデが施される。二次的焼成のため器面が荒れてもらくなり、内面が一部剥離している。

12は、胴下半部から底部の遺存で、多孔式である。復元底径13.8cm、色調は黒褐色、胎土は細砂粒を含む。胴部に叩き目及び横方向のヘラケズリ、底部にヘラケズリが施され、内面は胴部にヨコナデ、胴部下部にヘラケズリが施される。

13は、鉄製刀子である。刃部先端を欠く。残長15.5cm、残刃長8.0cm、刃部幅1.0cm～1.2cm、厚さ0.3cm、重さ24.9gである。基部に柄の木質が残る。

12号住居跡出土遺物

出土遺物は少量で、土器は細片であり、図示できるものはない。

13号住居跡出土遺物（第22図 図版19・20）

1～3は土師器の甕である。

1は、口縁から胴部下部の遺存で、口縁部端が小さくつまみ出され、受け口状になる。口径20.4cm、頸径19.6cm、胴径23.4cm、色調は灰褐色、胎土は、砂粒を多く含む。口縁部にヨコナデ、胴部上半部にナデ、胴部下半部に縦方向のヘラナデが施され、内面は口縁部にヨコナデ、胴部にナデが施される。

2は、口縁部から胴部上端部の遺存で、口縁部端が小さくつまみ出され、受け口状になる。

復元口径20.4cm、復元類径17.7cm、色調は明橙褐色、胎土は砂粒を含む。口縁部から胴部上端部にヨコナデ、内面は、口縁部及び胴部にヨコナデが施される。

3は、小型で、口縁部から胴部上端部の遺存である。口縁部端が小さくつまみ出され、受け口状になる。復元口径9.0cm、復元類径7.5cm、色調は赤褐色で、一部暗赤褐色、胎土は細砂粒を含む。口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリの後にナデが施され、内面は、口縁部にヨコナデ、胴部にナデが施される。

4～9は土師器の环である。ロクロ成形で、回転は右回りである。

4は、口径13.5cm、底径7.0cm、器高4.0cm、色調は淡明褐色、胎土は細砂粒を含み、赤色粒を少々含む。体部下端部及び底部周辺部にヘラケズリが施され、回転糸切り痕が残る。二次的焼成のため器面が荒れ、もろくなっている。

5は、口径12.7cm、底径7.0cm、器高4.1cm、色調は橙褐色、胎土は細砂粒を多く含み、赤色粒を少々含む。体部下端部及び底部周辺部にヘラケズリが施され、回転糸切り痕が残る。二次的焼成のため器面が荒れ、もろくなっている。体部外面に墨書きがあり、欠損しているが、他の墨書き文字から「兒」と考えられる。

6は、底部中央を欠く。復元口径12.4cm、底径6.6cm、器高3.9cm、色調は橙褐色、胎土は細砂粒を多く含み、赤色粒を少々含む。体部下端部及び底部周辺部にヘラケズリが施され、回転糸切り痕が残る。二次的焼成のため器面が荒れ、もろくなっている。体部外面に墨書きがあるが、欠損のため文字は不明である。

7は、復元口径13.0cm、復元底径7.8cm、器高3.5cm、色調は明褐色、胎土は細砂粒を含む。体部下端部及び底部全面にヘラケズリが施される。

8は、復元口径12.0cm、復元底径6.9cm、器高3.4cm、色調は淡橙褐色、胎土は細砂粒を含み、赤色粒を多く含む。体部下端部及び底部全面にヘラケズリが施される。器面が荒れている。

9は、底部中央を欠く。口径12.5cm、底径6.5cm、器高4.0cm、色調は橙褐色、胎土は細砂粒を多く含み、赤色粒を少々含む。体部下端部及び底部に回転ヘラケズリが施される。二次的焼成のため器面が荒れ、もろくなっている。

10は土師器の皿である。復元口径17.3cm、底径9.2cm、器高2.9cm、色調は明橙褐色、胎土は細砂粒を含み、赤色粒を少々含む。体部下端部及び底部周辺部にヘラケズリが施され、静止糸切り痕が残る。内面にヘラミガキが施されるが、器面が磨耗しているため不明瞭である。ロクロ成形で回転は右回りである。

11・12は須恵器で、11は甕、12は环である。

11は、口縁から胴部上端部の遺存である。口縁部端が小さくつまみ出され、受け口状になる。復元口径26.0cm、復元類径23.6cm、色調は淡明褐色、胎土は細砂粒、赤色粒を含む。口縁部にヨコナデ、胴部に縱方向の叩き目が施され、内面は口縁部にヨコナデ、胴部にナデが施される。

12は、復元口径13.4cm、底径7.0cm、器高3.8cm、色調は暗灰色、胎土は細砂粒を多く含み、黒色粒を少々含む。体部下端部及び底部周辺部にヘラケズリが施され、底部回転ヘラ切り痕が残る。ロクロ成形で、回転は右回りである。

13は土製支脚である。円筒形の中間部の遺存で、長さ7.3cm、幅6.6cm、厚さ5.9cm、色調は明褐色、胎土は砂質であり、焼成は不良である。

14は砥石である。端部を欠くが、中央部が薄く、「凹」字形になる。長さ8.3cm、幅3.7cm～4.1cm、厚さ3.5cm、重さ211.2gである。色調は灰白色で、石材は巖灰岩質である。

14号住居跡出土遺物（第23図 図版21・22）

1～3は土師器の壺である。二次的焼成のため、器面が荒れ、細かくヒビがはいり、剝離する。

1は、口縁部から胴部上部の遺存で、口縁部端がわずかに内湾し、受け口状になる。口径19.1cm、頸径15.2cm、色調は淡褐色、胎土は砂粒を含み、赤色粒を少々含む。口縁部にヨコナデ、胴部に縦方向のヘラケズリが施され、内面は口縁部にヨコナデ、胴部にナデが施される。

2は、口縁部から胴部上端部の遺存で、口縁部端は丸い。復元口径12.2cm、復元頸径10.7cm、色調は淡橙褐色、胎土は細砂粒を多く含む。口縁部及び胴部上端部にヨコナデが施され、内面は、口縁部にヨコナデ、胴部にナデが施される。

3は、胴部下部から底部の遺存で、底部中央を欠く。復元底径9.5cm、色調は赤褐色、胎土は細砂粒を多く含む。胴部下部及び底部にヘラケズリが施され、内面にはナデが施される。

4～8は土師器の杯である。古墳時代後期の須恵器杯の模倣杯である。ロクロは使用せず、4・5は杯身、6～8は杯蓋の模倣である。底部は丸底で体部との区別はない。また、二次的焼成のため、器面に細かくヒビがはいり、剝離する。

4は、受部から口縁部が直立し、わずかに内湾する。口径11.7cm、受部径12.2cm、器高4.3cm、色調は淡明褐色、胎土は細砂粒を少々含む。口縁部にヨコナデ、体部から底部にヘラケズリの後ナデが施され、内面にヘラミガキが施される。口縁部及び内面全体にウルシが塗られていたと思われる。体部外面に「X」の線刻がある。

5は、受部から口縁部が内傾して立ち上がり、口縁部端は直立する。復元口径11.2cm、受部径12.0cm、器高3.6cm、色調は淡橙褐色、胎土は細砂粒、赤色粒を少々含む。口縁部にヨコナデ、体部から底部にヘラケズリの後ナデが施され、内面にはヘラミガキが施される。

6は、体部から口縁部が外反する。復元口径14.0cm、器高4.5cm、色調は淡橙褐色、胎土は細砂粒、赤色粒を少々含む。口縁部にヨコナデ、体部から底部にヘラケズリの後ナデが施され、内面にはヘラミガキが施される。

7は、体部から口縁部が直立し、口縁部端はわずかに外反する。口径12.5cm、器高3.9cm、色

調は淡橙褐色、胎土は細砂粒、赤色粒を少々含む。口縁部にヨコナデ、体部から底部にヘラケズリが施され、内面にはヘラミガキが施される。口縁部及び内面全体にウルシが塗られていたと思われる。

8は、体部から口縁部が外傾して立ち上がる。復元口径13.2cm、器高3.2cm、色調は明灰褐色、胎土は細砂粒を多く含み、赤色粒を少々含む。口縁部にヨコナデ、体部から底部にヘラケズリが施され、内面にはヘラミガキが施される。

9～11は須恵器の甕である。

9は、口縁部の遺存で、口縁部が大きく開き、口縁部端は折り返されて縁帯状になる。復元口径31.4cm、色調は褐色、胎土は細砂粒を多く含む。内外面にヨコナデが施される。焼成は土質であるが、形から須恵器とした。

10は、口縁部から胴部上端部の遺存で、口縁部端が縁帯状になる。復元口径30.2cm、復元類径27.5cm、色調は淡灰褐色、胎土は砂粒を含む。口縁部にヨコナデ、胴部に横方向の叩き目が施され、内面は口縁部にヨコナデ、胴部にナデが施される。

11は、胴部下部から底部の遺存で、底部中央を欠く。復元底径15.2cm、色調は暗灰褐色、胎土は細砂粒を多く含む。胴部に叩き目、胴部下端部にヘラケズリ、底部にナデが施され、内面にはナデが施される。二次的焼成のため器面に細かなヒビがはいり、剝離する。底部外面に線刻が施されるが、欠損のため、形は不明である。

12は、須恵器の杯である。体部から底部の遺存で、底径8.4cm、色調は灰色、胎土は砂粒を含み、暗灰色粒を少々含む。体部下端部にヘラケズリ、底部に回転ヘラケズリが施される。ロクロ成形で回転は右回りである。二次的焼成のため、器面が荒れている。

13は土師器の皿である。底部中央を欠く。復元口径13.2cm、底径6.4cm、器高1.6cm、色調は橙褐色、胎土は細砂粒を含み、赤色粒を少々含む。体部下端部にヘラケズリ、底部に回転ヘラケズリが施される。内面にはヘラミガキが施されるが、器面剝離のため不明瞭である。ロクロ成形で、回転は右回りである。二次的焼成のため器面に細かなヒビがはいり、剝離する。

14は土師器の高台付皿である。体部下部から底部の遺存で、底径7.3cm、色調は明橙褐色、胎土は細砂粒を多く含み、赤色粒を少々含む。体部下端部から高台部に回転ヨコナデ、底部に回転ヘラケズリが施される。内面にはヘラミガキが施されるが、器面剝離のため不明瞭である。

ロクロ成形で、回転は右回りである。二次的焼成のため器面に細かなヒビがはいり、剝離する。

15は須恵器杯蓋の鋲部である。色調は暗青灰色、胎土は砂粒を含む。

16は土製支脚片である。長載頭円錐形と思われる。色調は茶褐色、胎土は砂質である。

17は鉄製品の破片である。形は不明で、端が折り曲げられている。長さ3.5cm、幅1.5cm～2.7cm、厚さ0.15cm、重さ6.2gである。

なお、9～15は奈良・平安時代の土器であるが、住居跡の形態、土器の出土状況から住居跡

の時期は古墳時代後期と考えられる。

15号住居跡出土遺物（第24図 図版22）

1～3は土師器の壺である。口縁部から胴部上部の遺存で、口縁部端がつまみ出され、受け口状になる。

1は、復元口径21.6cm、復元頸径18.4cm、色調は淡橙褐色、胎土は細砂粒を多く含む。口縁部にヨコナデ、胴部に縱方向へラケズリが施され、内面は口縁部にヨコナデ、胴部ナデが施される。二次的焼成のため器面が荒れ、磨耗している。

2は、復元口径22.7cm、復元頸径19.2cm、色調は明褐色、胎土は細砂粒を多く含む。口縁部は内外面にヨコナデが施される。二次的焼成のため器面に細かなヒビがはいり、剥離する。

3は、復元口径21.2cm、復元頸径19.4cm、色調は明橙褐色、胎土は細砂粒を多く含み、赤色粒を少々含む。口縁部は内外面にヨコナデが施される。二次的焼成のため器面が荒れ、もろくなっている。

4～6は土師器の壺である。ロクロ成形で、回転は右回りである。

4は、底部中央を欠く。復元口径13.3cm、復元底径7.2cm、器高3.9cm、色調は淡明褐色、胎土は細砂粒、細雲母粒を含み、赤色粒を少々含む。体部下端部及び底部にヘラケズリが施される。体部外面に墨書があるが、墨が淡いため文字は不明瞭である。

5は、底部中央を欠く。復元口径14.8cm、復元底径7.0cm、器高4.6cm、色調は淡橙褐色、胎土は細砂粒を多く含み、赤色粒を少々含む。体部下端部及び底部にヘラケズリが施される。二次的焼成のため器面に細かなヒビがはいり、剥離する。

6は、口縁から体部の遺存で、復元口径14.2cm、色調は淡橙褐色、胎土は細砂粒を含む。内面にはヘラミガキ及び黒色処理が施される。二次的焼成のため器面が荒れ、もろくなっている。

7は須恵器の壺である。胴部下端部から底部の遺存で、復元底径14.0cm、色調は褐色、胎土は細砂粒を多く含む。胴部下端部及び底部にヘラケズリが施され、内面にはナデが施される。二次的焼成のため器面に細かなヒビがはいり、剥離する。

8は須恵器の把手部分の破片である。色調は明褐色、胎土は細砂粒を多く含む。叩き目が施され、内面にはナデが施される。二次的焼成のため器面が荒れ、もろくなっている。

9は須恵器の長頸壺である。胴部下端部から底部の遺存で、底部中央を欠く。復元底径5.9cm、色調は灰色、胎土は緻密で細砂粒、黒色粒を少々含む。胴部下端部に回転ヘラケズリ、高台部に回転ヨコナデ、底部に回転ヘラケズリが施される。右回転のロクロ成形で、内外面に自然灰釉がみられる。

16号住居跡出土遺物（第24図 図版23）

1・2は土師器である。1は壺、2は高台付壺である。口部成形で、回転は右回りである。

1は、口縁から体部の遺存で、復元口径15.2cm、色調は明赤褐色、胎土は細砂粒を含み、赤色粒を少々含む。内面にヘラミガキが施される。二次的焼成のため器面に細かなヒビがはいり、剝離する。

2は、体部下部から底部の遺存で、体部は内湾し、丸みがある。復元底径6.2cm、色調は明橙褐色、胎土は細砂粒を多く含み、赤色粒を少々含む。二次的焼成のため器面に細かなヒビがはいり、剝離する。

3は須恵器壺の口縁部破片である。口縁部が大きく開き、口縁部端は折り返されて縦帯状になる。色調は淡灰褐色、胎土は細砂粒を多く含む。内外面にヨコナデが施される。二次的焼成のため器面が荒れている。

以上が住居跡出土の主な遺物の内容であるが、この中で特徴的なものは墨書き土器と鉄器である。

墨書き土器は10・11・13・15号住居跡から出土し、すべて9世紀前半である。墨書き土器で字体が判明又は推定できるものは「兄」で、10・11・13号で出土している。この文字が、集落を代表する墨書きと思われる。

鉄器は、鋸、鋸先、刀子、鎌の農工具である。この中で注目されるのは、鋸と鋸先である。特に、中世以前の鋸の出土例は少ない。県内の主なものは次のとおりである。

千葉市東寺山戸張作遺跡 004号住居跡出土 両歯 古墳時代 5世紀¹⁾

市原市草刈1号墳 両歯 古墳時代 5世紀²⁾

富津市神宿横穴群 5号横穴 片歯 古墳時代 6世紀³⁾

酒々井町長勝寺脇館跡 004号住居跡出土 片歯 奈良時代 8世紀⁴⁾

八千代市白幡前遺跡 D078(歴史2群E) 片歯 平安時代 9世紀前半⁵⁾

これらの中で、ほぼ同時期のものは長勝寺脇館跡出土と白幡前遺跡出土のものである。特に、長勝寺脇館跡出土の鋸は、大きさを別にして、形態は本遺跡出土の鋸とはほぼ同じである。特徴としては、鋸先端に大きな突起を持つこと、片歯で、齒道がやや内湾し、背は外反していることである。これらの鋸と同形のものに、栗原堅穴住居跡出土鋸がある⁶⁾。これは枝伐り用鋸と推定されているが、本遺跡及び長勝寺脇館跡出土の鋸も同様と思われる。ただし、時期は栗原堅穴住居跡出土の鋸は10世紀であり、本遺跡のものよりも1世紀ほど新しい。

高岡砦跡と長勝寺脇館跡との距離は約2kmである。出土例の少ない遺物で、しかもほぼ同形のものが近接した遺跡で出土しているということは、両遺跡の集落が何か関係を持っていた可能性があることを示すと思われる。

本遺跡出土の銀先の特徴は、丸みのない角張った刃先と、装着部分が明瞭なソケット状にならないことである。奈良・平安時代の鐵銀先の大部分は、丸みのあるU字形で、本体の装着部分がソケット状になっている。

本遺跡出土の銀先はU字形鐵銀先に分類されるが、銀先としては、より現代のものに近い形である。刃がほぼ直刃で、U字形とは異なり、側縁部まで刃はつくられていない。また、木部をはめ込む溝が不明瞭なので、木部への装着方法がはっきりしない。同様のものは千葉市高沢遺跡⁴²から出土しており、ほぼ同時期である。

(2) グリッド等出土遺物 (第24・25図 図版23・24)

1・2は土師器の杯である。体部下部から底部の遺存である。ロクロ成形で、回転は右回りである。

1は、底部中央を欠く。復元底径6.6cm、色調は褐褐色、胎土は細砂粒を含む。体部下端部及び底部にヘラケズリが施される。

2は、底径7.0cm、色調は淡明褐色、胎土は細砂粒を含む。体部下端部及び底部にヘラケズリが施される。底部に墨書きがあるが、欠損のため文字は不明である。

3は須恵器の長頸壺で、胴部下端部から底部の遺存である。復元底径9.0cm、色調は暗灰色、胎土は緻密で、細砂粒、黒色粒を少々含む。高台部に回転横ナデ、底部周辺部に回転ヘラケズリが施され、回転糸切り痕が残る。右回転のロクロ成形で、内外面に灰緑色の自然灰釉がみられる。

4は土器片錠である。円板状で、須恵器の壺の口縁部を転用している。径4.4cm、厚さ0.8cm、重さ27.5g、色調は暗青灰色、胎土は砂粒を含み、小石を少々含む。櫛描波状文、篦描沈線が施される。

5は、「凹」字形の砥石片である。長さ6.1cm、幅3.3cm、厚さ1.3cm~1.5cm、重さ63.1g、色調は灰白色、石材は巖灰岩質である。

6は剣片である。長さ4.9cm、幅2.8cm、厚さ1.4cm、重さ14.6g、色調は暗青灰色、石材はチャート質である。原石面が残る。

7はクサビ形石器と考えられる。長さ2.3cm、幅2.2cm、厚さ0.9cm、重さ5.4g、色調は暗青灰色、石材はチャート質である。両端に打撃による剝離が観察される。

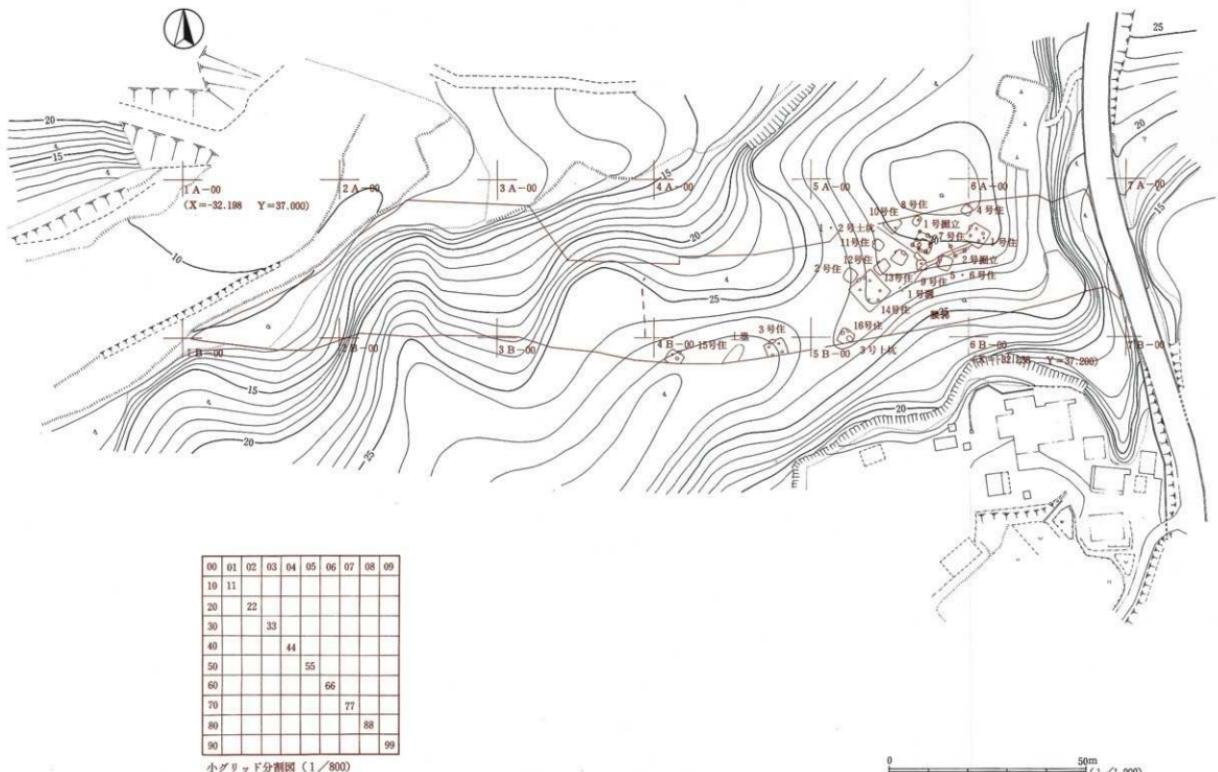
8は石鎌である。先端を欠く。長さ2.1cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm、重さ0.9g、色調は黒色、石材は黒曜石である。基部に抉りが施される。

9は磨石である。長さ4.7cm、幅4.7cm、厚さ3.6cm、重さ108.4g、色調は淡黄灰色、石材は砂岩質である。円礫を使用し、全体が磨耗している。

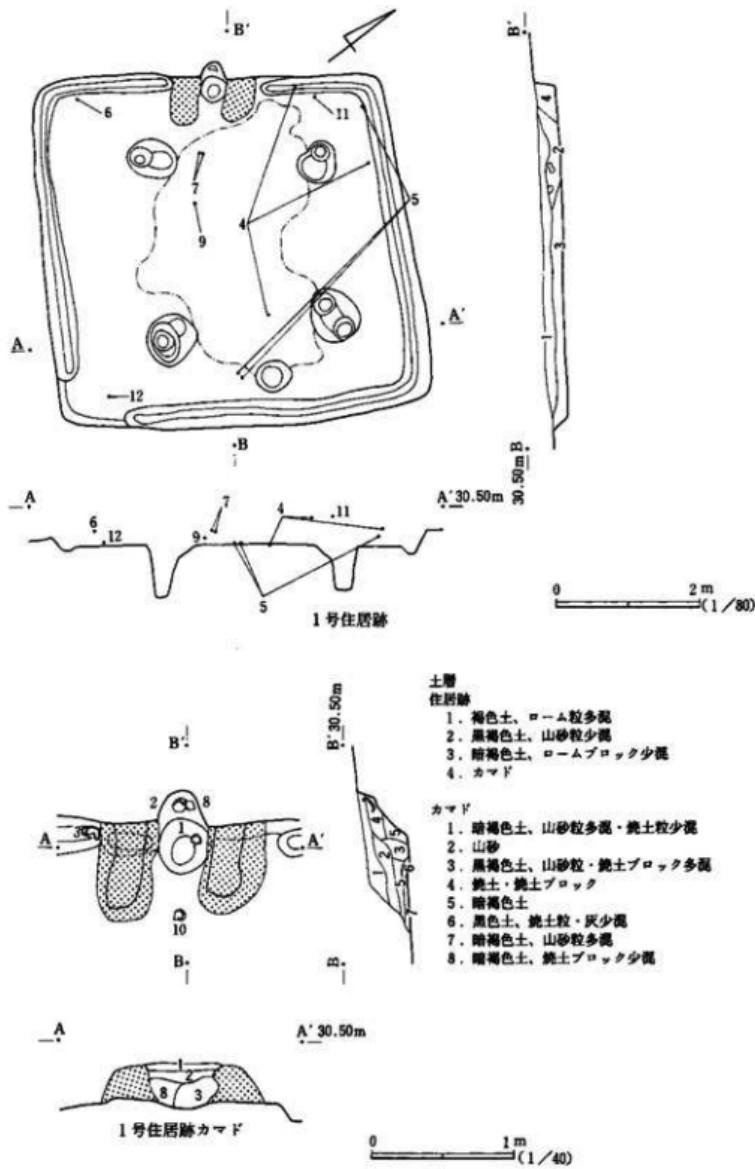
なお、縄文時代早期条痕文系土器、及び前期、中期の土器の小破片が少量出土している。

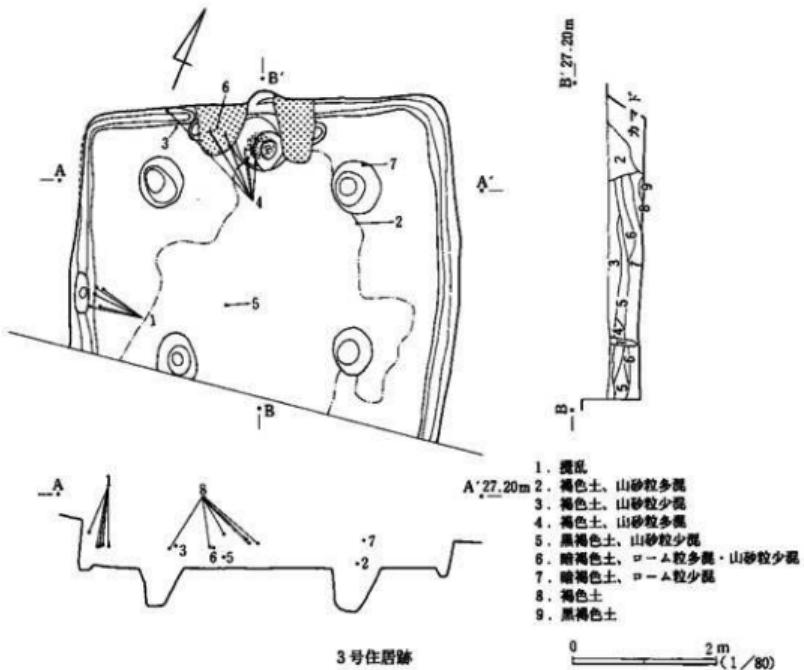
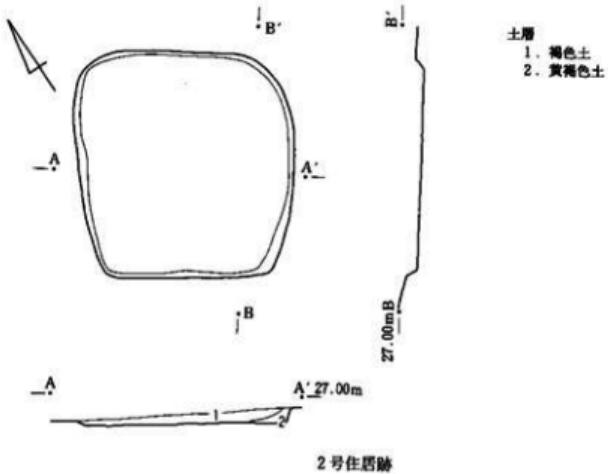
また、砦跡とは直接関連はないが、少量の近世陶器、寛永通宝、鉄滓が出土している。

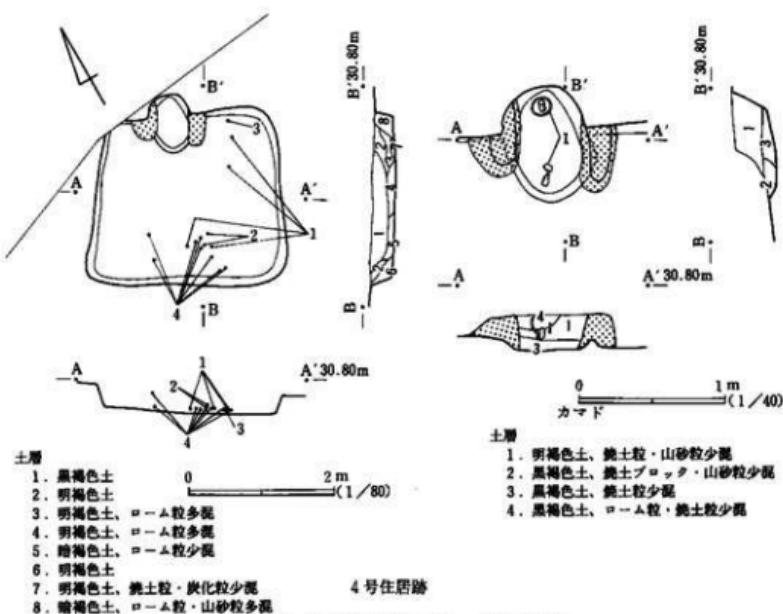
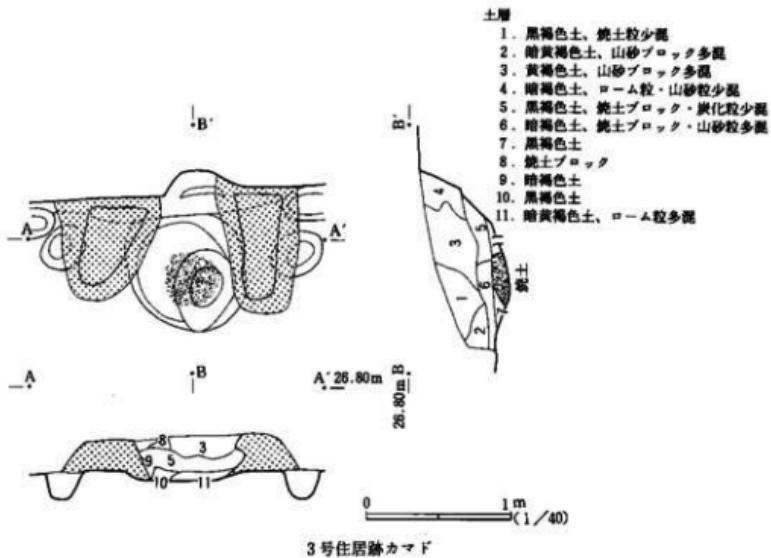
- 注1 木内達彦『千葉県印旛郡酒々井町長勝寺脇館跡』財団法人 印旛都市文化財センター 1990
- 「(21)佐倉市石川館跡遺跡(02-036)」『財団法人 印旛都市文化財センター年報 10 一平成5年度
-』1994
- 村田一男ほか『千葉県酒々井町北押出し遺跡調査報告書』酒々井町北押出し遺跡調査会 1984
- 2 岡川宏道ほか『京葉』 千葉市東寺山戸張作遺跡』財団法人 千葉県文化財センターほか 1977
- 3 永嶋正春・濱島正士「出土した縄—そのかたちと機能—」『企画展示 科学の目でみる文化財』国立
歴史民俗博物館 平成4年
- 4 平野ほか『神宿横穴群発掘調査報告書』神宿横穴群発掘調査団 1978
- 5 木内達彦『千葉県印旛郡酒々井町長勝寺脇館跡』財団法人 印旛都市文化財センター 1990
- 6 大野康夫ほか『八千代市白幡前遺跡—萱田地区埋蔵文化財調査報告書V-』財団法人 千葉県文化
財センターほか 1991
- 7 吉川金次『ものと人間の文化史 18・鎌』法政大学出版局 1976
- 8 佐久間豊ほか『千葉東南部ニュータウン 17-高沢遺跡-』財団法人 千葉県文化財センターほか 1990



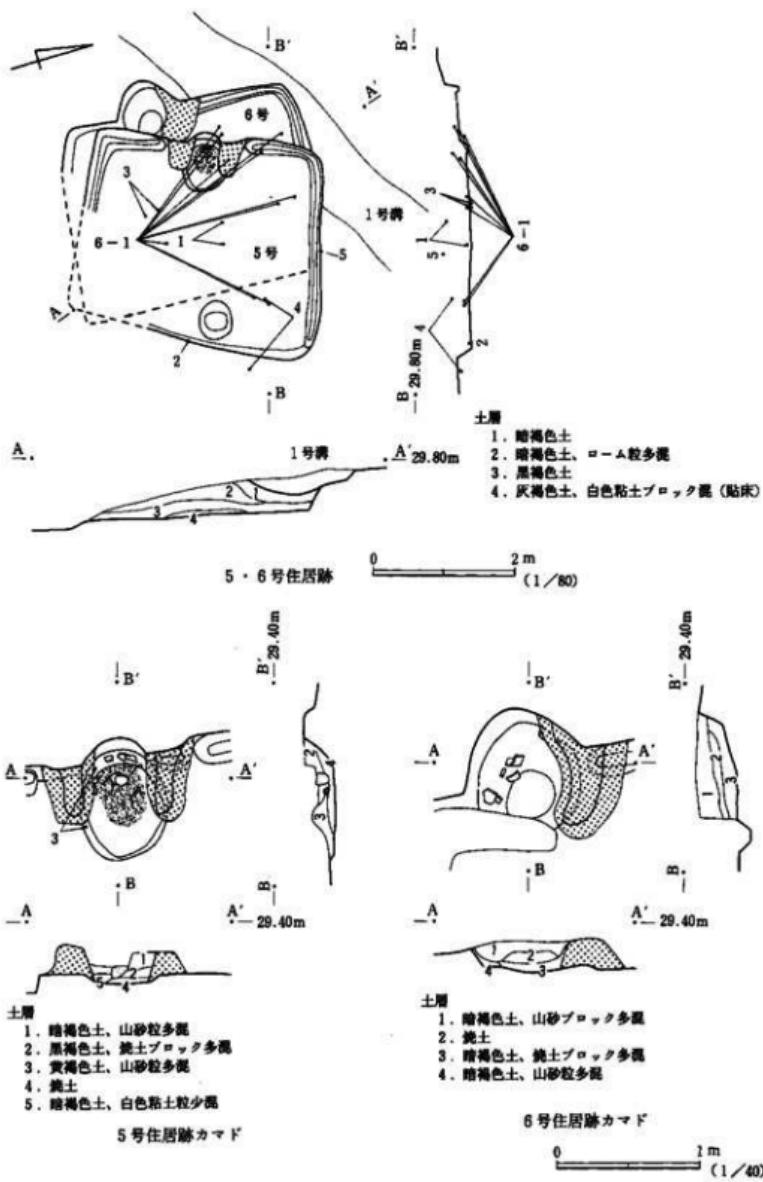
第4図 高岡遺跡古跡遺構・グリッド配置図



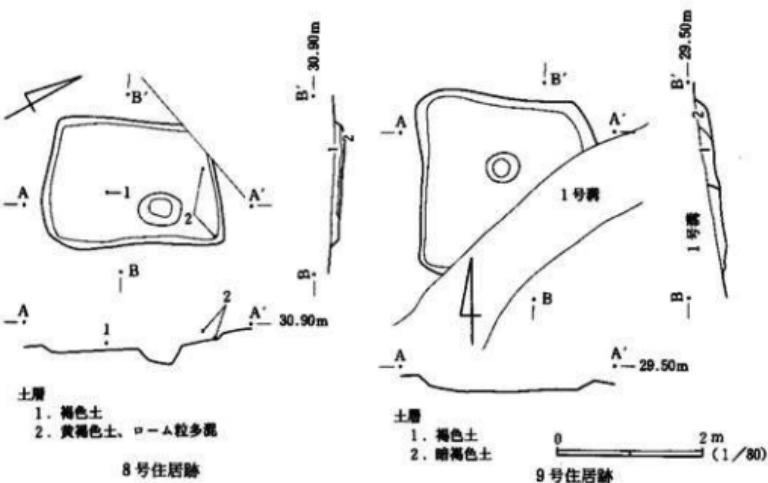
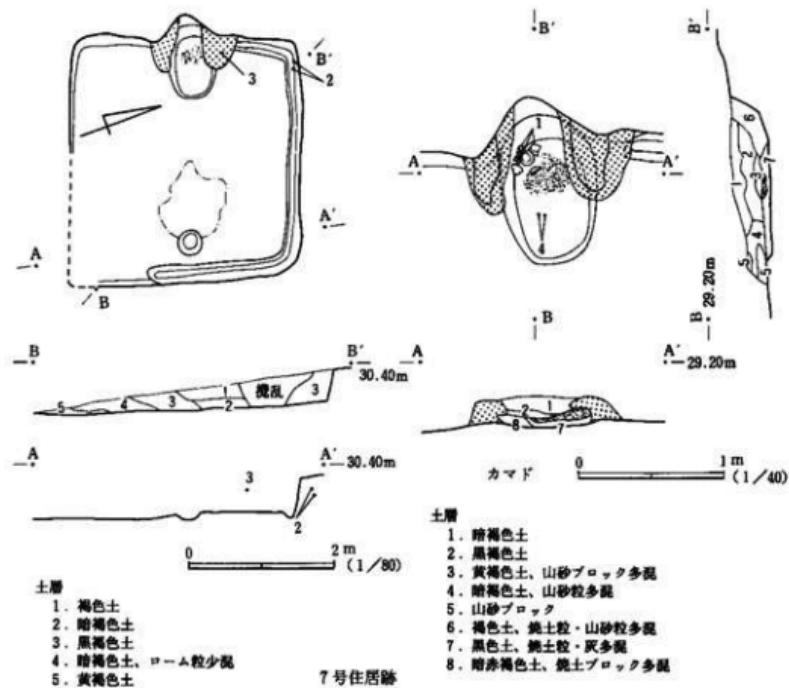




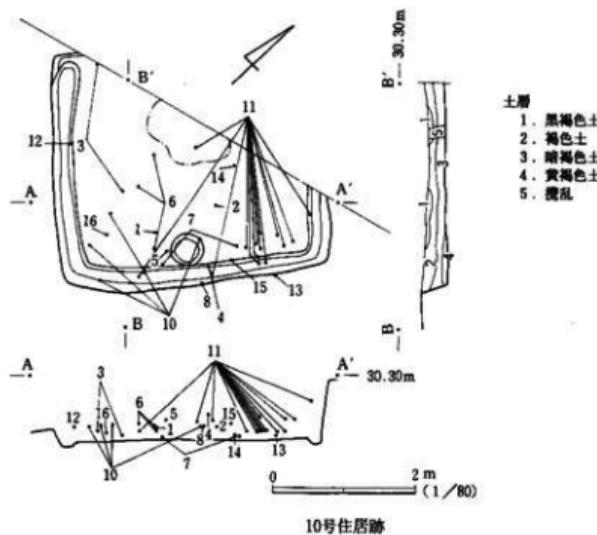
第7図 3号住居跡カマド、4号住居跡



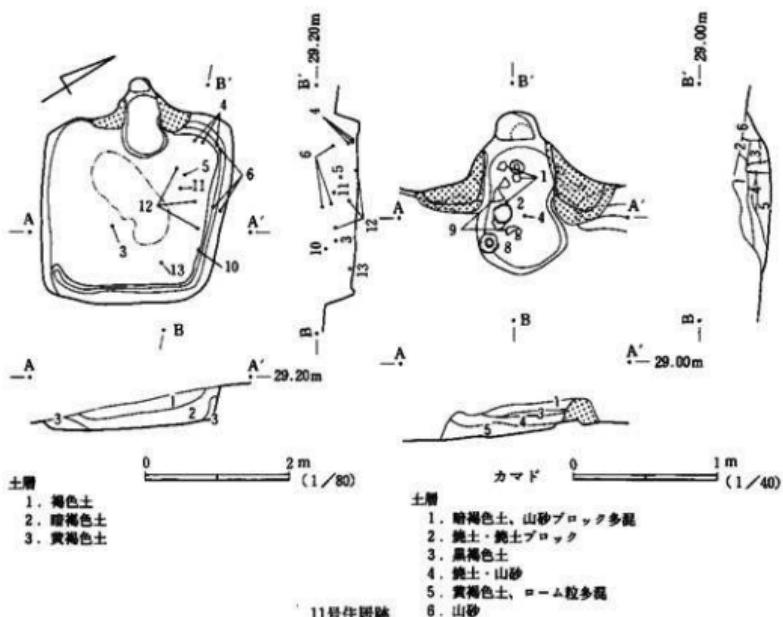
第8図 5・6号住居跡



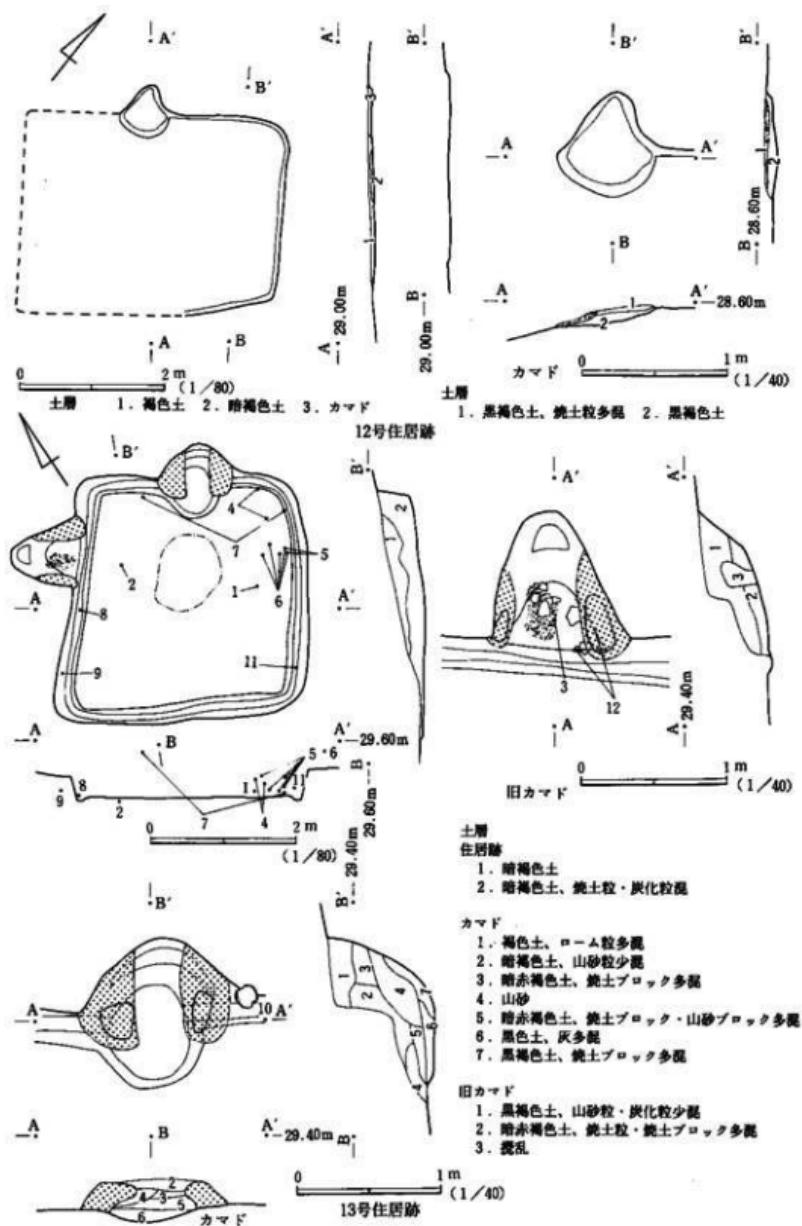
第9図 7・8・9号住居跡



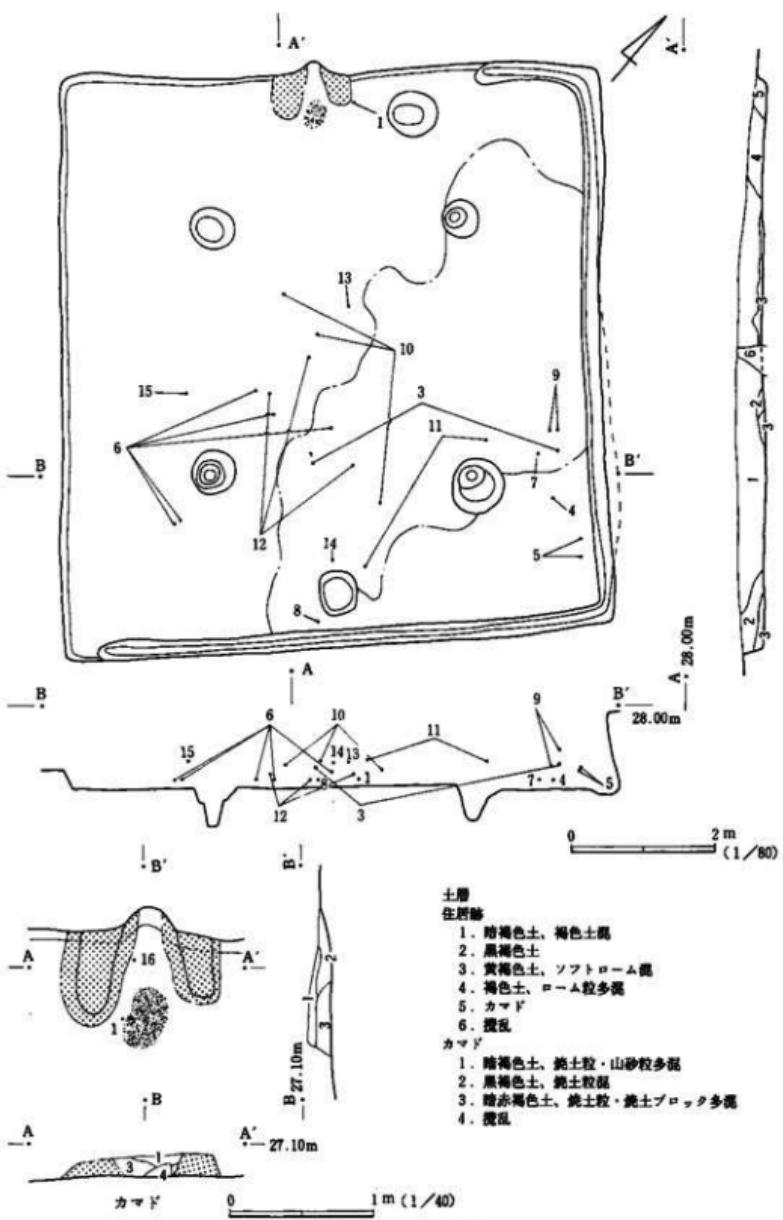
10号住居跡



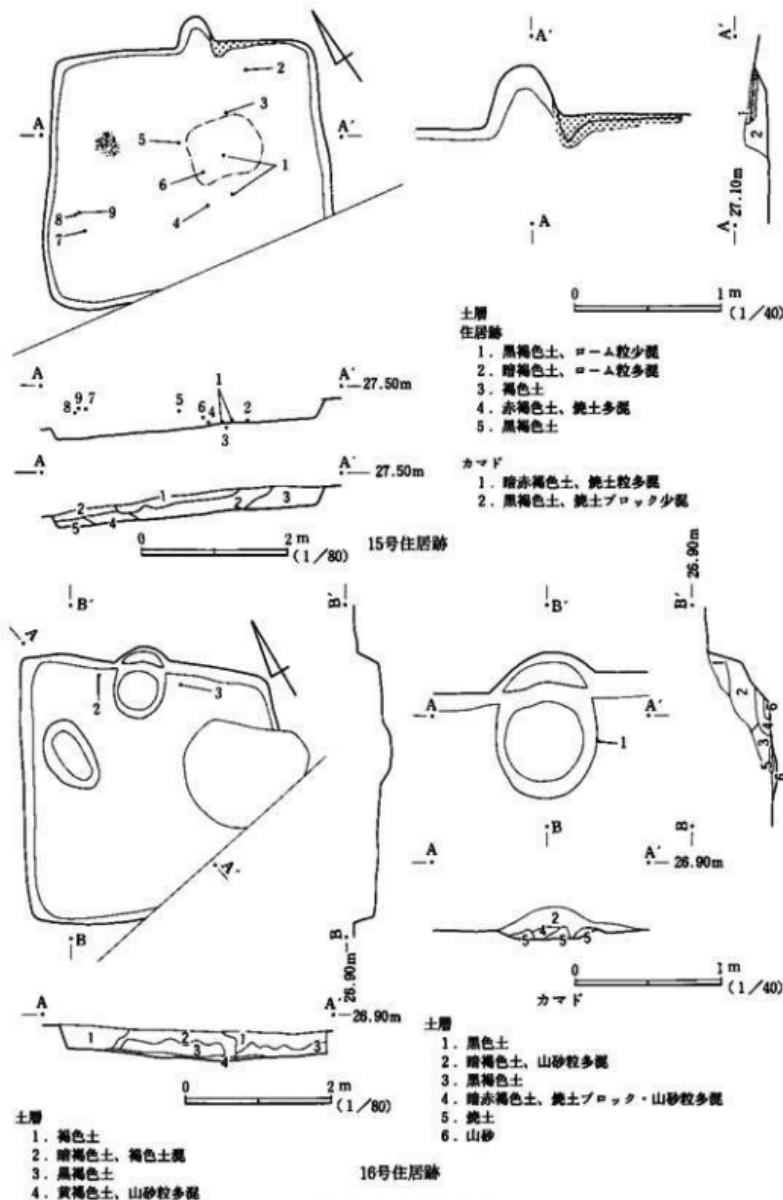
第10図 10・11号住居跡



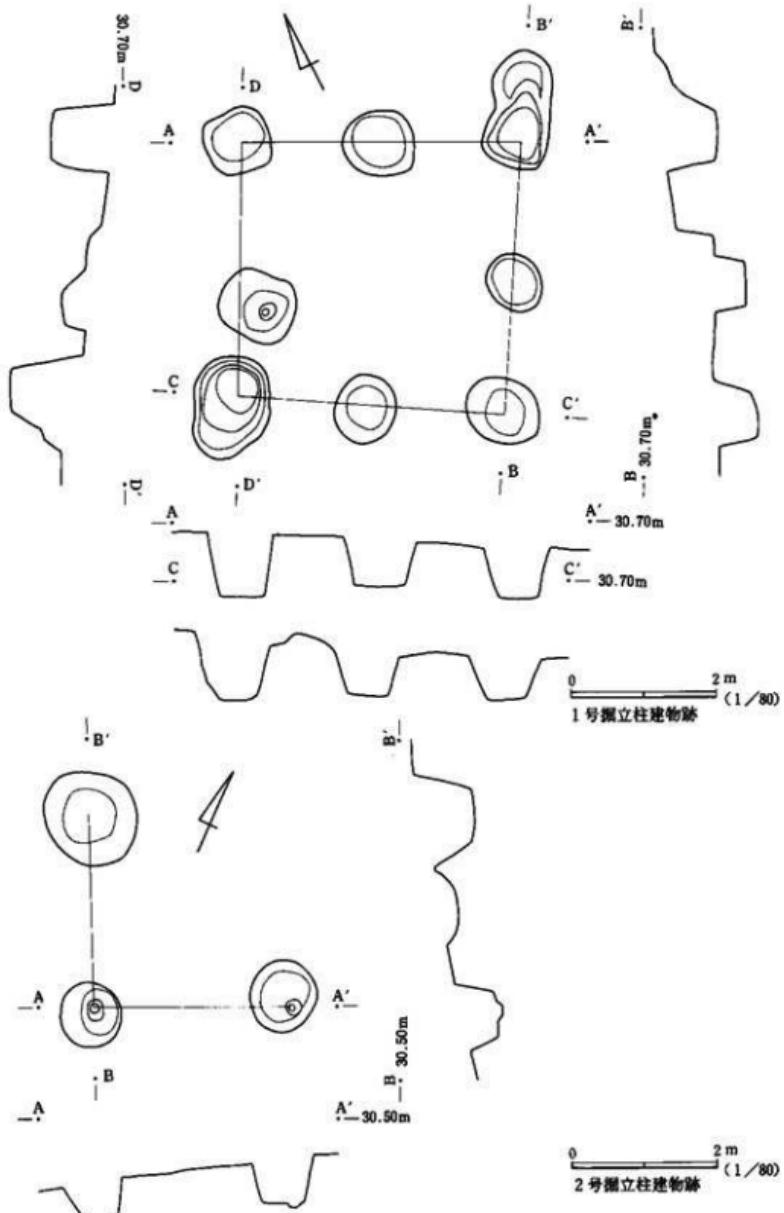
第11図 12・13号住居跡



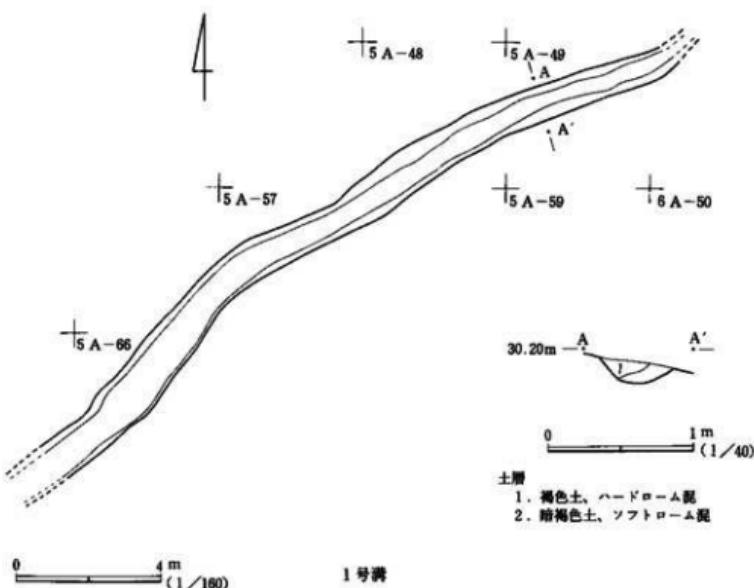
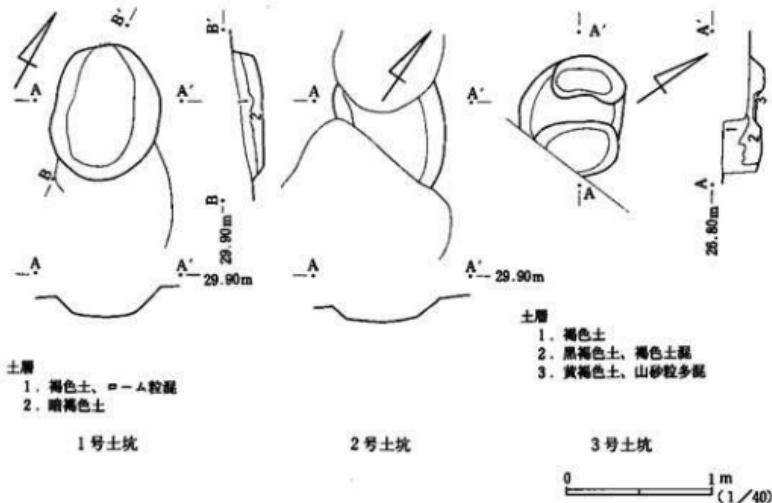
第12図 14号住居跡



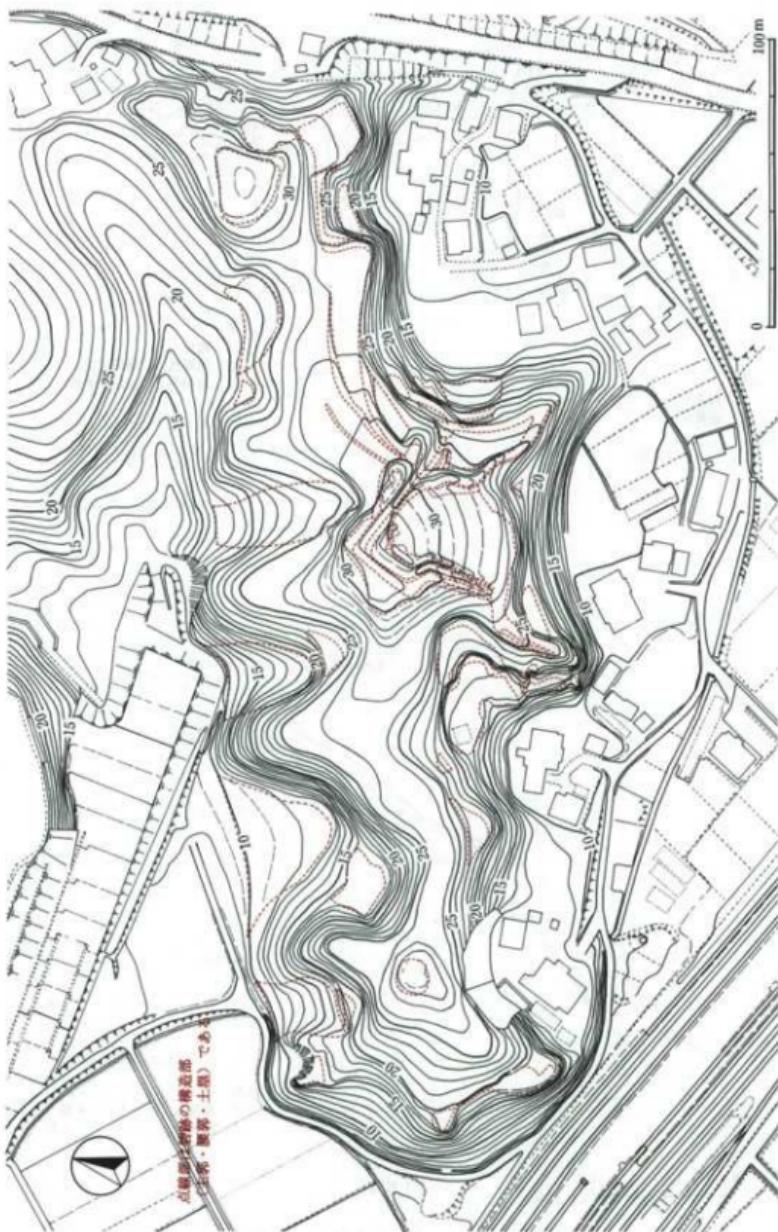
第13図 15・16号住居跡



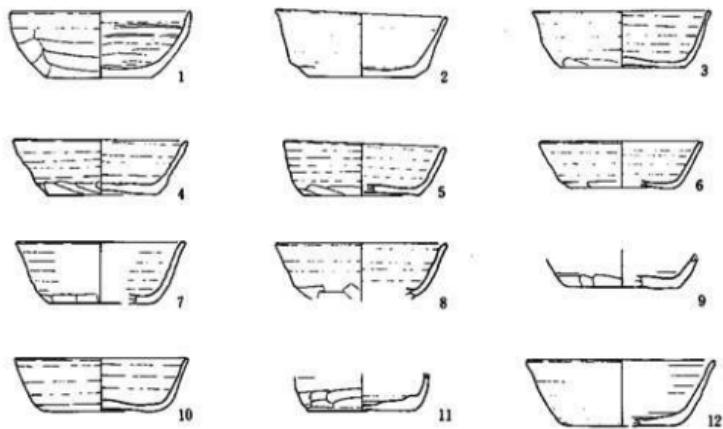
第14図 1・2号掘立柱建物跡



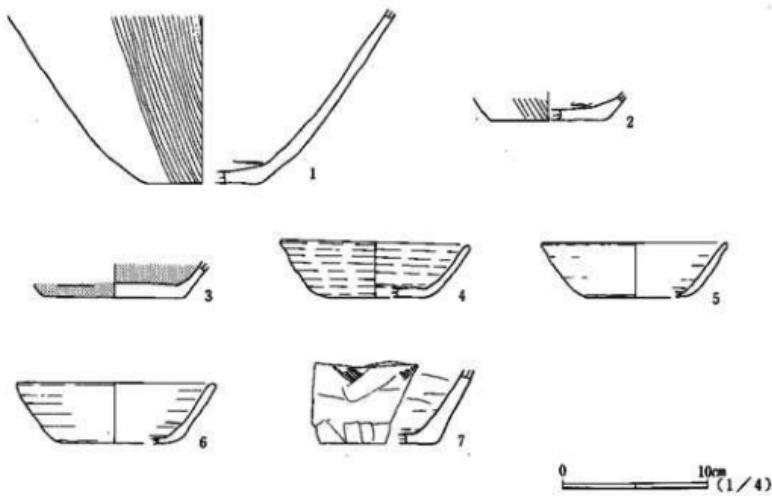
第15図 1・2・3号土坑、1号溝



第16図 高岡砦跡概念図 (1/2,000)

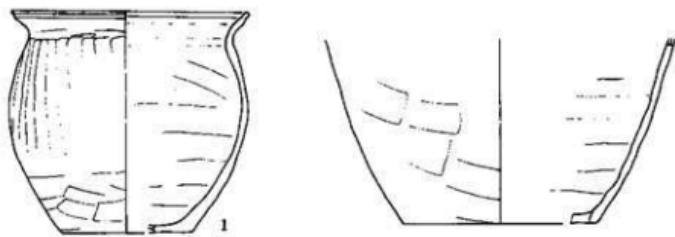


1号住居跡

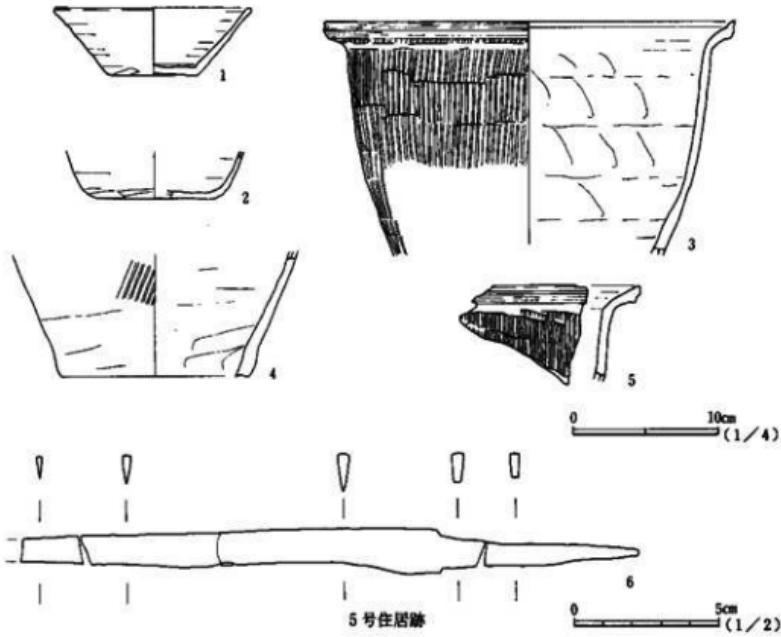


3号住居跡

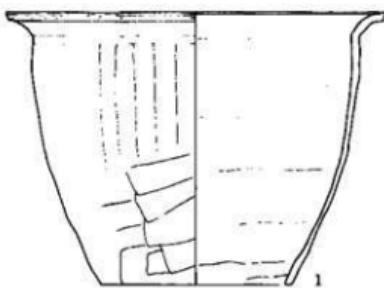
第17図 1・3号住居跡出土遺物



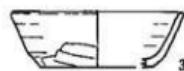
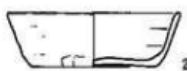
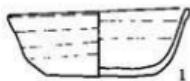
4号住居跡



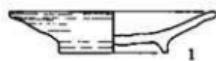
第18図 4・5号住居跡出土遺物



6号住居跡



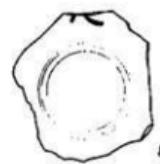
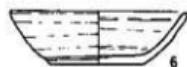
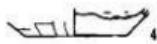
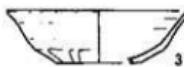
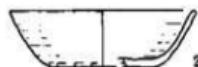
7号住居跡



8号住居跡



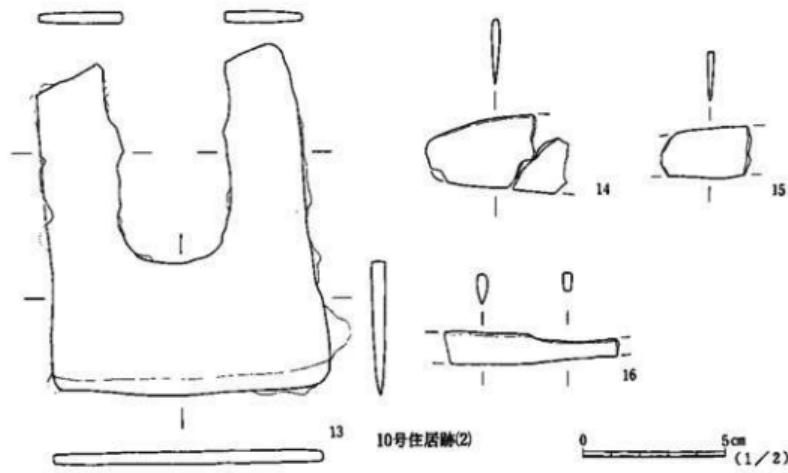
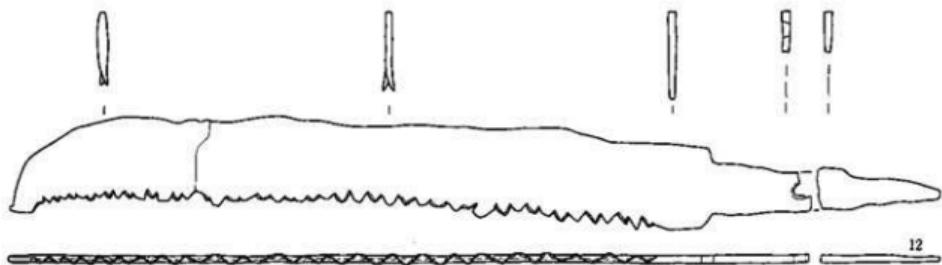
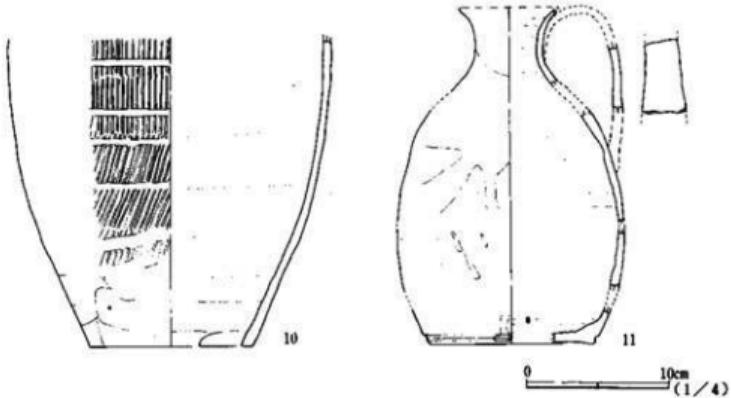
9号住居跡



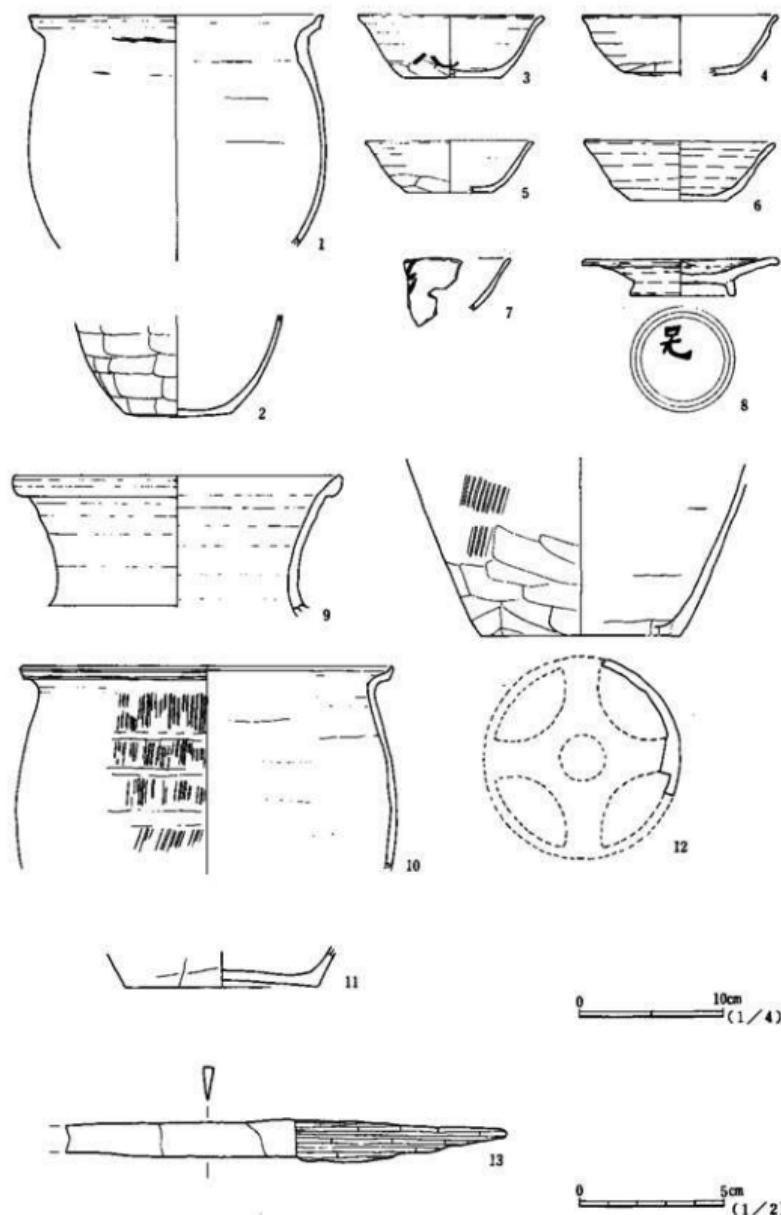
10号住居跡(1)

0 10cm (1/4)

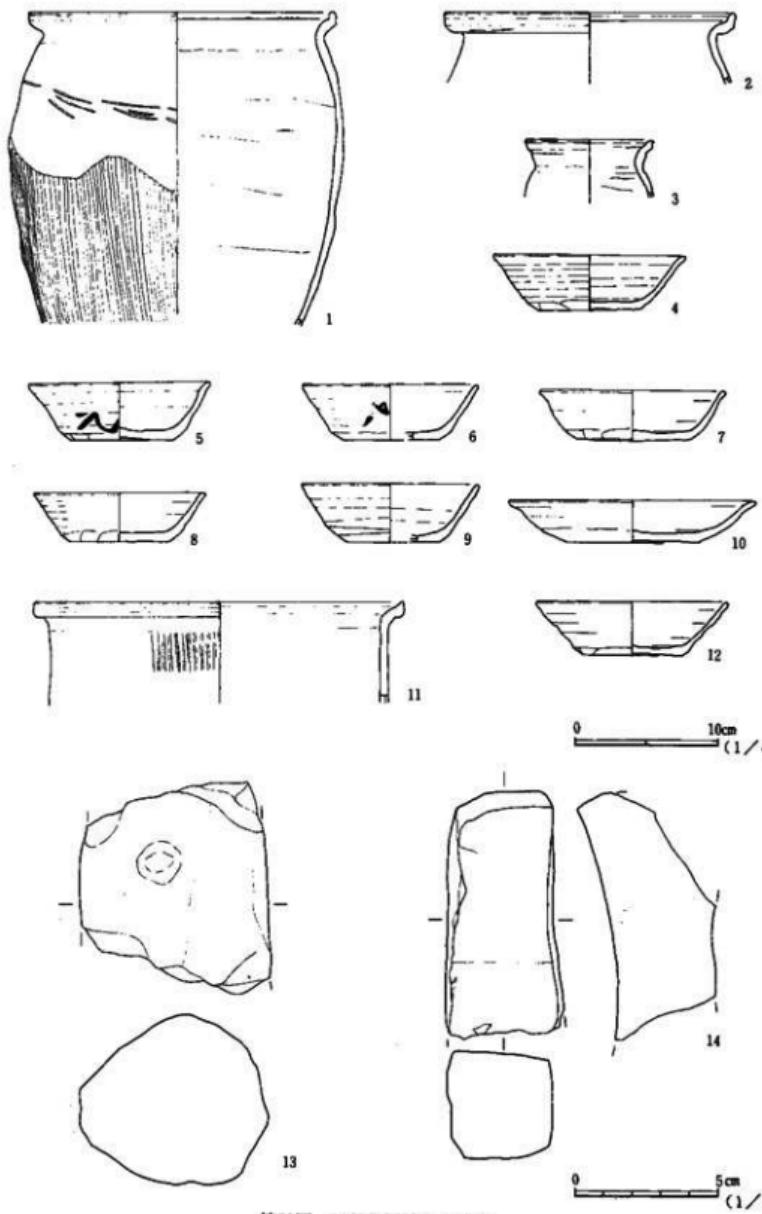
第19図 6・7・8・9号住居跡、10号住居跡(1)出土遺物



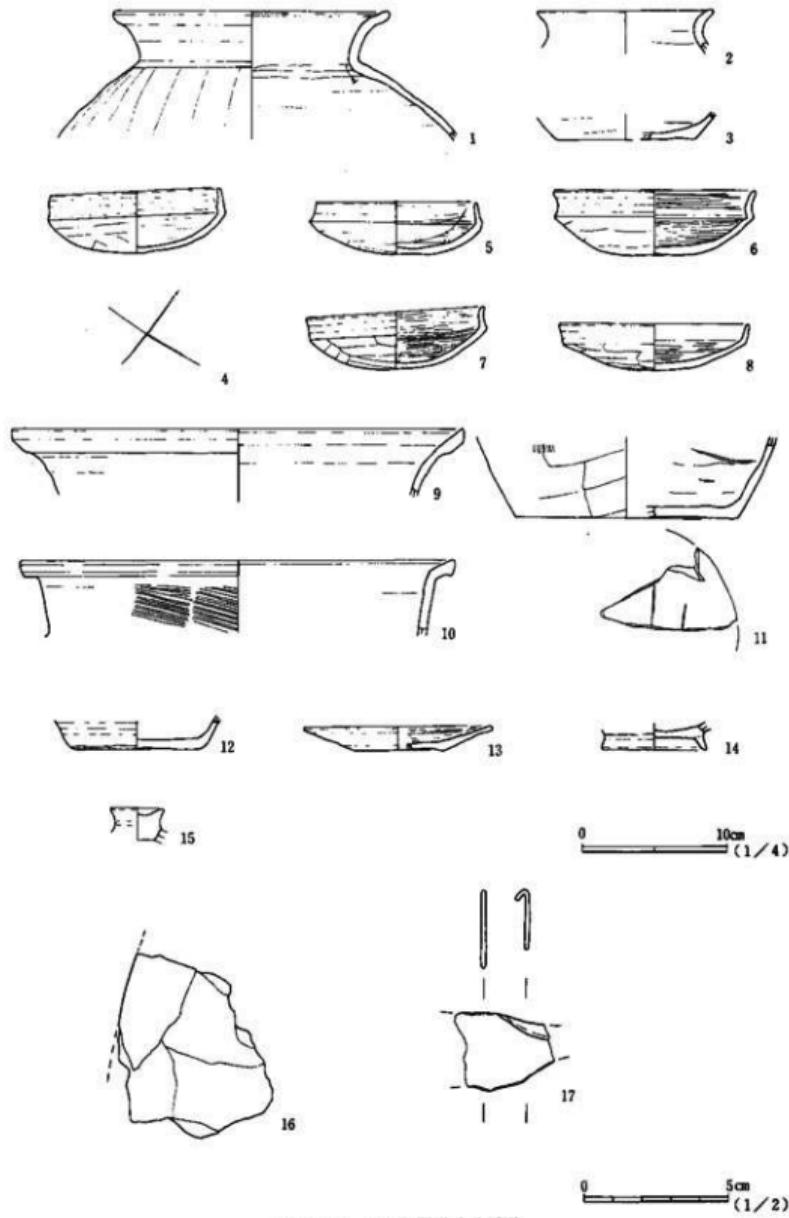
第20図 10号住居跡(2)出土遺物



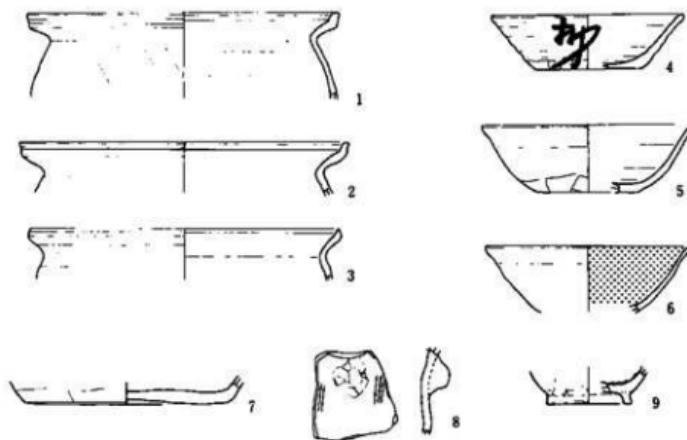
第21図 11号住居跡出土遺物



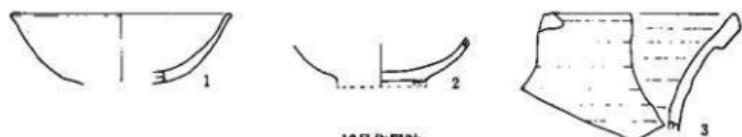
第22図 13号住居跡出土遺物



第23図 14号住居跡出土遺物



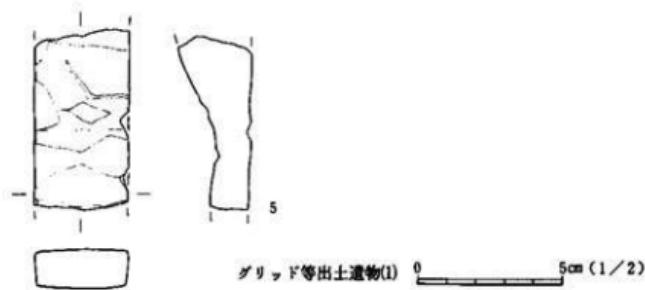
15号住居跡



16号住居跡

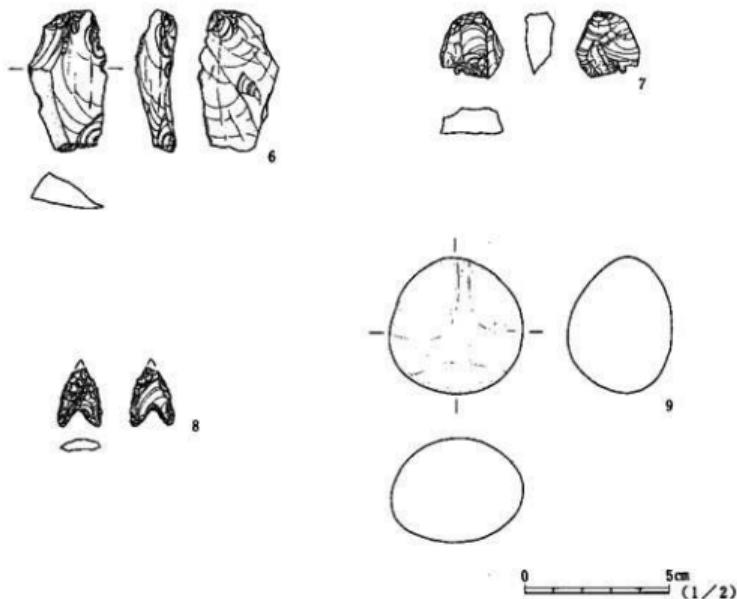


0 10cm (1/4)



グリッド等出土遺物(1) 0 5cm (1/2)

第24図 15・16号住居跡、グリッド等出土遺物(1)



第25図 グリッド等出土遺物(2)

III 大蛇麻賀多脇遺跡

1 調査区の概要 (第26・27図)

調査区は、遺跡を東西に帯状に横切っている。遺跡は北及び南から的小支谷に挟まれた、南北にのびる尾根状の台地上に位置する。標高は約31mである。調査区は台地の最も狭い部分であり、北及び南側に平坦面が広がっている。

検出した遺構は、旧石器時代石器ブロック2か所、土墳墓7基、台地整形遺構1か所、井戸跡2基、遺物集中地区1か所である。調査区の西部に分布し、特に、土墳墓は西端部に集中する。

Ⅰ層中にはテフラが確認され、現在まで大規模な台地整形が行われていないことが判明した。

2 旧石器時代石器ブロック

旧石器時代としては、石器ブロックが調査区中央部北端に、東西に並んで2か所検出された。西側をAブロック、東側をBブロックとする。両者ともⅢ層を中心に石器が分布している。また、土層断面から、地山面（ローム面、Ⅲ層以下）が地表面に比べて傾斜していることが確認された。

各ブロックの内容は、次のとおりである。

Aブロック (第28図 図版26)

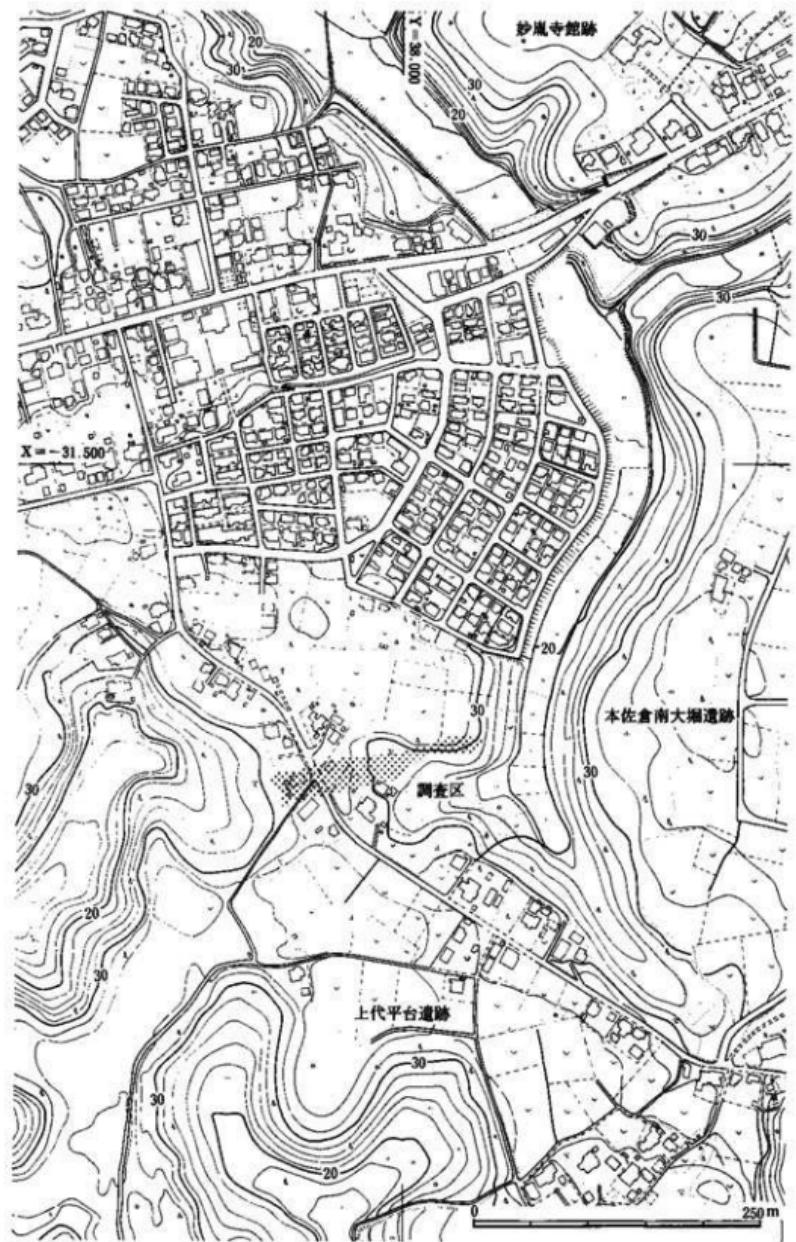
本ブロックは、3A-82グリッドに確認された。大きさは径4mほどで、出土石器数は2点で、使用痕のある剝片及びチップである。石材はチャート質である。また、本ブロックは調査区の北側境界に接しているので、調査区外に分布が広がる可能性は大きい。

出土石器

1は使用痕のある剝片である。長さ3.6cm、幅4.6cm、厚さ0.2cm～0.3cm、重さ8.7gである。色調は暗青灰色で、石材はチャート質である。L字形の長辺部分に使用痕と思われる細かな剥離がある。

Bブロック (第29図 図版26)

本ブロックは、グリッドポイント3A-85と3A-86の間に確認され、大きさは径3mほどである。出土石器数は5点で、尖頭器が2点、剝片が1点、チップが2点である。石材はチャート質及び安山岩質である。調査区の北側境界に接しているので、調査区外に分布が広がる可能性がある。また、A・Bブロック間の距離は8mほどで、両者を含めたユニットが調



第26図 大蛇麻賀多脇遺跡周辺地形図 (1/5,000)

査区の北に広がっていると思われる。

出土石器

1・2は尖頭器である。

1は、長さ3.7cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm～0.4cm、重さ2.7g、色調は淡褐色、灰白色、暗灰色のまだら模様で、石材はチャート質である。

2は、長さ4.6cm、幅1.5cm、厚さ0.2cm～0.6cm、重さ5.2g、色調は暗灰色で、石材は安山岩質である。原石面を残している。

3は剝片である。長さ4.9cm、幅4.4cm、厚さ0.2cm～1.3cm、重さ17.6g、色調は暗緑灰色で、石材はチャート質である。

3 土坑

調査区の西端部に集中して検出された。7基検出されているが、調査区外、特に北側に分布が広がっていると考えられる。これらは底面に、白色粘土が貼られた共通した特徴から、一つの群としてとらえられる。また、遺物はほとんど検出されなかったが、粘土を貼る特徴から、中世の所産と考えられる。

各土坑の内容は、次のとおりである。

1号土坑（第30図 図版26）

調査区の西端、斜面付近に検出された。規模は1.5m×1.15mの橿円形で、深さ0.5mである。長軸を中心とした方向は、N-10°-Eである。底面に白色粘土が貼られ、厚さは15cm～20cmである。

2号土坑（第30図 図版27）

調査区の西端、斜面付近に検出された。規模は1.65m×1.2mの長方形で、深さ0.6mである。長軸を中心とした方向は、N-79°-Eである。底面に白色粘土が貼られ、厚さは5cm以下である。

3号土坑（第30図 図版27）

調査区の西端部に検出された。6号土坑と重複しているが、土層の観察から、本土坑が新しいと考えられる。規模は径1.2mの円形で、深さ0.4m～0.6mである。底面に白色粘土が貼られ、厚さは20cm～40cmである。

4号土坑（第30図 図版27）

調査区の西端部に検出された。ほとんど削平され、ほぼ底面のみの遺存である。規模は0.7m×0.5mの椭円形で、深さ0.05m～0.1mである。長軸を中心とした方向は、N-62°-Wである。底面に白色粘土が貼られ、厚さは10cmである。

5号土坑（第30図 図版28）

調査区の西端部に検出された。ほとんど削平され、ほぼ底面のみの遺存である。南東隅が攪乱を受けている。規模は2.4m×1.85mの長方形で、深さ0.18mである。長軸を中心とした方向は、N-74°-Eである。底面に白色粘土が貼られ、厚さは10cm～15cmである。

6号土坑（第30図 図版28）

調査区の西端部に検出された。3号土坑と重複しているが、土層の観察から、本土坑が古いと考えられる。規模は1.7m×1.2mの長方形で、深さ0.7mである。長軸を中心とした方向は、N-71°-Eである。底面に白色粘土が貼られ、厚さは5cm～10cmである。

7号土坑（第30図 図版28）

調査区の西端部に検出された。斜面に位置するため、残りは悪い。規模は2.2m×1.5mの長方形で、深さ0.2m～0.5mである。長軸を中心とした方向は、N-66°-Eである。底面に白色粘土が貼られ、厚さはごく薄い。

4 台地整形遺構・井戸跡

台地整形遺構（第31・32図 図版29）

調査区中央の緩やかな斜面部に位置し、その中に井戸跡が検出された。台地整形遺構は斜面を削って、テラス状に平坦面を造っている。平坦面は斜面に沿って、南北方向に弧状に造られ、削られてできた段差は約1mである。南側は、調査区外に連すると考えられる。

台地整形遺構出土遺物（第33～35図 図版31・32）

出土遺物は土器、陶器、磁器、砥石、石造物である。時期は中世末から近世にかけてである。

1は内耳土鍋（培培）である。口縁部から体部の遺存で、内面体部に環状の耳があり、鉤手によるとと思われる磨耗が見られる。復元口径36.4cm、色調は褐色、胎土は細砂粒を少々含む。表面はススが吸着し黒色を呈する。

2は陶器鉢である。底部中央を欠く。口縁部は内傾し、口縁部端はほぼ直立する。復元口径12.0cm、復元最大径13.4cm、復元底径8.8cm、器高5.9cm、色調は暗茶褐色、胎土は砂粒を少々含む。無釉である。

3は陶器擂鉢である。口縁部から体部の遺存で、体部上端で屈曲し、口縁部は受け口状になる。復元口径32.4cm、色調は明灰褐色で暗茶褐色釉が施される。胎土は砂粒を少々含む。体部内面に櫛描きによる摺り目が施される。

4は陶器擂鉢である。口縁部から体部の破片で、口縁部はほぼ水平に広がる。色調は白色で暗褐色釉が施される。胎土は砂粒を少々含む。体部内面に櫛描きによる摺り目が施される。

5は陶器壺である。口縁部から胴上部の遺存である。短頸壺で、胴部は球形状である。復元口径8.6cm、色調は暗褐色で、ゴマシオ状の灰色釉が施される。胎土は砂粒をほとんど含まない。

6は陶器壺である。口縁部から頸部の遺存で、口縁部が折り返され縦帯をつくる。復元口径17.0cm、復元頸径15.8cm、色調は明茶褐色、胎土は砂粒を少々含む。

7は陶器鉢である。口縁部から体部の遺存で、口縁部は水平に広がる。復元口径26.4cm、色調は白色で灰白色釉が施される。胎土は細砂粒を少々含む。体部に回転ヘラケズリが施される。

8は陶器鉢である。口縁部から体部の遺存で、口縁部は内湾し、口縁部端は平らである。復元口径17.5cm、色調は黄白色で黄緑褐色釉が施される。胎土は砂粒を少々含む。体部に回転ヘラケズリが施される。

9は陶器徳利である。胴部下半部から底部の遺存で、円筒状の胴部に、高台を持つ。胴径10.9cm、底径7.6cm、色調は灰褐色で黄緑灰色釉がハケ塗りで施される。胎土は細砂粒を少々含む。底部及び高台部に回転ヘラケズリが施される。

10は陶器徳利である。胴部下端部から底部の遺存で、底部中央を欠く。円筒状の胴部で、高台を持つ。復元底径7.8cm、色調は灰褐色で黄緑灰色釉が施される。胎土は細砂粒を少々含む。胴部下端部、底部及び高台部に回転ヘラケズリが施される。

11は陶器徳利である。胴部下端部から底部の遺存で、円筒状の胴部に、高台を持つ。復元底径7.8cm、色調は灰色で暗褐色釉が施される。胎土は細砂粒を少々含む。胴部下端部、底部及び高台部に回転ヘラケズリが施される。

12は磁器小鉢である。高台を持ち、口縁部が輪花状になる。口径10.0cm、底径6.2cm、器高3.7cm、色調は白色で透明釉が施される。胎土は非常に緻密である。

13は陶器三足筒型香炉である。復元口径10.5cm、復元底径9.6cm、器高5.7cm、色調は黄白色で黄緑灰色釉が施される。胎土は細砂粒を少々含む。体部に文様が彫られているが、欠損のため不明瞭である。口縁部内側に一条の沈線が施され、底部に回転ヘラケズリが施される。

14は陶器碗である。高台を持ち、口縁部はほぼ直立する。復元口径10.1cm、復元底径10.4cm、器高5.1cm、色調は灰色で灰色釉と茶褐色釉が左右2分割で施される。胎土は砂粒をほとんど含まない。底部に回転ヘラケズリが施される。

15は陶器碗である。高台を持ち、半球形の体部で、口縁部は内湾する。復元口径9.1cm、復元

最大径9.6cm、底径3.0cm、器高5.7cm、色調は黄白色で灰色釉が施される。胎土は砂粒をほとんど含まない。体部下端部及び底部に回転ヘラケズリが施される。

16は磁器皿である。体部下端部から底部の遺存で、高台を持ち、全面に施釉される。復元底径4.2cm、色調は灰色で灰白色釉に染付が施される。胎土は非常に緻密である。

17は陶器皿である。高台を持ち、口縁部は小さく外反する。底部中央を欠く。復元口径11.4cm、復元底径6.8cm、器高2.4cm、色調は黄白色で乳白色釉が施される。胎土に砂粒を少々含む。底部に回転ヘラケズリが施される。志野焼と思われる。

18は陶器皿である。高台を持ち、口縁部は小さく外反する。底部中央を欠く。復元口径12.8cm、復元底径8.1cm、器高2.4cm、色調は明灰褐色で乳白色釉が施される。胎土は砂粒を少々含む。底部に回転ヘラケズリが施される。志野焼と思われる。

19は陶器皿である。復元口径12.2cm、底径6.8cm、器高2.7cm、色調は黄白色で乳白色釉の地に茶褐色釉で文様が施される。胎土は砂粒を少々含む。体部下端部及び底部に回転ヘラケズリが施される。志野焼と思われる。

20は陶器灯明皿である。口径7.9cm、底径3.7cm、器高1.6cm、色調は灰褐色で茶褐色釉がハケ塗りされる。胎土は細砂粒を少々含む。体部及び底部回転にヘラケズリが施される。

21は陶器灯明皿である。底部中央を欠く。復元口径7.2cm、復元底径3.4cm、器高1.3cm、色調は灰褐色で茶褐色釉がハケ塗りされる。胎土は細砂粒を少々含む。体部及び底部回転にヘラケズリが施される。

22は陶器蓋である。径7.4cm、器高1.4cm、色調は灰色で茶褐色釉がハケ塗りされる。胎土は砂粒をほとんど含まない。体部及び底部回転にヘラケズリが施される。壺又は水注の蓋と思われる。

23は陶器灯明具と思われる。上下が開いた筒状である。復元口径7.2cm、脚径2.8cm、底径5.4cm、器高5.4cm、色調は明灰色で透明の釉が施される。胎土は砂粒をほとんど含まない。

24は陶器灯明具である。体部下半部から底部の遺存で、底径3.8cm、色調は灰色で黒褐色釉が施される。胎土は砂粒をほとんど含まない。底部に回転糸切り痕が残る。ひょうそくと思われる。

25～32は砥石である。25～31は「凹」字形、32は「凸」字形である。石材は、25が安山岩質、28が粘板岩質で、他は凝灰岩質である。

25は、長さ8.2cm、幅3.4cm、厚さ1.1cm～1.8cm、重さ67.1g、色調は暗灰色である。

26は、長さ7.2cm、幅4.3cm、厚さ1.3cm～3.0cm、重さ89.1g、色調は灰白色である。

27は、長さ8.0cm、幅2.1cm～2.6cm、厚さ1.4cm～1.6cm、重さ45.0g、色調は灰色である。

28は、長さ8.0cm、幅4.1cm、厚さ0.8cm～1.7cm、重さ73.8g、色調は淡灰褐色である。

29は、長さ5.4cm、幅4.1cm、厚さ3.0cm～3.8cm、重さ148.2g、色調は白色である。

30は、長さ9.8cm、幅2.7cm、厚さ1.2cm～1.6cm、重さ47.5g、色調は灰白色である。

31は、長さ4.7cm、幅3.4cm、厚さ0.4cm～2.0cm、重さ31.6g、色調は表面が茶褐色であるが、断面を見ると黄白色である。

32は、長さ8.0cm、幅2.9cm、厚さ1.5cm～3.0cm、重さ98.3g、色調は灰色である。

33・34は石造物の破片と思われる。

33は長さ6.8cm、幅5.7cm、厚さ5.2cm、色調は淡灰緑色、石材は砂岩質である。角柱状で、側面が10面に面取りされている。宝篋印塔の一部とも思われる。

34は色調淡灰褐色、石材は安山岩質である。五輪塔の塔身（水輪）部分と思われる。

井戸跡（第31・32図 図版29）

南北に並んで2基検出され、台地整形遺構の施設の一部と考えられる。これは、テラス面の埋土が井戸内にまで連続して堆積していることからも推定できる。

なお、台地整形遺構内からは、井戸跡以外の付属遺構は検出されなかった。

1号井戸跡（第32図 図版30）

規模は径2.0mの円形で、深さは、完掘できなかつたが、2.4m以上である。

出土遺物（第35図 図版32）

1は陶器擂鉢である。体部下端部から底部の遺存で、底部中央を欠く。復元底径9.4cm、色調は褐色、胎土は細砂粒を多く含む。体部内面に櫛描きによる掘り目が施される。

2は磁器碗である。体部下部から底部の遺存で、高台を持ち、高台端部を除いて全面に施釉される。底径4.1cm、色調は白色で青白色釉に染付が施される。胎土は非常に緻密である。

3は砥石である。「凸」字形で、長さ11.0cm、幅1.5cm～3.6cm、厚さ0.3cm～2.9cm、重さ136.4g、色調は淡灰褐色、石材は淡灰岩質である。

2号井戸跡（第32図 図版30）

規模は径1.7mの円形で、深さは、完掘できなかつたが、2.5m以上である。

出土遺物（第35図 図版32）

4は石造物の破片で、色調は灰褐色、石材は砂岩質である。宝篋印塔の九輪部分と思われる。

5 遺物集中地区

遺物集中地区（第36図 図版30）

調査区のはば中央に位置する。北側に緩やかに傾斜しているため、北半分の掘込みが不明であるが、平面形は方形と思われる。検出面からの深さは、最大で0.2mである。出土遺物は中世

末から近世にかけての陶器類がほとんどであるので、台地整形遺構の一部である可能性がある。
出土遺物（第37～40図 図版32～34）

出土遺物は、土器、陶器、磁器、石製品、瓦、砥石、土製人形である。時期は中世末から近世と思われる。

1・2は内耳土鍋（焙烙）である。

1は、内面体部に環状の耳があり、釣手によると思われる磨耗が見られる。耳は3か所で、一方が1か所、他方が2か所である。焼成後、耳の位置に孔があけられ、器面が磨耗しているので、耳が破損した後に孔をあけ釣手を付けたと考えられる。口径36.6cm、底径30.0cm、器高5.1cm、色調は褐色、胎土は細砂粒を少々含み、細雲母粒を含む。

2は、底部中央を欠く。内面体部に環状の耳があり、釣手によると思われる磨耗が見られる。耳は2か所である。復元口径36.2cm、復元底径30.1cm、器高5.0cm、色調は暗褐色、胎土は細砂粒を少々含み、細雲母粒を含む。

3・4は瓦質鉢である。形、胎土、焼成から火鉢と思われる。

3は平底で、口縁部が内湾する。底部中央を欠く。復元口径19.6cm、復元体部径24.8cm、復元底径17.0cm、器高18.3cm、色調は暗灰褐色、胎土は砂粒を少々含む。器面全体にヘラミガキが施され、菊花文様が彫られている。口縁部に沈線が施される。

4は平底で、口縁部が小さく内湾する。底部中央を欠く。復元口径24.2cm、復元底径18.1cm、器高9.1cm、色調は明褐色、胎土は砂粒を少々含む。底部にヘラケズリが施され、内面は口縁部に回転ヨコナデ、体部にナデが施される。体部は器面が剝離している。

5～9は陶器擂鉢である。

1は、口縁部から体部の破片である。口縁部は屈曲し、受け口状になる。色調は灰褐色で暗茶褐色釉が施される。胎土は細砂粒を少々含む。体部内面に櫛描きによる擦り目が施される。

6は、口縁から体部の破片である。口縁部は縦帯状になり、沈線が施される。色調は赤茶褐色で無釉である。胎土は砂粒を含む。体部に回転ヘラケズリ、体部内面に櫛描きによる擦り目が施される。

7は、体部の破片である。色調は灰褐色で暗茶褐色釉が施される。胎土は細砂粒を含む。体部に回転ヘラケズリ、体部内面に櫛描きによる擦り目が施される。

8は、体部下部から底部の遺存で、底部中央を欠く。復元底径16.6cm、色調は暗赤褐色で無釉である。胎土は砂粒を含む。底部にヘラケズリが施され、体部内面に櫛描きによる擦り目が施されるが、使用のため磨耗している。

9は、体部下部から底部の破片である。色調は灰褐色で暗茶褐色釉が施される。胎土は砂粒、黒色粒を含む。底部に回転糸切り痕が残る。体部内面に櫛描きによる擦り目が施されるが、使用のため磨耗している。

10は瓦質鉢である。口縁部から体部の遺存である。円筒状で、口縁部がわずかに開く。復元口径10.4cm、復元体部径10.1cm、色調は黒色、胎土は砂粒を少々含む。体部に横目状文（横目か）が施される。

11は磁器染付瓶である。口縁部から胴部上端部の遺存で、長頸で、口縁部が外反する。口径5.2cm、頸径3.1cm、色調は灰白色で乳白色釉に青灰色釉で施文が施され、頸部内面まで施釉される。胎土は非常に緻密である。

12は磁器染付碗である。体部から底部の遺存である。底径4.9cm、色調は灰白色で乳白色釉に青灰色釉で施文が施される。高台部端を除き全面に施釉される。胎土は非常に緻密である。11と類似した染付文が施される。

13は陶器徳利である。胴部下半部から底部の遺存である。胴部は円筒に近い持状で、底部に高台を持つ。復元胴径9.0cm、底径6.7cm、色調は灰色で淡黄緑灰色釉が施される。胎土は細砂粒を少々含む。胴部及び底部に回転ヘラケズリが施される。

14は陶器鉢である。体部から底部の遺存で、底部に高台を持ち、体部上部に橢円形の窓状の穴が施される。復元体部径14.2cm、底径10.2cm、色調は灰白色で黒褐色釉が施される。胎土は細砂粒を少々含む。高台部に回転ヨコナデ、底部に回転ヘラケズリが施される。形から手あぶり型の火鉢と思われる。

15は陶器壺である。胴部の遺存で、高台を持つが、剥落している。復元胴径12.3cm、色調は灰褐色で茶褐色釉が施される。胎土は細砂粒を少々含む。胴部に回転ヘラケズリが施される。

16は陶器碗と思われる。体部下端部から底部の遺存で、高台を持つ。復元底径7.0cm、色調は灰白色で茶褐色釉が施される。胎土は細砂粒を含む。底部に回転ヘラケズリ、高台部に回転ヨコナデが施される。二次的焼成のためススが付着する。

17～20は陶器碗である。

17は、口縁部はほぼ直立し、口縁部端は丸い。高台を持つ。復元口径11.4cm、底径4.8cm、器高7.3cm、色調は灰色で黄緑褐色釉が底部を除いて全面に施され、口縁部及び体部の一部に乳白色釉が施される。胎土は細砂粒を含む。高台部に回転ヨコナデが施される。

18は、底部中央を欠く。口縁部は小さく外反して、肥厚する。高台を持つ。復元口径12.8cm、底径6.8cm、器高6.1cm、色調は暗灰色で淡緑灰色釉が底部を除いて全面に施される。胎土は細砂粒を少々含む。高台部に回転ヨコナデが施される。

19は、口縁部から体部の遺存で、口縁部はほぼ直立し、口縁部端は丸い。高台を持つと思われる。復元口径10.4cm、色調は灰褐色で灰白色釉が内面及び口縁部に、褐色釉が体部に施される。胎土は細砂粒を少々含む。体部下部に回転ヘラケズリが施される。

20は、口縁部から体部の遺存で、筒状になると思われる。復元口径10.8cm、色調は灰褐色で、灰色釉の地に黒褐色釉、青色釉で竹の文様が施される。胎土は細砂粒を少々含む。

21は磁器碗である。口縁部から体部の遺存で、筒状になると思われる。復元口径7.1cm、色調は白色で、淡乳白色釉の地に暗青色釉で文様が施される。胎土は非常に緻密である。

22は陶器灯明皿である。口縁部を欠く。底径4.8cm、器高1.7cm、色調は灰色で、茶褐色釉が施される。胎土は細砂粒を少々含む。体部及び底部に回転ヘラケズリが施される。

23は土師質土器の小皿である。復元口径8.0cm、復元底径4.3cm、器高1.2cm、色調は明褐色、胎土は細砂粒を少々含む。底部に回転糸切り痕が残る。

24は須恵器壺の胴部破片である。色調は灰褐色、胎土は砂粒を多く含む。叩き目が施される。

25は石製の茶臼と思われる。復元口径41.7cm、色調は暗灰色、石材は火山岩質である。内面が磨耗している。

26は平瓦片である。色調は灰褐色、胎土は砂粒を多く含む。表面に網目の叩き目、裏面に布目が施される。

27～36は砥石である。27～29は「凹」字形、30～36は「凸」字形である。石材は29が砂岩質、ほかは凝灰岩質である。27・30・31・32・33・35には砥石切り出し時のスジ状の成形痕が觀察される。

27は、長さ6.6cm、幅4.6cm～5.5cm、厚さ2.5cm、重さ129.6g、色調は暗灰色で内部は灰白色である。

28は、長さ5.4cm、幅4.1cm、厚さ3.0cm～3.8cm、重さ148.2g、色調は白色である。

29は、長さ4.6cm、幅3.7cm、厚さ2.1cm、重さ66.0g、色調は灰褐色である。ほぼ平らに使用されている。

30は、長さ14.3cm、幅3.5cm、厚さ0.7cm～3.0cm、重さ171.2g、色調は暗灰色で内部は淡褐色である。

31は、長さ13.3cm、幅2.8cm～3.1cm、厚さ0.2cm～2.3cm、重さ97.6g、色調は青灰白色である。

32は、長さ11.5cm、幅2.7cm～3.0cm、厚さ0.7cm～2.3cm、重さ97.0g、色調は青灰白色である。

33は、長さ13.3cm、幅3.0cm～3.5cm、厚さ1.5cm～2.7cm、重さ168.9g、色調は緑灰白色である。

34は、長さ11.0cm、幅2.0cm～3.0cm、厚さ0.4cm～2.4cm、重さ90.6g、色調は灰白色である。

35は、長さ10.8cm、幅2.4cm～3.2cm、厚さ1.2cm～2.9cm、重さ131.1g、色調は暗灰白色で内部は灰白色である。

36は、両側端部を欠く。長さ9.6cm、幅3.4cm、厚さ0.7cm～2.1cm、重さ104.1g、色調は黒灰色で内部は灰白色及び明褐色である。二次的焼成のためもろくなり、表面が剥離する。

37は土製人形の頭部破片である。色調は淡明褐色、胎土は砂粒をほとんど含まない。前後二

分割で、型押し成形されている。

6 グリッド等出土遺物（第41～43図 図版34・35）

グリッド及び表面採取等の遺物としては、陶器、砥石などの中・近世の遺物のはかに、縄文時代の土器、石器が検出されている。

1～9は陶器である。

1は鏡利で、頸部から胸部の遺存である。色調は淡灰褐色で黄緑灰色釉が施される。胎土は砂粒をほとんど含まない。胸部下半部に回転ヘラケズリが施される。

2は高台付皿である。体部から底部の遺存で、底部中央を欠く。復元底径13.4cm、色調は茶褐色で、型押文様及び沈線内に乳白色釉、地の部分には黒褐色釉が施される。胎土は砂粒をほとんど含まない。体部及び底部に回転ヘラケズリが施される。内面に重ね焼き痕が観察される。

3・4は鉢である。

3は口縁部から体部の遺存で、半球形の体部から口縁部が広がり、口縁部端が折り曲げられている。復元口径21.8cm、色調は灰色で茶褐色釉が施される。胎土は細砂粒を少々含む。体部下端部に回転ヘラケズリが施される。

4は体部下端部から底部の遺存で、高台が小さく削り出されている。底部中央を欠く。復元底径13.8cm、色調は灰緑色で灰緑色釉が施される。胎土は砂粒をほとんど含まない。

5は胸器香炉と思われる。短い筒型の体部に高台が付く。底部中央を欠く。口径7.4cm、底径4.8cm、器高3.7cm、色調は淡灰褐色で黄褐色釉が施される。胎土は細砂粒を少々含む。底部に回転ヘラケズリが施される。

6は天目茶碗である。体部から底部の遺存で、底径4.5cm、色調は淡灰褐色で茶褐色釉が施され、一部に黒色釉が施される。胎土は砂粒をほとんど含まない。体部下端部及び底部に回転ヘラケズリが施される。

7は仏器と思われる。全体は高杯形で、やや扁平な半球形の杯部である。口径8.0cm、色調は淡灰褐色で灰緑色釉が施される。胎土は砂粒をほとんど含まない。回転ヘラケズリが施される。

8は灯明皿である。口径7.6cm、底径3.7cm、器高1.5cm、色調は灰色で茶褐色釉が施される。胎土は砂粒をほとんど含まない。体部及び底部に回転ヘラケズリが施される。

9は土瓶蓋である。径9.6cm、器高2.3cm、色調は淡灰褐色で灰色釉の地に乳白色釉を弧状に施し、その中に緑色釉で文様が施される。胎土は砂粒をほとんど含まない。

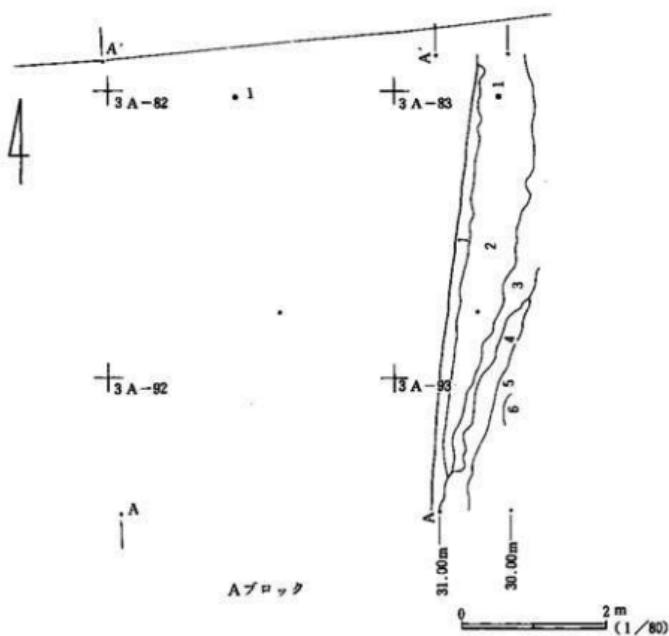
10～14は砥石である。10・13は「凸」字形、12は「凹」字形、11・14は不明である。石材は、11・14が安山岩質、12・13が凝灰岩質である。

10は、長さ14.3cm、幅1.0cm～3.2cm、厚さ0.5cm～3.2cm、重さ148.3g、色調は青灰白色である。砥石切出し時のスジ状の成形痕が観察される。

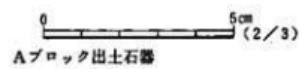
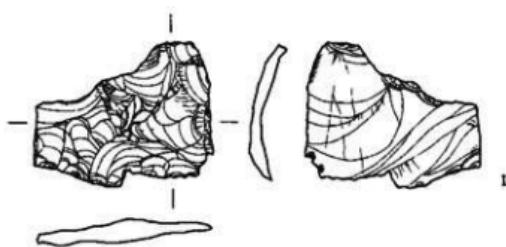
- 11は、長さ5.9cm、幅5.1cm、厚さ0.8cm～2.2cm、重さ91.1g、色調は青灰色である。
- 12は、長さ5.3cm、幅3.0cm、厚さ1.9cm、重さ38.7g、色調は青灰白色である。
- 13は、長さ4.6cm、幅3.5cm、厚さ1.2cm～1.4cm、重さ32.0g、色調は茶褐色である。
- 14は、長さ5.6cm、幅8.2cm、厚さ5.0cm、重さ344.9g、色調は暗灰色である。二次的焼成のため赤色化している。
- 15は平瓦片で、磁石の代用品として使用されている。長さ19.9cm、幅7.9cm～8.8cm、厚さ5.2cm、色調は暗灰色、胎土は細砂粒を多く含む。刻み状の使用痕が観察される。
- 16は縄文土器の深鉢である。口縁部から胴部の破片で、色調は灰褐色、胎土は砂粒を多く含む。貼付文、沈線文が施される。文様から、諸磧c式と考えられる。
- 17～24は縄文時代の石器と考えられる。
- 17・18は石鏨である。三角形で、基部に抉りがはいる。
- 17は、長さ2.2cm、幅1.9cm、最大厚0.3cm、重さ0.8g、色調は灰黒色、石材はチャート質である。
- 18は、先端部を欠く。長さ1.7cm、幅1.6cm、最大厚0.5cm、重さ1.7g、色調は黒色、石材は黒曜石である。
- 19は、石斧の破片である。長さ3.2cm、幅5.5cm、最大厚2.2cm、重さ52.3g、色調は暗灰色、石材は砂岩質である。石斧の刃部で敲打痕が観察される。
- 20は、長さ3.7cm、幅2.8cm、厚さ0.4cm～1.3cm、重さ17.9g、色調は暗灰色、石材は安山岩質である。原石面が残り、石斧の破片と思われる。
- 21・22は敲石の破片である。
- 21は、長さ5.6cm、幅3.5cm、厚さ2.4cm、重さ46.6g、色調は暗褐色、石材は砂岩質である。
- 22は、長さ4.2cm、幅5.9cm、最大厚3.1cm、重さ52.3g、色調は灰白色、石材は安山岩質である。
- 23・24は磨石である。全体が磨耗している。
- 23は、長さ8.5cm、幅7.3cm、厚さ3.0cm、重さ227.8g、色調は灰色、石材は砂岩質である。
- 24は、長さ9.5cm、幅7.3cm、厚さ2.5cm、重さ258.8g、色調は暗青灰色、石材は砂岩質である。
- 古銭（図版35）
- 遺存状態が悪く銭名は不明確であるが、1・2・4は寛永通宝、3は大觀通宝と思われる。
- 鉄滓（図版35）
- 調査区内からは少量ではあるが鉄滓が出土している。関連した遺構は検出されなかったが、周辺に鍛冶跡等の遺構が存在する可能性がある。



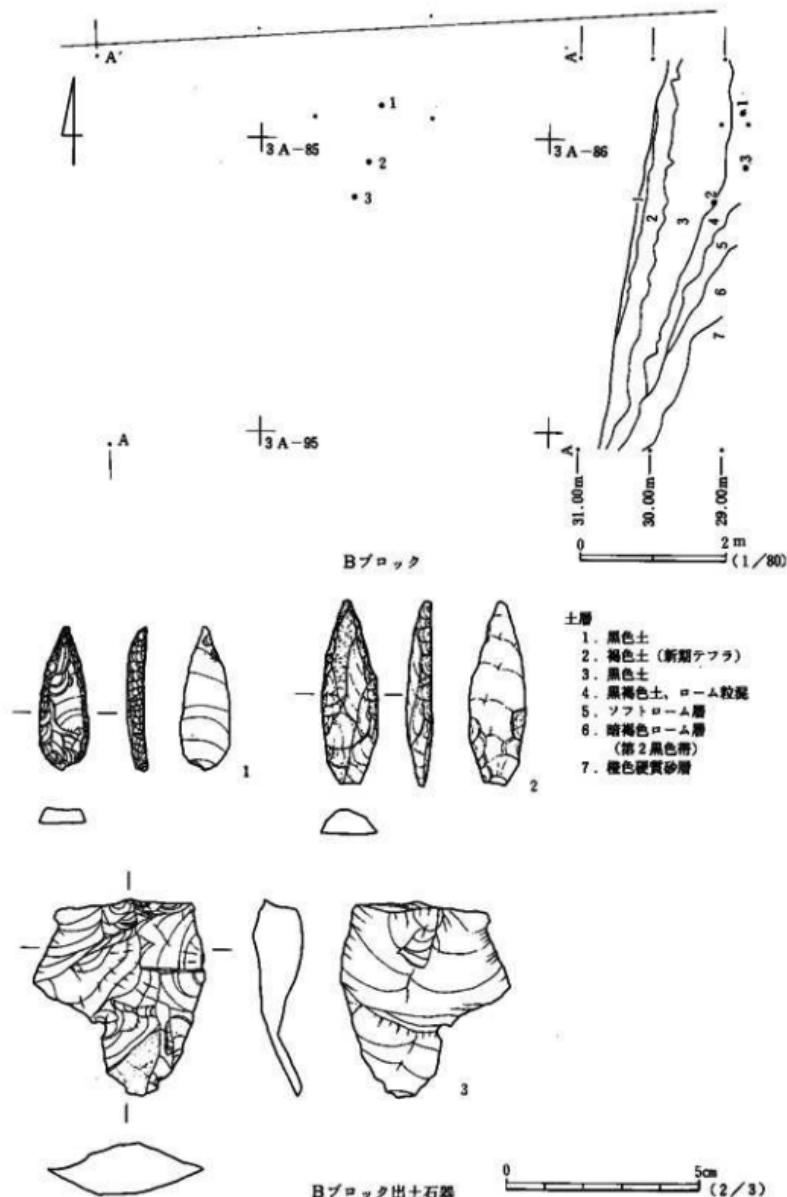
第27図 大蛇麻賀多協遺跡遺構・グリッド配置図 (1/1,000)



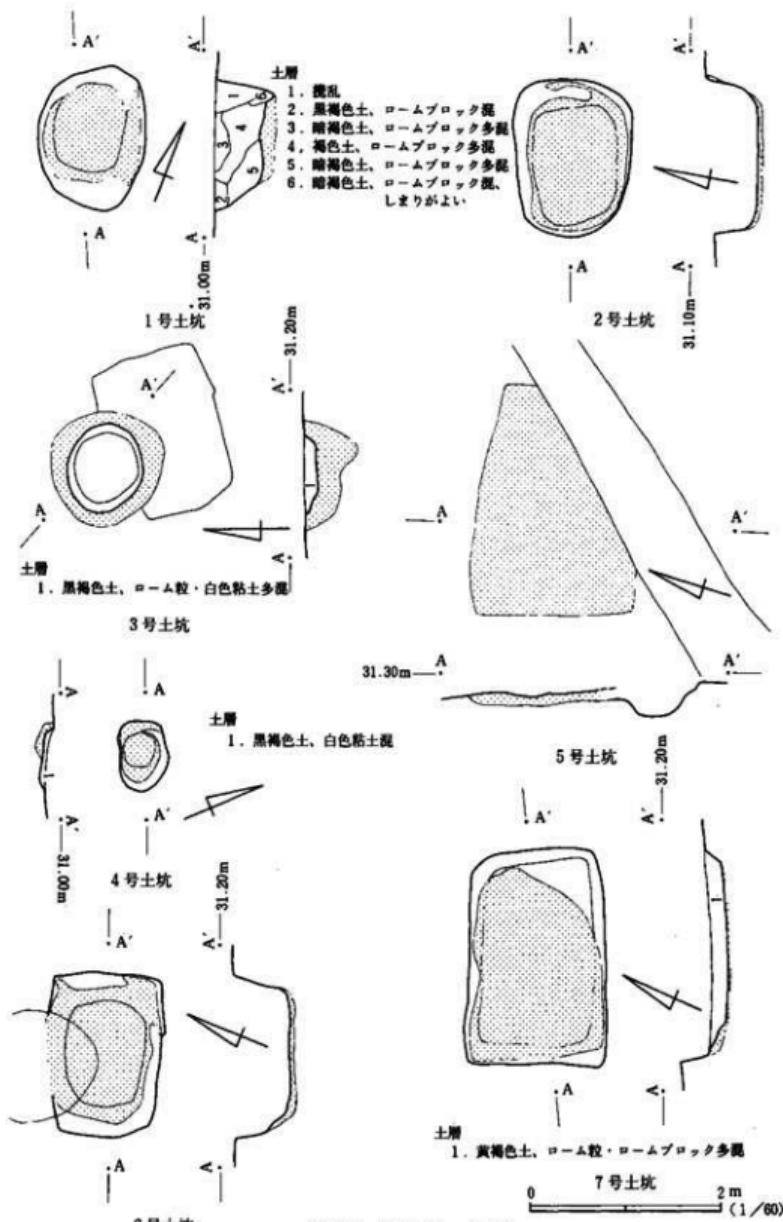
1. 褐色土、新期テフラ
2. 黒色土
3. 黒褐色土
4. ソフトローム層
5. 暗褐色ローム層
(第2黑色帶)
6. 橙色硬質砂層



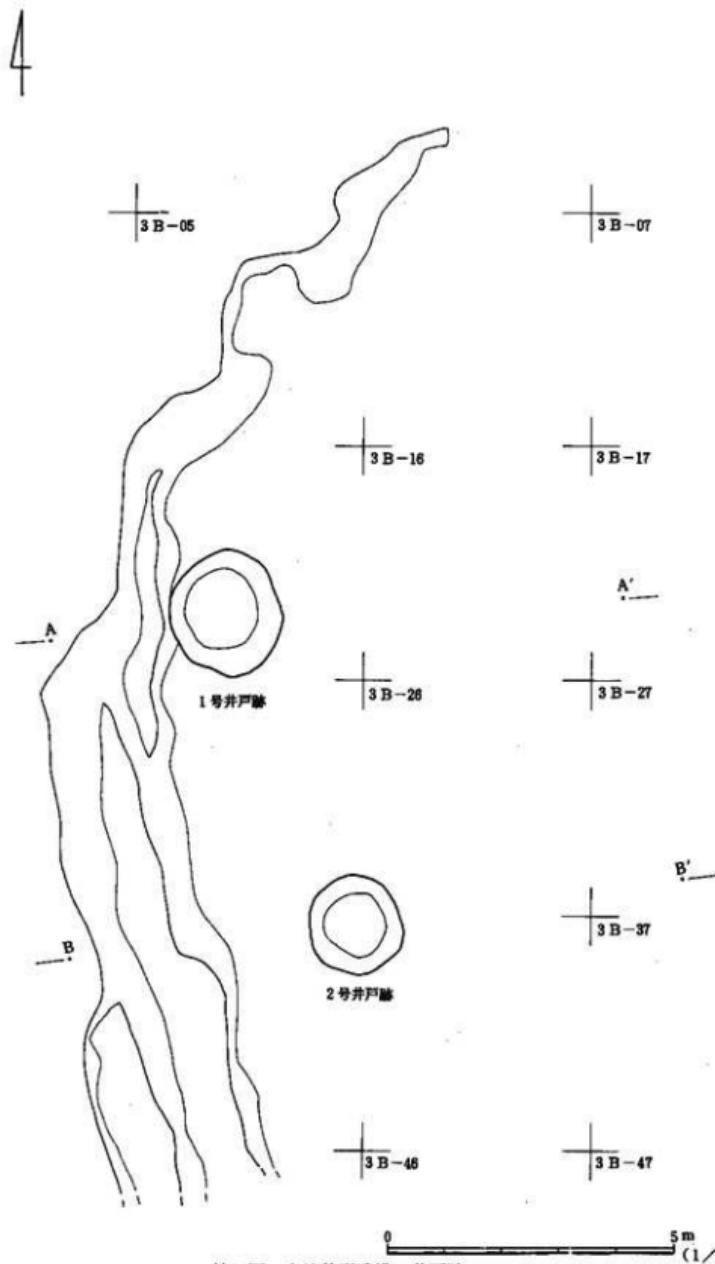
第28図 Aブロック・Aブロック出土石器



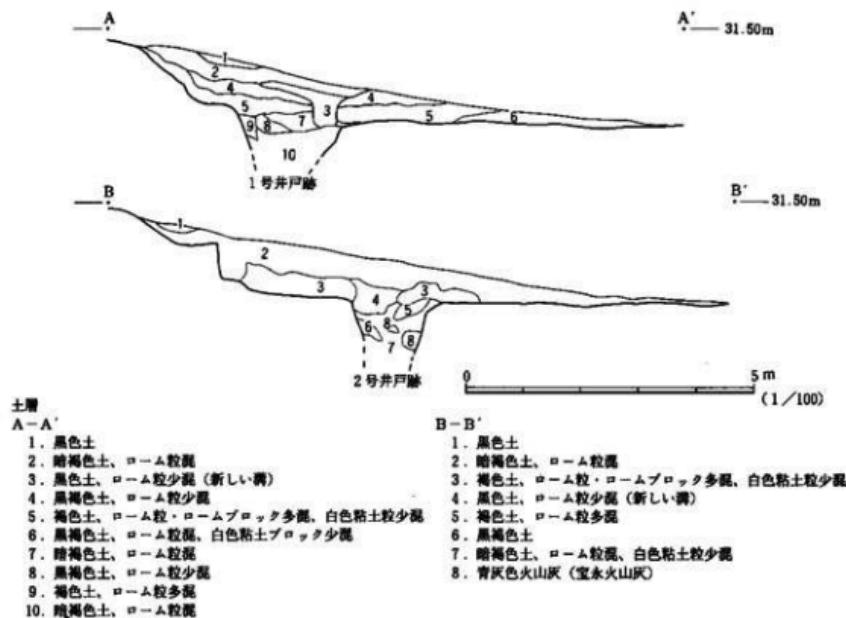
第29図 Bブロック・Bブロック出土石器



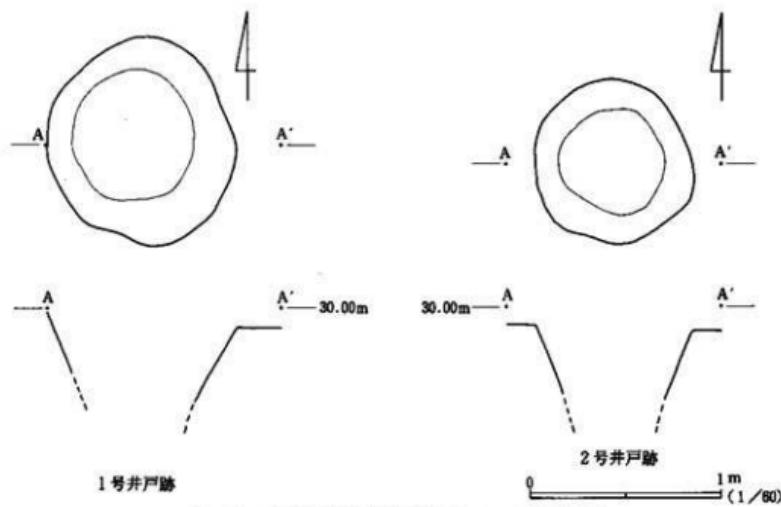
第30図 土坑(1~7号)



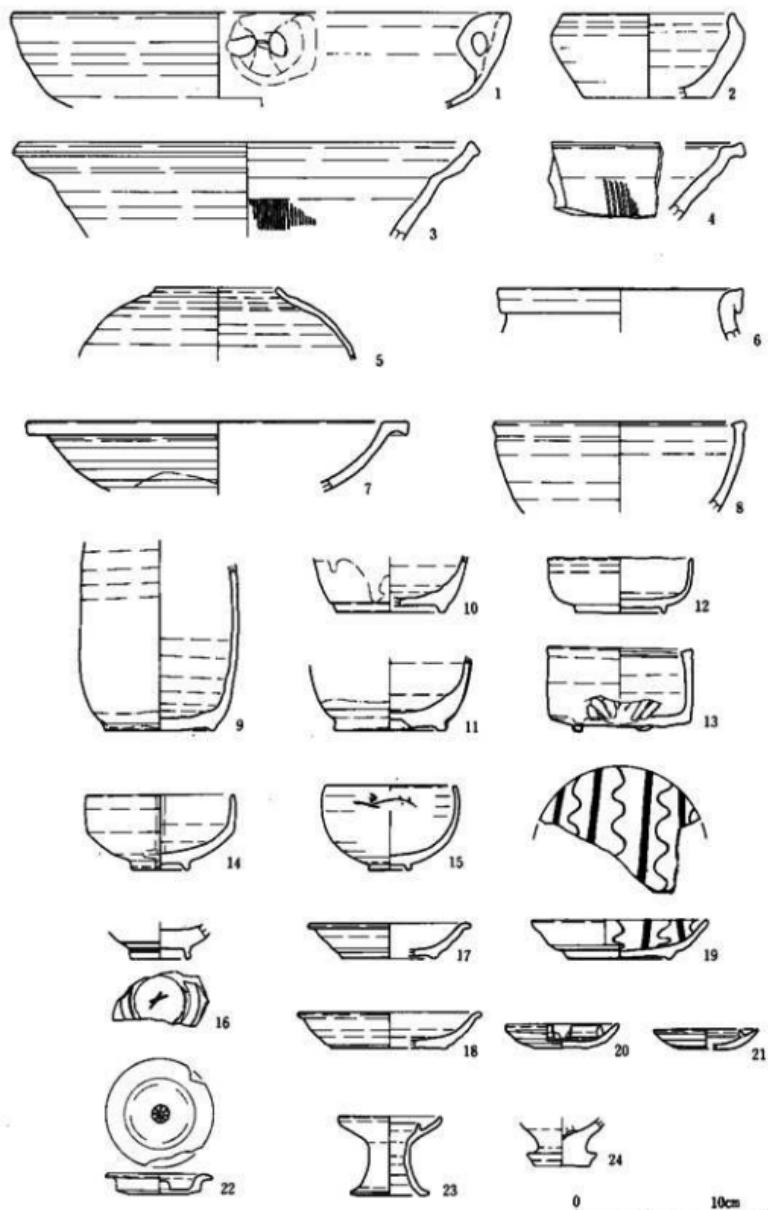
第31図 台地整形遺構・井戸跡



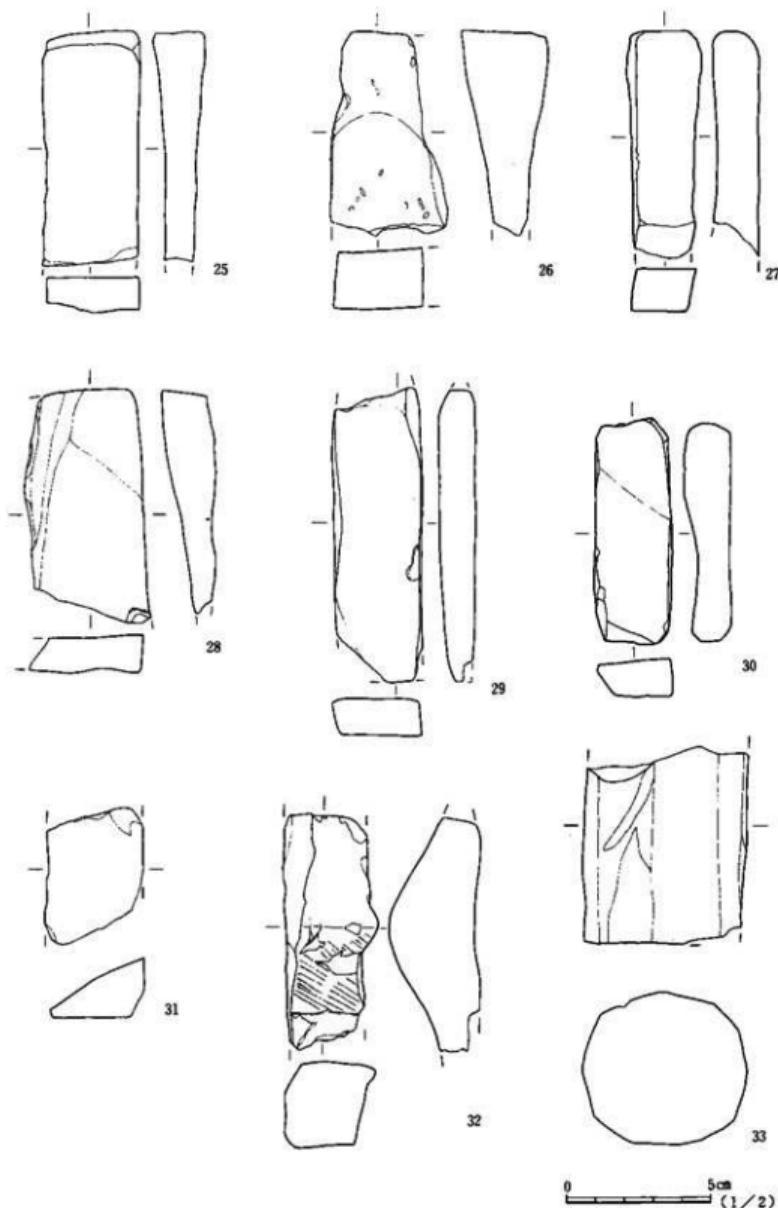
台地整形造構土層断面図



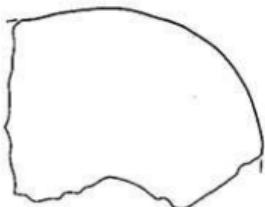
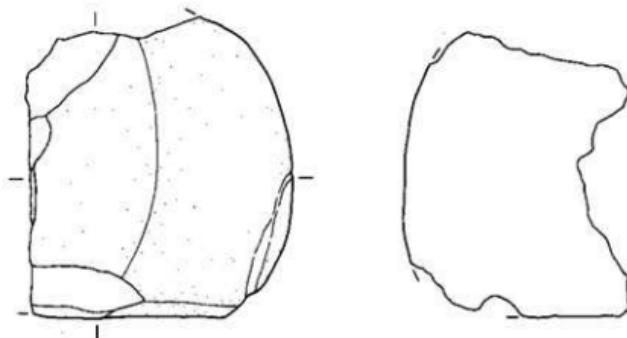
第32図 台地整形造構土層断面図、1・2号井戸跡



第33図 台地整形遺構出土遺物(1)



第34図 台地整形遺構出土遺物(2)

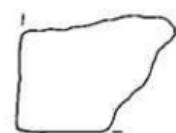
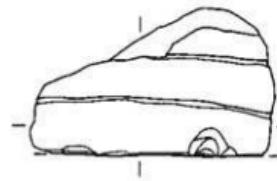


0 5cm (1/2)

台地整形遺構出土遺物(3)



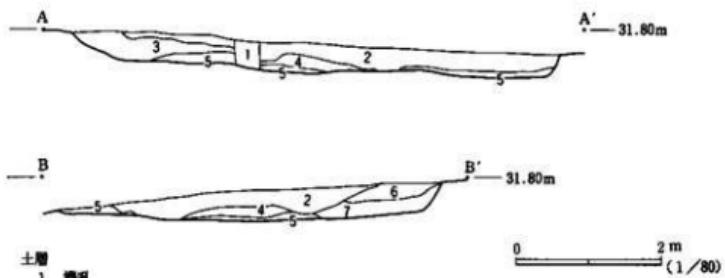
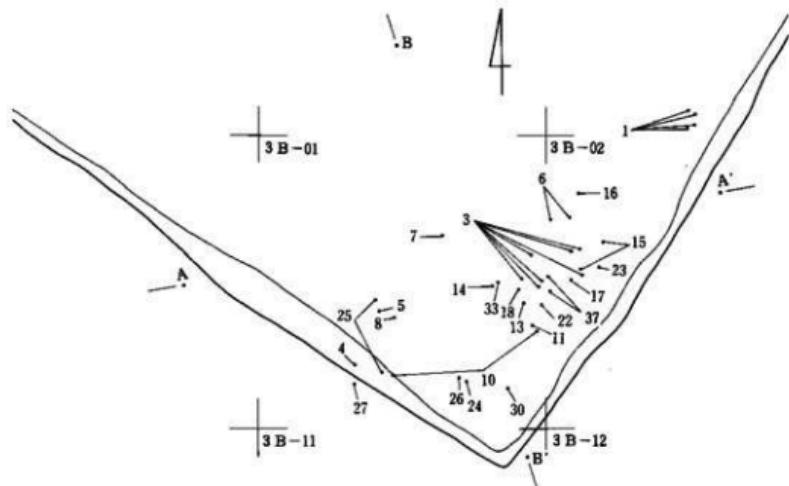
0 10cm (1/4)



0 5cm (1/2)

井戸跡出土遺物

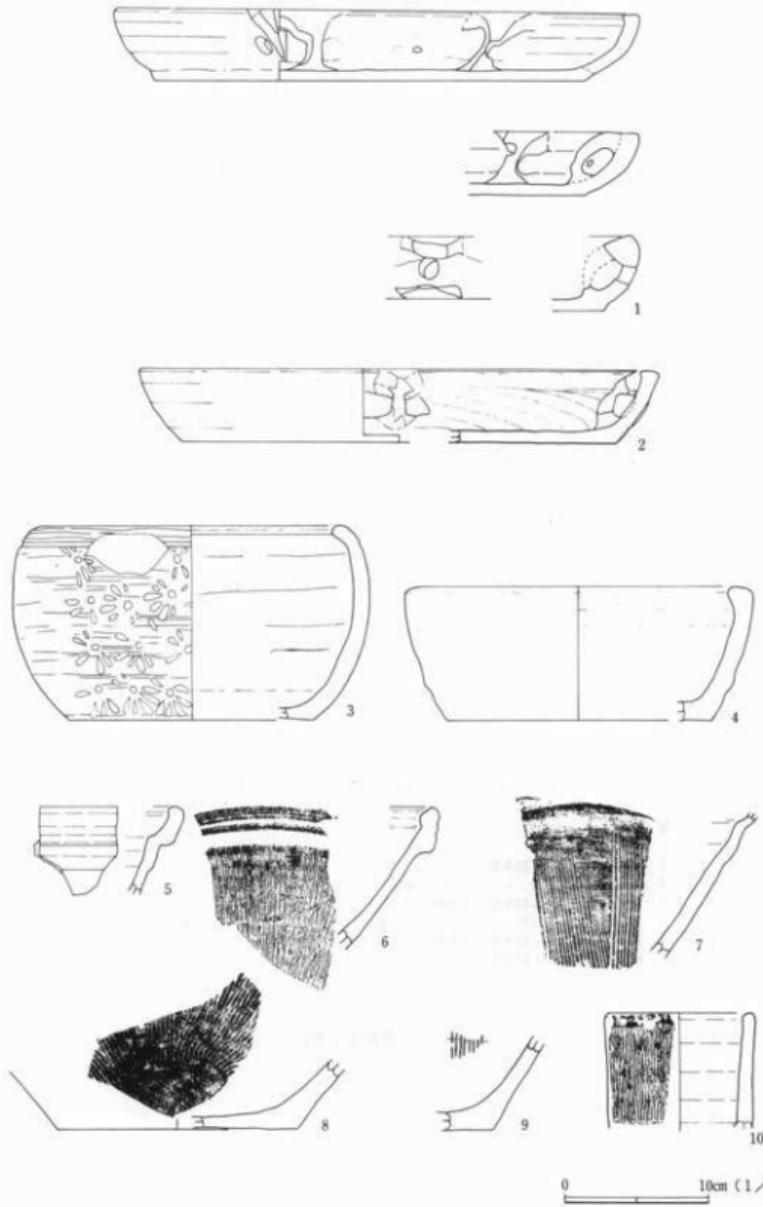
第35図 台地整形遺構出土遺物(3)、井戸跡出土遺物



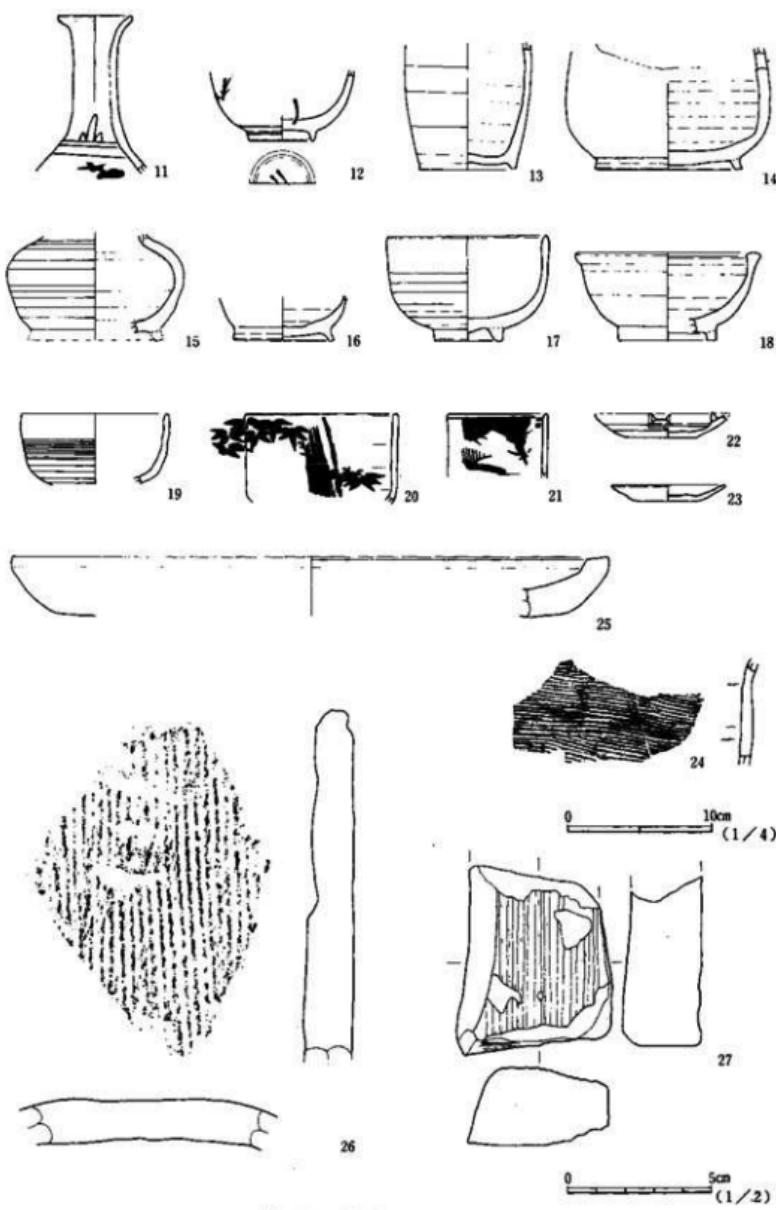
土層

1. 濁乱
2. 暗褐色土、ローム粒・ロームブロック多混
3. 黒色土、ローム粒・ロームブロック多混
4. 黑褐色土、ローム粒・木炭粒少混
5. 黄褐色土、ローム粒・ロームブロック多混
6. 黑褐色土、ローム粒多混、白色粘土ブロック混
7. 暗褐色土、ローム粒多混

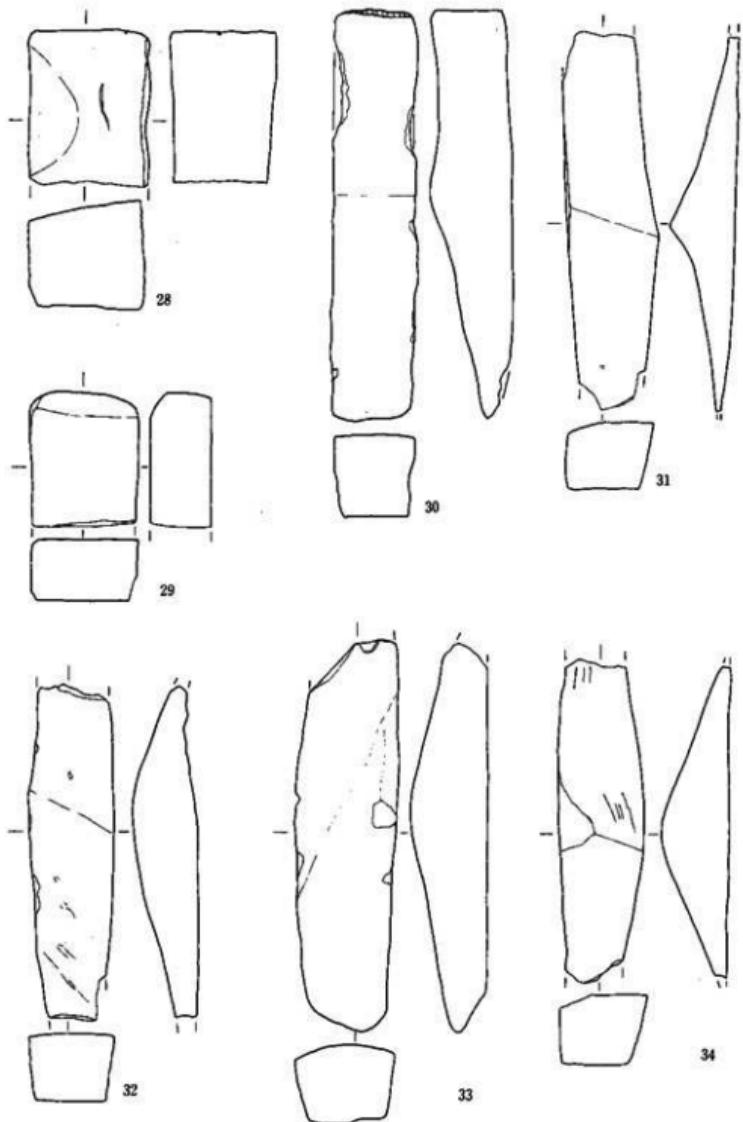
第36図 遺物集中地区



第37図 遺物集中地区出土遺物(1)

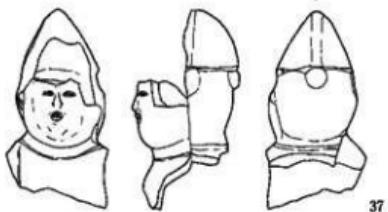
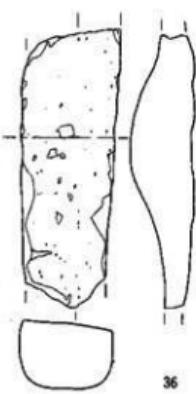
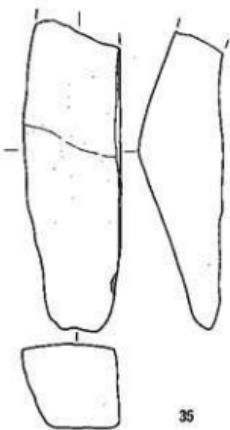


第38図 遺物集中地区出土遺物(2)



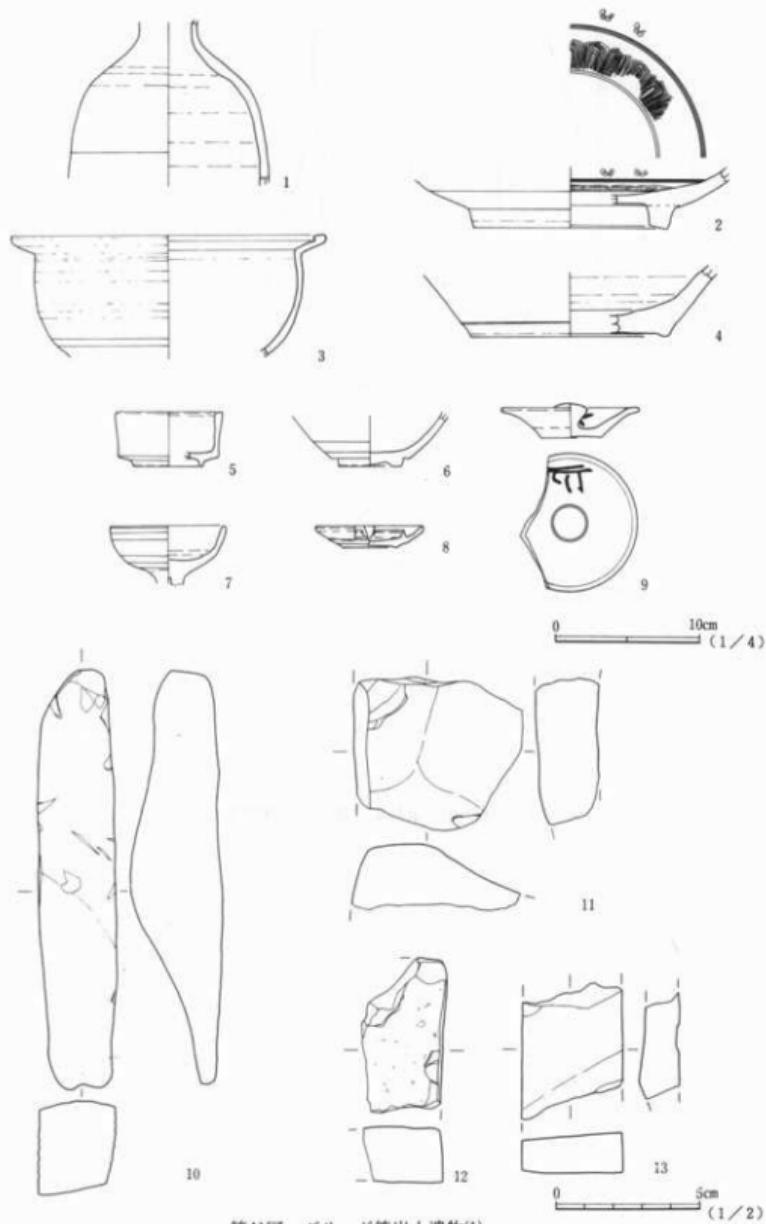
0 5cm
(1/2)

第39図 遺物集中地区出土遺物(3)

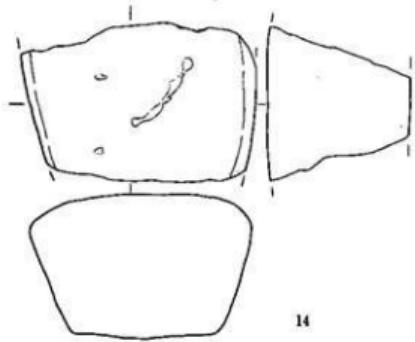


0 5cm
(1/2)

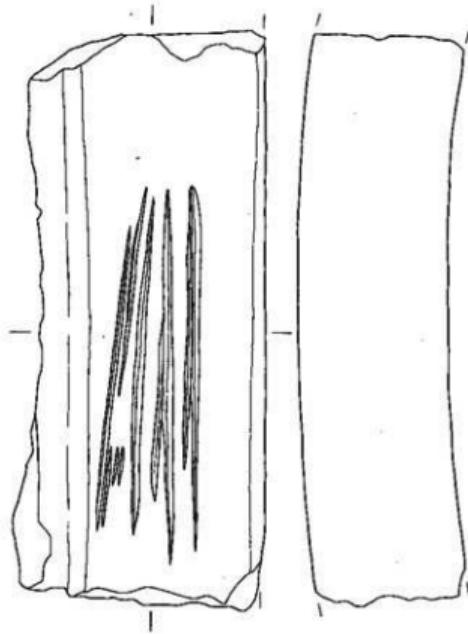
第40図 遺物集中地区出土遺物(4)



第41図 グリッド等出土遺物(1)



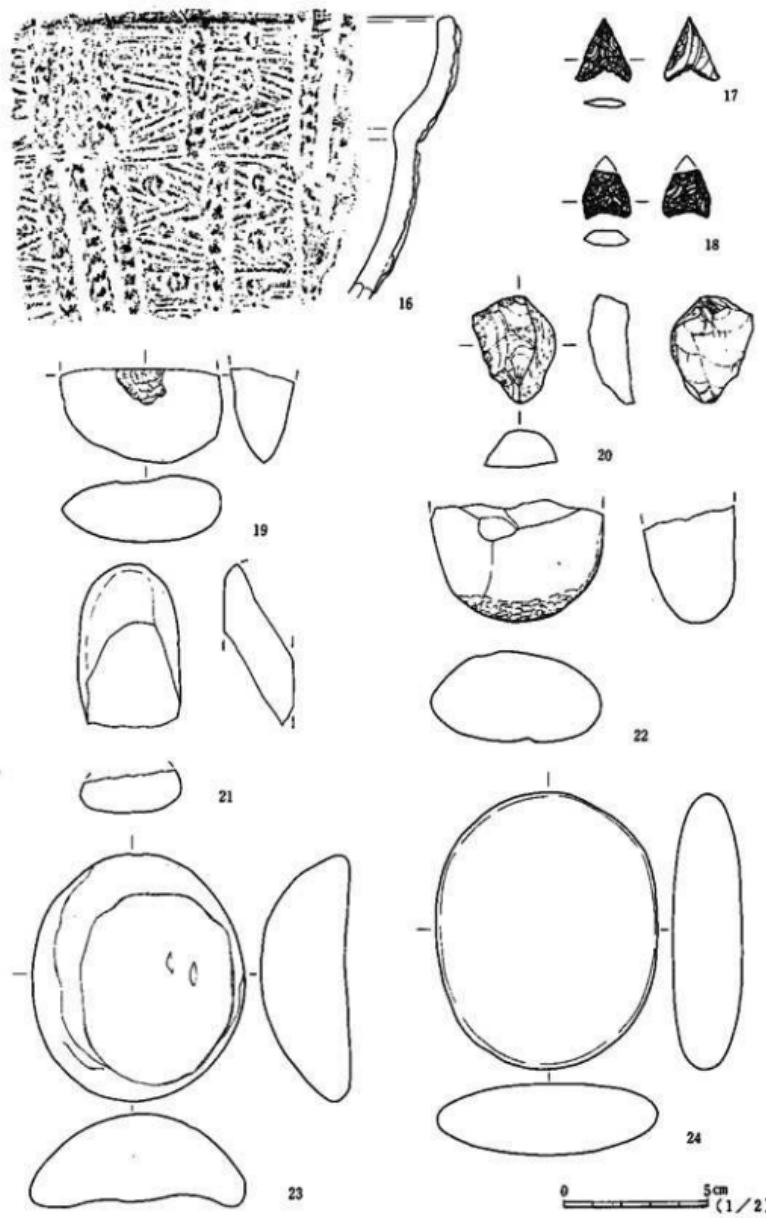
14



15

0 5cm
(1/2)

第42図 グリッド等出土遺物(2)



第43図 グリッド等出土遺物(3)

IV まとめ

以上が、高岡砦跡、大蛇麻賀多脇遺跡の調査成果である。ここでは、時代をとって、遺構、遺物について述べ、まとめとしたい。

両遺跡の中で最も古い時代の遺構・遺物は旧石器時代のものである。大蛇麻賀多脇遺跡からⅢ層を中心とした小ブロックが検出され、高岡砦跡からは、旧石器時代と思われる剣片が採取されているが、石器ブロックは検出されなかった。

縄文時代は明確な遺構は検出されなかったが、両遺跡から早期末から中期にかけての土器、石器（石鏃、磨石）が少量出土している。

弥生時代については、遺構、遺物は検出されなかった。

古墳時代については、高岡砦跡から後期の堅穴住居跡が検出された。この時期から、高岡砦跡では、明瞭な集落が形成され始めたと考えられるが、小規模な集落と思われる。

奈良・平安時代については、高岡砦跡から堅穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝が検出された。集落の規模は拡大している。これは、谷を挟んだ東側の台地上に大規模な集落（高岡大山遺跡など）¹⁾が形成される時期とはほぼ同じである。

中世については、高岡砦跡から砦に伴う土塁、腰郭が検出され、大蛇麻賀多脇遺跡からは墓と思われる、粘土貼りの土坑が検出された。

また、大蛇麻賀多脇遺跡からは、井戸を伴う台地整形遺構及び台地整形遺構の一部と思われる遺物集中区が検出され、多くの陶磁器が出土した。これらの陶磁器は、江戸時代中ごろまでのものと思われる。種類は、内耳土鍋、火鉢、壺鉢、徳利、碗、灯明具などの日常生活用の雑器である。調査区内からは住居遺構は検出されなかったが、周辺に存在する可能性は高いと思われる。なお、検出遺構は共同施設の可能性も考えられる。

高岡砦跡では近世以降は明瞭な遺構は検出されないが、大蛇麻賀多脇遺跡では近世初めごろ、調査区周辺に集落が形成されたと考えられ、その集落は現在まで継続している²⁾。

注1 「財団法人印旛都市文化財センター年報 2 一昭和60年度ー」(財)印旛都市文化財センター

1988

「財団法人印旛都市文化財センター年報 3 一昭和61年度ー」(財)印旛都市文化財センター

1987

2 第1・2図に建物の記号が見られる。

写 真 図 版



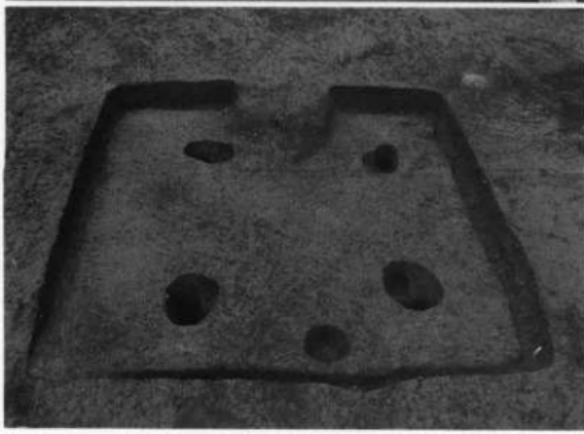
航空写真（平成6年撮影）



全景（西より）



全景（腰郭、東より）



1号住居跡全景



1号住居跡カマド



2号住居跡全景



3号住居跡全景



3号住居跡カマド



3号住居跡カマド掘方



4号住居跡全景



4号住居跡カマド



5・6号住居跡全景



5号住居跡カマド遺物



5号住居跡カマド



7号住居跡全景



7号住居跡カマド



8号住居跡全景



9号住居跡全景



10号住居跡全景



10号住居跡全景



11号住居跡全景



11号住居跡カマド



12号住居跡全景



13号住居跡全景



13号住居跡カマド



13号住居跡カマド遺物



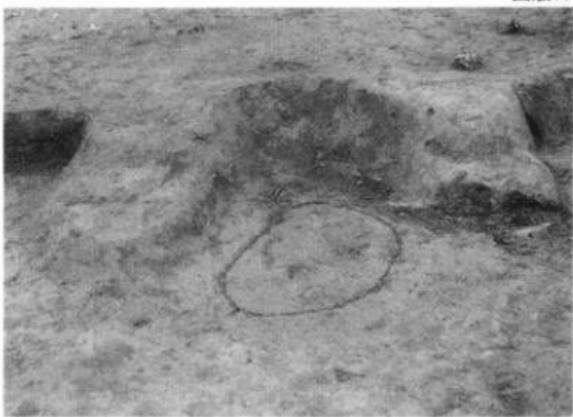
13号住居跡旧カマド



13号住居跡旧カマド



14号住居跡全景



14号住居跡カマド



15号住居跡全景



16号住居跡・3号土坑全景



1号掘立柱建物跡全景



2号掘立柱建物跡
1号溝全景



1・2号土坑



高岡跡
（昭和20年）



1号-1



1号-2



1号-3



1号-4



1号-5



1号-10



6



7



8



9



11



12

1号



1



2



3

3号

1・3号住居跡出土遺物



3号



4号-1



3号-4



3



4号



5号-1



5号-3

3・4・5号住居跡出土遺物



5号



5号-6



6号-1



7号-1



7号

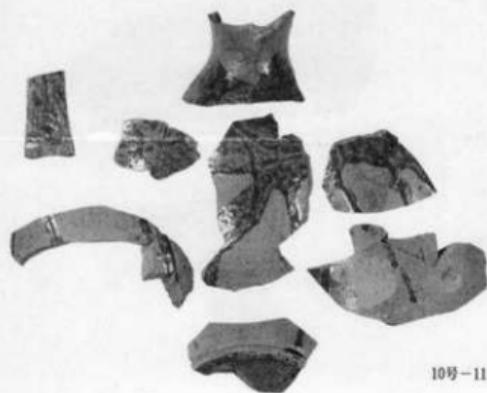


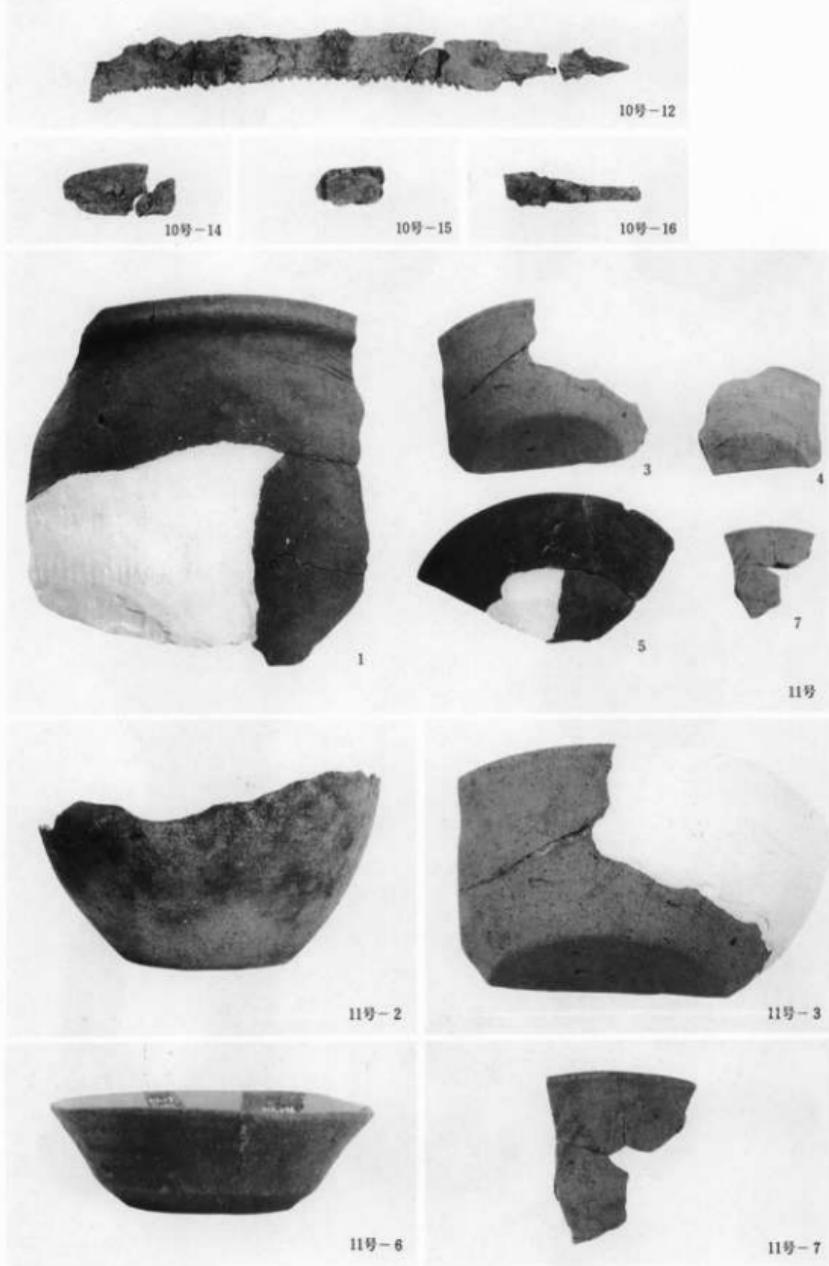
9号-1



8号-1

5・6・7・8・9号住居跡出土遺物





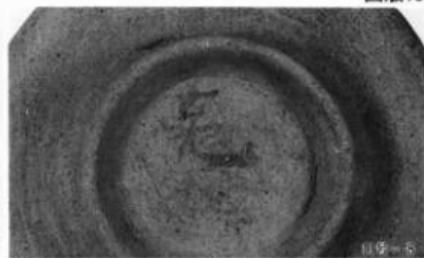
10・11号住居跡出土遺物



11号-8



11号-13



11号-5



9



10



11



12

11号



2

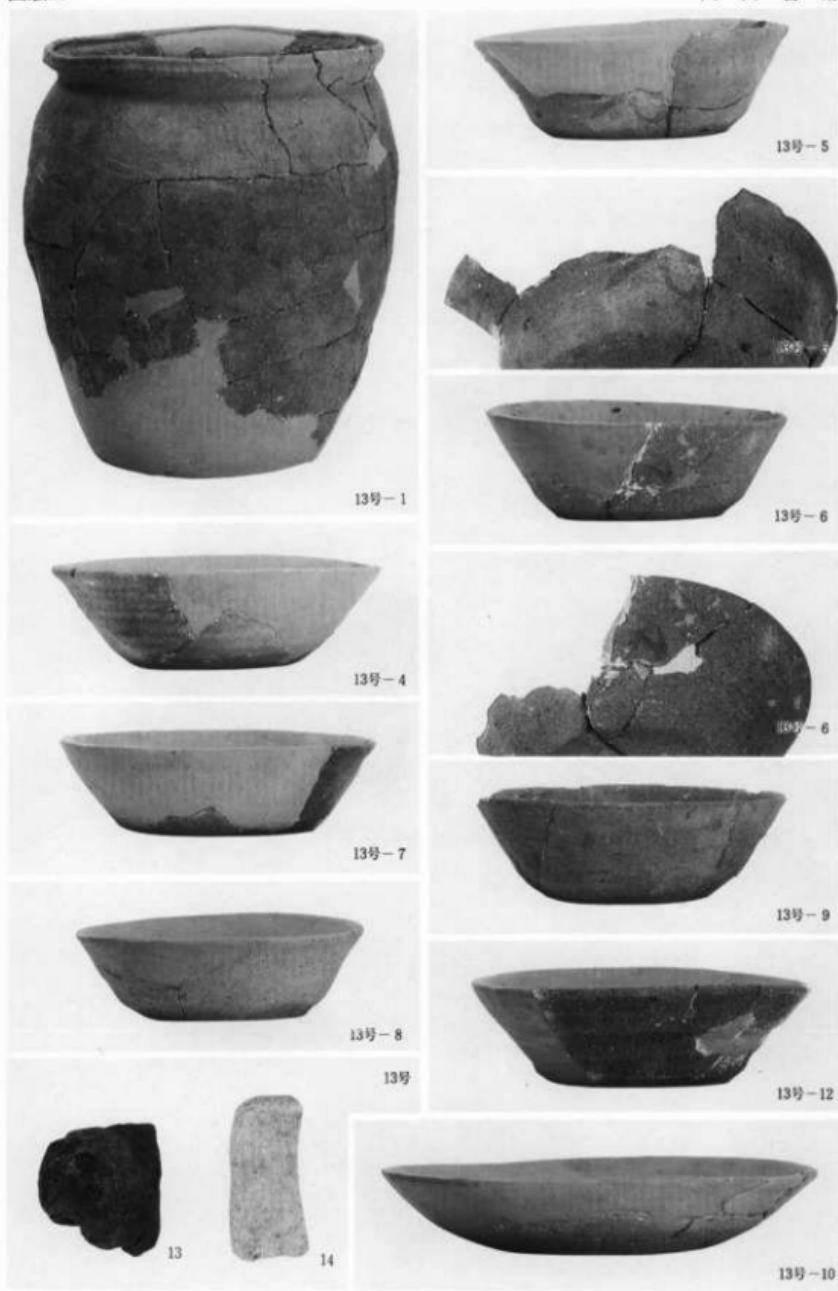


3

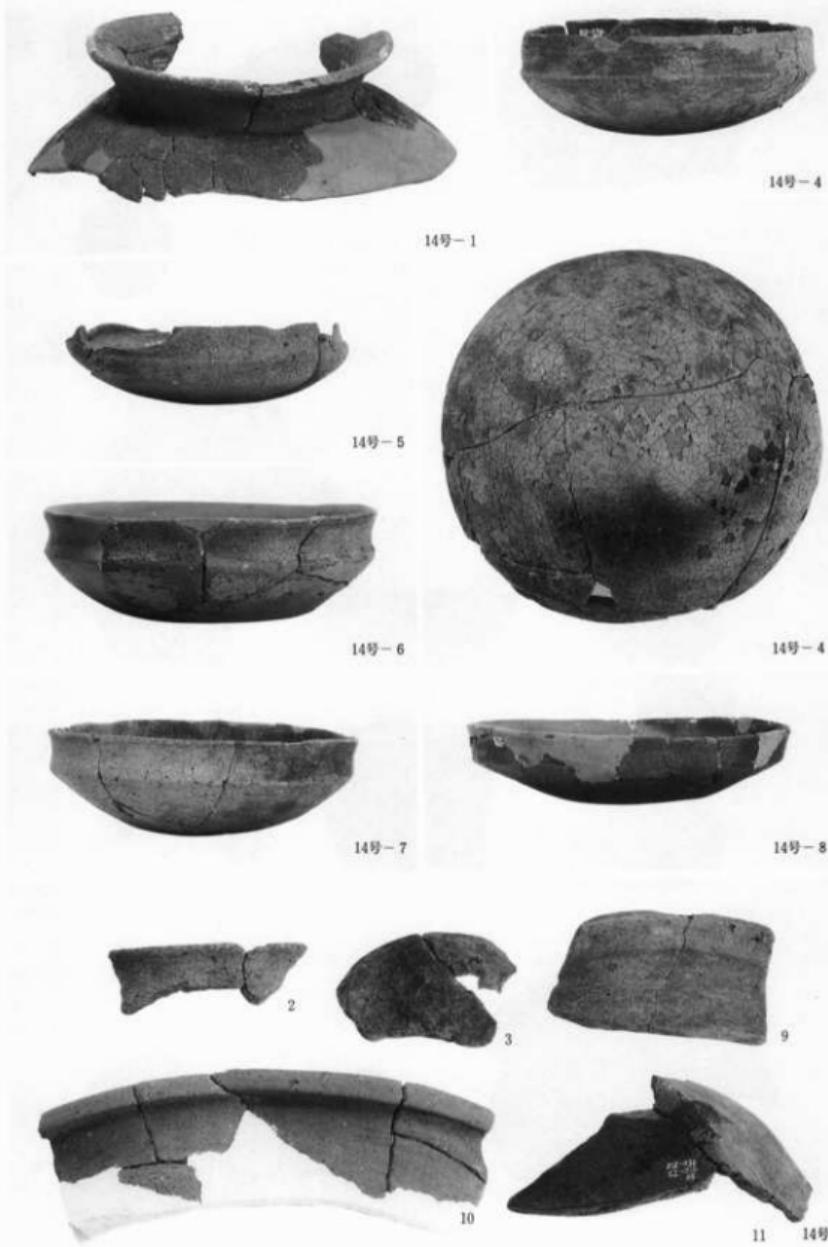


11

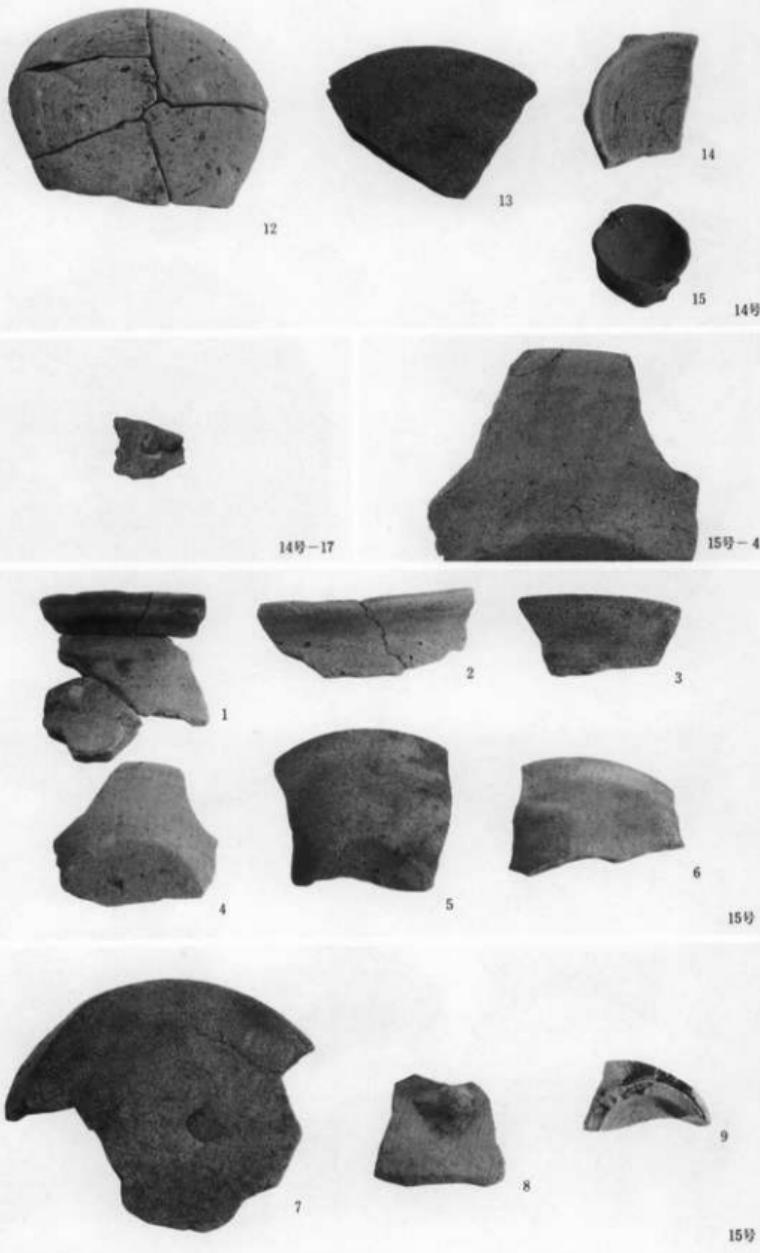
13号



13号住居跡出土遺物



14号住居跡出土遺物



14・15号住居跡出土遺物



グリッド等



グリッド等-2

グリッド等-4

グリッド等-5



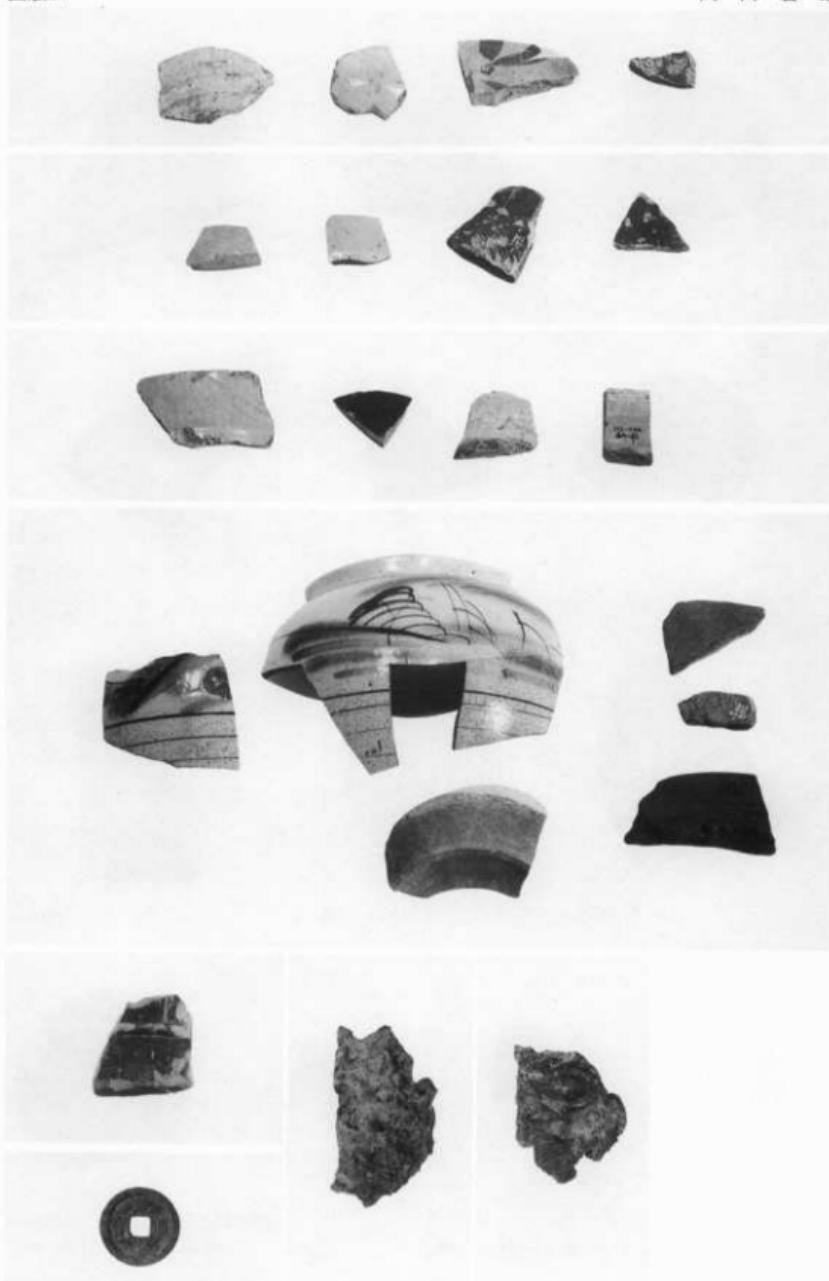
グリッド等(2)-6

グリッド等(2)-7

グリッド等(2)-8

グリッド等(2)-9

16号住居跡出土遺物、グリッド等出土遺物、石器



高岡砦跡出土遺物（陶器・古銭・鉄滓）



航空写真（平成 6 年撮影）



1



A ブロック



1



2

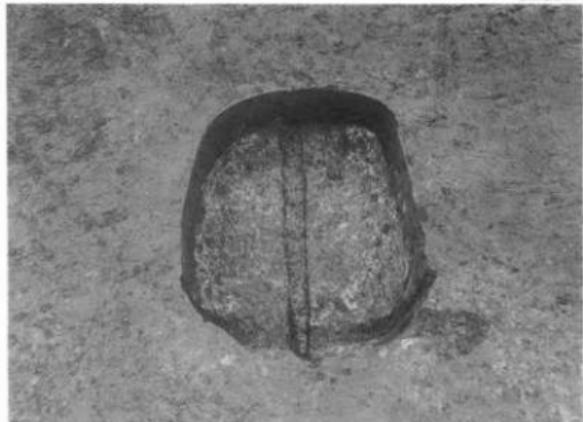


3

B ブロック



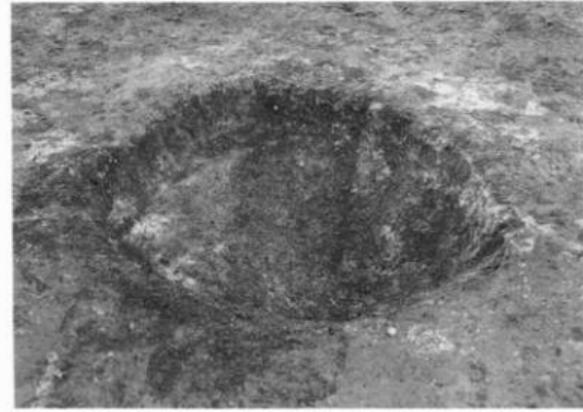
1号土坑



2号土坑



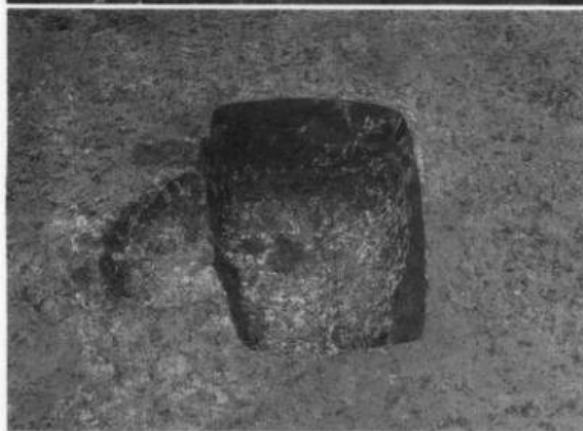
3号土坑



4号土坑



5号土坑



6号土坑



7号土坑



台地整形遺構
遺物出土狀況



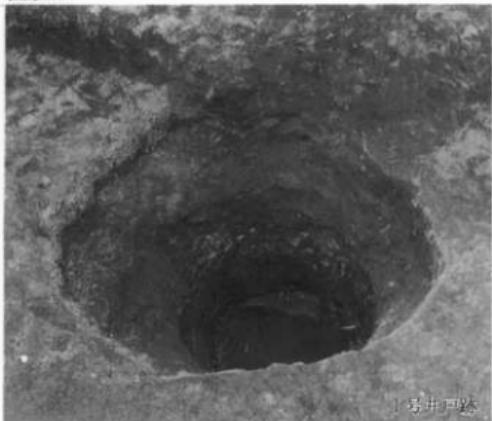
台地整形遺構
土層斷面



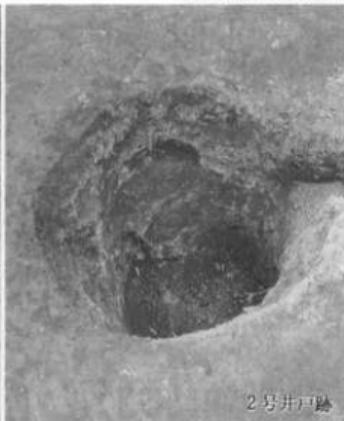
台地整形遺構
1・2号井戸跡

図版30

大蛇麻賀多脇遺跡



1号井戸跡



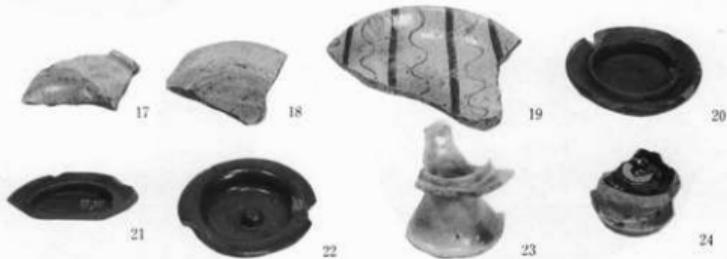
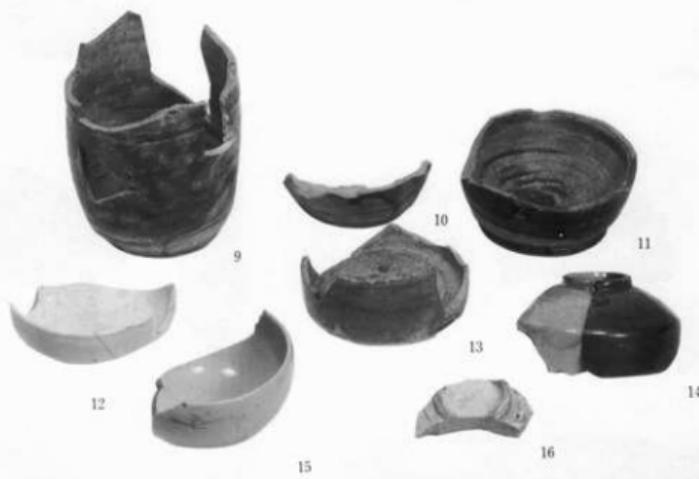
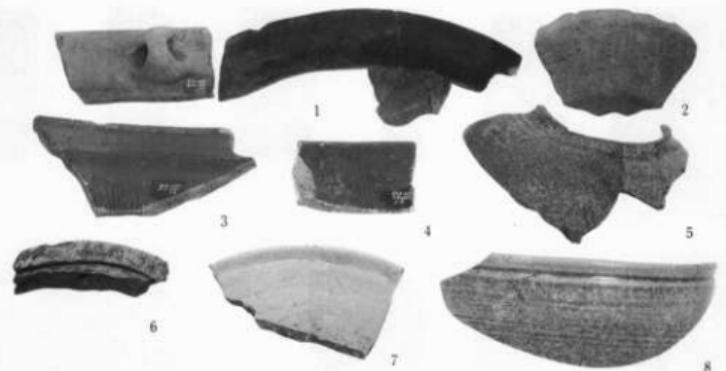
2号井戸跡



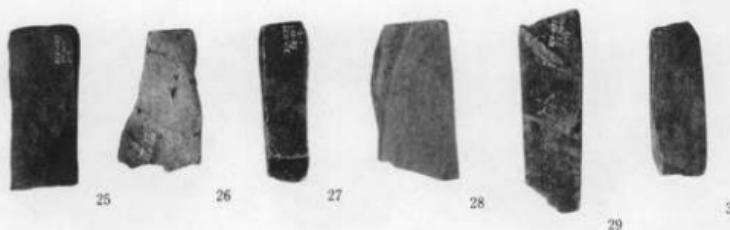
遺物集中地区
遺物出土状況



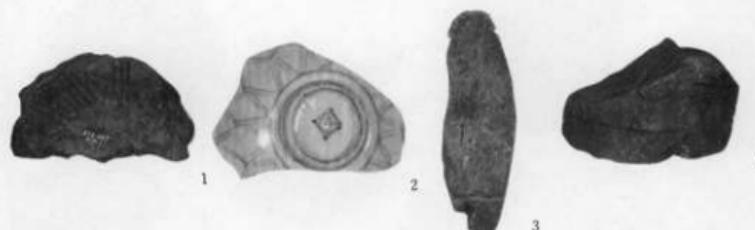
遺物集中地区
遺物取上後



台地整形遺構出土遺物(1)



台地整形

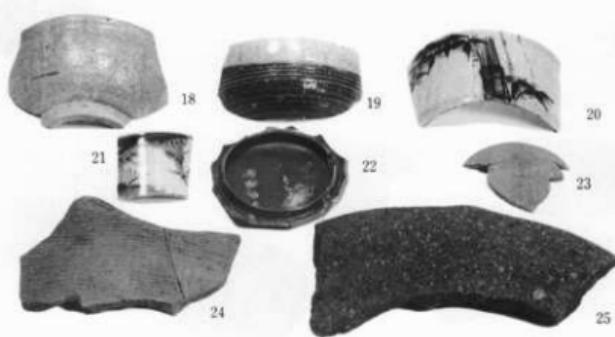


井戸跡

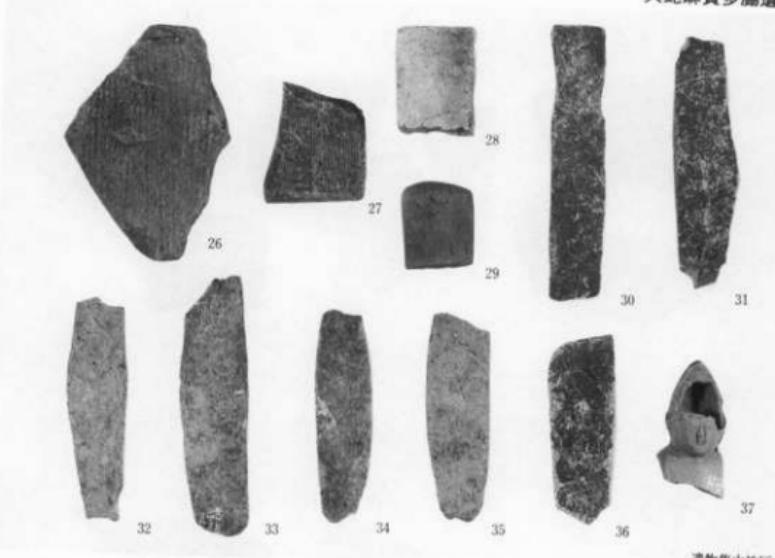


遺物集中

台地整形遺構出土遺物(2)、井戸跡出土遺物、遺物集中地区出土遺物(1)



遺物集中地区出土遺物(2)

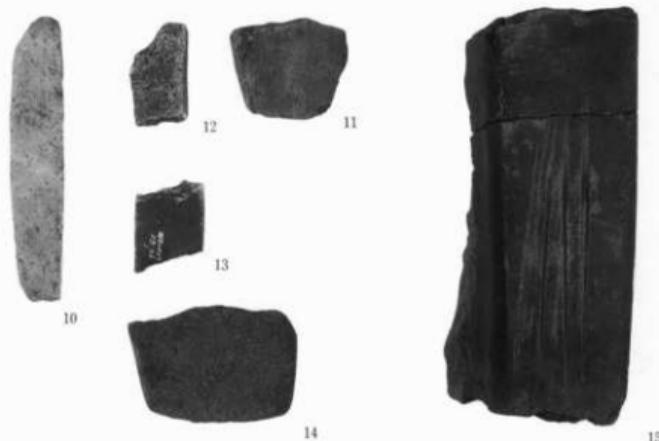


遺物集中地区

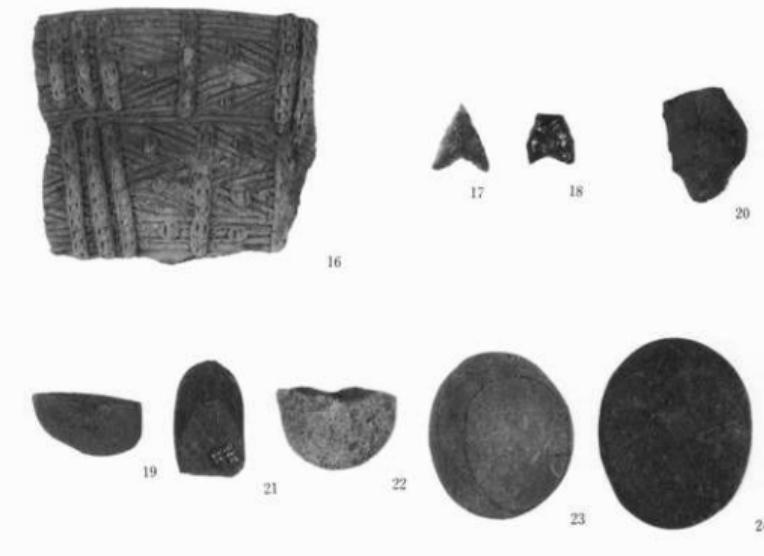


グリッド等

遺物集中地区出土遺物(3)、グリッド等出土遺物(1)



グリッド等



古銭-1



古銭-2



古銭-3



古銭-4



鉄滓

グリッド等出土遺物(2)、石器、古銭、鉄滓

報告書抄録

ふりがな	いっぽんこくどう298ごうこくどうどうろかいりょうじぎょうまいぞうぶんかざいちょうさはうこくしょ2						
書名	一般国道298号国道高岡・大蛇麻賀多延跡調査報告書2						
著者名	佐倉市高岡考古・大蛇麻賀多延跡						
巻次	2						
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告						
シリーズ番号	第279集						
著者名	吉取正彦						
編集機関	財団法人千葉県文化財センター						
所在地	〒284 千葉県四街道市麗波809-2						
発行年	西暦1996年3月29日						
所収遺跡名	ふりがな	コード	北緯	東緯	調査期間	調査面積 ha	調査原因
高岡寺	所 在 地	市町村 道路番号					
高岡寺	佐倉市高岡字大崎 337-1ほか	212 036	35度 42分 29秒	140度 14分 31秒	1993.7.1~ 1993.11.10	3.594	道路建設
大蛇麻賀 多延	佐倉市大蛇町 宇川賀少郎 403-1ほか	212 037	35度 42分 47秒	140度 15分 11秒	1993.11.1~ 1994.1.31	1.982	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
高岡寺	集落跡 墓跡	古墳時代後期	整穴住居跡 2軒	土器等	墓跡全体の空中写真撮影を実施		
		奈良・平安	整穴住居跡 14軒	上部器、灰窓器、鉢器			
			獨立住居跡 2棟	(鏡先、鏡、刀子)			
			土坑 3基				
			葬 1基				
			土塁 1基				
	腰郭 1か所						
大蛇麻賀多 延	墓地	旧石器	石器ブロッタ 2か所	尖頭器、鉄片	中世の土坑は、すべて粘土が詰られ、墓と思われる。		
		中世	土坑 7基				
			井戸跡 2基	陶器、砾石、石造物			
			台地整形遺構 1か所	陶器、砾石			
			遺物集中地区 1か所	陶器、砾石			

千葉県文化財センター調査報告第279集

一般国道296号国道道路改良事業埋蔵文化財調査報告書2
—佐倉市高岡砦跡・大蛇麻賀多脇遺跡—

平成8年3月29日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター
発 行 千葉県土木部
千葉市中央区市場町1-1
財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2
印 刷 株式会社 エリート印刷
千葉県千葉市中央区市場町6-8